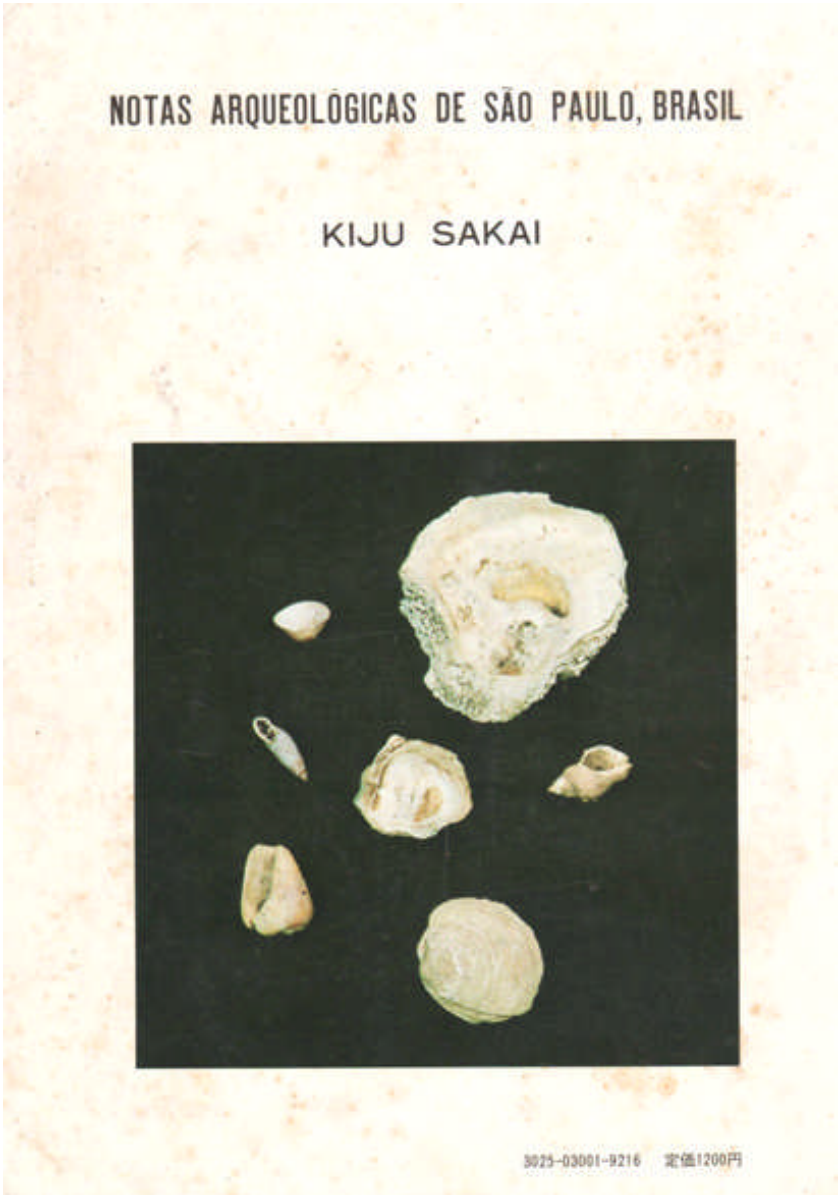
ブラジル・サンパウロ州考古誌

NOTAS ARQUEOLÓGICAS DE SÃO PAULO, BRASIL

KIJU SAKAI

酒井喜重



裏表紙

表紙写真

福本千賀太

目　次

まえがき ……酒井　亮重…… 7
序 ……八幡　一郎…… 9
序 ……北海道知事　堂垣内尚弘…… 10
序 ……後藤　寿…… 12

I　サンパウロ州の沿岸地帯

A　サントス地域の貝塚群 …… 15
B　イグアッペ地域の貝塚群 …… 17
（a）氷河期時代 18　（b）マングの発生 18　（c）古い貝塚 19　（d）焚火の跡 19　（e）貝の種類 19　（f）貝塚の大きさ 19　（g）リベイラ・デ・イグアッペの古い貝塚の発掘物 20
C　カナネア地域の貝塚群 …… 20
（a）地理的考察 20　（b）海岸の隆起後のカナネア 21　（c）貝塚の遺物含有層 21　（d）貝塚の容積 21　（e）貝殻の混成層 21　（f）食用以外の貝類 21　（g）焚火の跡、発火石 21　（h）貝塚の遺物 22　（i）土器 23　（j）人骨の埋葬状態 23　（k）地質学的考察 23　（l）イグアッペのマール・ペケーノ貝塚の発掘物 24

II　ジポブラ貝塚

A　ブラジル，インディオ文化研究同好会の会議 …… 26
B　ジポブラ貝塚発掘日記（4月21日～5月27日）…… 26
C　ジポブラ村の貝塚群の概況 …… 34
D　ジポブラ第1貝塚の発掘状況 …… 35
（a）貝塚の大きさ 35　（b）貝塚の表面 35　（c）第1断層面の説明 35　（d）第2断層面の説明 36　（e）第3断層面の説明 36　（f）第4断層面の説明 36　（g）貫通断層 36　（h）貝塚最底位の丘陵 36
E　人骨埋葬状態 …… 39
（a）第1号人骨 39　（b）第2号人骨 39　（c）第3号人骨 39　（d）第4号人骨 40　（e）第5号人骨 40　（f）遺棄人骨 40
F　遺物の種類 …… 41
（a）石器 41　（b）貝類 46　（c）動物 46　（d）植物 47　（e）カニ類 49　（f）魚類 50
G　ジポブラ貝塚のむすび …… 52

III　アレクリン貝塚

A　ブラジル・インディオ文化研究同好会のアレクリン貝塚発掘 …… 56
B　単独発掘 …… 57
C　アレクリン第1貝塚 …… 57
（a）地理的位置 57　（b）貝塚及び周囲の状況 57
D　発掘状況 …… 59
（a）第1号人骨は幼児骨を伴う 59　（b）第2号は幼児骨 59　（c）第3号人骨は幼児骨を伴う 60　（d）第4号人骨は幼児骨を伴う 61　（e）第5号人骨 62　（f）第6号人骨 62
E　アレクリン第2貝塚 …… 62
（a）第7号人骨の埋葬状態 63　（b）第8号人骨の埋葬状態 64　（c）第9号人骨の埋葬状態 65　（d）第10号人骨の埋葬状態 66　（e）第11号人骨の埋葬状態 66　（f）第12号人骨の埋葬状態 67　（g）第13号人骨の埋葬状態 67　（h）第14号人骨の埋葬状態 68　（i）第15号人骨の埋葬状態 68　（j）第16号人骨の埋葬状態 69
F　動物の埋葬 …… 69
（a）A動物 70　（b）B動物 70　（c）C動物 70　（d）D動物 70　（e）E動物 70　（f）F動物 71
G　作業場 …… 71
H　アレクリン第1・第2貝塚の人骨埋葬一覧表 …… 71
（a）埋葬の深さ 71　（b）埋葬方法 73　（c）埋葬の方位 73　（d）石塊の使用 74　（e）成人と幼児との関係 74　（f）副葬品 74
I　遺物の種類 …… 75
（a）カラムージョ 75　（b）石器 75　（c）骨器 76　（d）装身具の種類 78
J　アレクリン貝塚の動物編 …… 80
（a）ブジク 80　（b）コチア 80　（c）コアチ 82　（d）ラガルト 82　（e）ボルコ・ド・マット 82　（f）パーカ 84　（g）プレアー 84　（h）タツー 84　（i）アンタ 84　（j）グェアード 86　（k）コブラ・デ・ドゥアス・カベサス 86　（l）ツバロン 86

IV　サンパウロ州奥地の土塁

A　インディオ保護局の初代長官ロンドン …… 87
B　インディオ保護局 …… 87

C　リンスの土塁 …… 88
D　プロミッソンA塁 …… 91
E　プロミッソンB塁 …… 93
F　グアララベスの土塁 …… 95

V　グアラニー族の探検旅行記

（a） プレット川流域の探検 99　（b） ボアショカ貝塚 102　（c） イタテンス山脈のグアラニー族探検 103　（d） グアラニー族の居住地 103　（e） 仮屋の草舎 103　（f） 小さな饗宴 104　（g） グアラニー踊りに招待される 104　（h） グアラニー踊 105　（i） 土器の首飾 106　（j） グアラニー族の住家 107　（k） グアラニー語の数詞 107　（l） タチン 108　（m） タクワラの楽器 108　（n） グアラニー族の生活 109

VI　コロニア時代の考古学

A　栗原自然科学研究所 ……111
B　ブラジル・インディオ文化研究同好会 ……112
C　来伯された日本の考古学者 ……112

あとがき……113
参考文献……114
地図・写真・図索引 …… 4

Palavras do autor ……117

地図・写真・図の索引

地図 1 サンパウロ州……15
〃 2 サントス地域の貝塚群……16
〃 3 イタニアエンの地図……16
〃 4 イグアッペ及びカナネア地域の貝塚群……18
写真 5 リベイラ川のジポブラ貝塚……19
〃 6 パリクラス川のカンピナ貝塚……19
〃 7 イグアッペの古い貝塚からの発掘物……20
〃 8 チト貝塚の断層面……22
〃 9 第1ピラ・ノーバ貝塚……23
〃 10 ピラ・ノーバ貝塚の人骨……23
〃 11 マール・ペケーノ貝塚の発掘物……24
地図 12 ジポブラ村の貝塚群……25
写真 13 イグアッペ川のバボール……27
〃 14 スバウーマ貝塚……27
〃 15 バボールに薪の積み込み……27
〃 16 ジポブラ貝塚の全景……28
〃 17 貝塚の南側……29
〃 18 貝塚の北側斜面……29
〃 19 貝塚の南側……29
〃 20 日底小屋……29
〃 21 第2断層の発掘作業……30
〃 22 火の跡……30
〃 23 第3断層面……31
〃 24 第2断層面……31
〃 25 第4断層面……31
〃 26 鳥居博士と記念撮影……33
図 27 第1断層図……35
〃 28 第2断層図……37
〃 29 第3断層図……37
〃 30 第4断層図……37
写真 31 貫通断層面……38
図 32 貝塚の南北の断面図……38
〃 33 貝塚の東西の断面図……38
写真 34 貝塚の西側斜面の階段式掘……38
図 35 貝塚の平面各断層平面図及人骨埋葬位置……39
写真 36 第3号人骨の埋葬状態……40
〃 37 第5号人骨の埋葬状態……40
〃 38 ジポブラ第1貝塚の頭骨……40
〃 39 第1号人骨の埋葬状態……41
〃 40 第2号人骨の埋葬状態……41
〃 41 第4号人骨の埋葬状態……41
〃 42 石器の種類（1～30）……43, 44
〃 43 貝の種類（1～8）……45
〃 44 鯨の内耳骨製品……46
図 45 植物図（1～4）……47, 48
図・写真 46 カランゲージョの種類と爪……49
写真 47 魚骨の種類（1～7）……50, 51
地図 48 アレクリン貝塚の位置……55
写真 49 インディオ文化研究同好会の貝塚調査団……56
〃 50 貝塚調査団の発掘状況……57
図 51 アレクリン第1貝塚附近図及び人骨埋葬位置……58
写真 52 第1号人骨埋葬状態……60
〃 53 第2号人骨埋葬状態……60
〃 54 第3号人骨埋葬状態……60, 61
〃 55 第4号人骨埋葬状態……61
〃 56 第5号人骨……61
〃 57 第6号人骨……62
図 58 アレクリン第2貝塚周囲と人骨躯骨の埋葬位置……63
写真 59 第7号人骨埋葬状態（1, 2）……64
〃 60 第8号人骨埋葬状態（1, 2）……64, 65
〃 61 第9号人骨埋葬状態……65
〃 62 第10号人骨埋葬状態……65
〃 63 第11, 12号人骨埋葬状態……67
〃 64 第12号人骨の屈球関節……67
〃 65 第13, 14号人骨の埋葬状態……68
〃 66 第14号人骨埋葬状態……68
〃 67 第15, 16号人骨埋葬状態……69
〃 68 アレクリン貝塚の頭骨……69
〃 69 カラムージョ貝……75
〃 70 石器の種類（1～24）……77, 78
〃 71 骨器の種類（1～9）……79
〃 72 装身具の種類（1～4）……79
図・写真 73 ブジウ，斧，武器……81
〃 74 コチアと頭骨……81
〃 75 コアチと歯……81
〃 76 ラガルトと歯……83
〃 77 ボルコ・ド・マットと牙……83
〃 78 パーカと牙……83
〃 79 プレアと頭骨……85
〃 80 タツーと角質甲板……85
図 81 アンタ……85
図・写真 82 ヴェアードと角……85
〃 83 コブラ・デ・ドゥアス・カベサスと頭骨……86
〃 84 ツパロンと歯……86
写真 85 リンス土塁関係（1～6）……89, 90
〃 86 プロミッソンA塁関係（1～8）…91, 92
〃 87 プロミッソンB塁関係（1～4）…94, 95
〃 88 グアララベス土塁関係（1～3）…96, 97
地図 89 イタニアエン奥とイタチンス山脈のグアラニー族部落探検コース……99
写真 90 プレット川を遡る探検隊……101
〃 91 ボアショカ貝塚……102
〃 92 アゼイテ河畔の探検隊……103
〃 93 仮寝の草舎……104
〃 94 寝床の探検隊……104
〃 95 グアラニー族と探検隊……105
〃 96 長老夫婦……105
〃 97 グアラニー族……105
〃 98 首飾……106
〃 99 酋長の竹カゴ編み……107
〃 100 酋長夫婦……107
〃 101 タクワラの楽器……109
図 102 グアラニー語……108
〃 103 竹筒楽器の彫絵原図……108
写真 104 ボゴアスー貝塚の八幡先生……111

ブラジル・サンパウロ州考古誌

酒　井　喜　重

ま　え　が　き

北海道で生れ育った私は，学生のころ，道内の地名がアイヌ語で呼ばれているのに興味をもつようになった。アイヌの実態を知るのに白老のアイヌ部落に幾度も足を踏み入れたことがあった。

昭和９年（１９３４）５月に永住の目的でブラジルに移住した。サンパウロ州の奥地を旅行していると，地名ばかりでなく，動物や植物までが，土人語で呼ばれており，北海道との類似点の多いのに驚いた。又旅をしていると，至る所に遺跡や遺物が足元に見られるのに魅力を感じ，遂に古代先住民族のとりことなってしまった。

戦前，ブラジルに移住した日本人たちで，サンパウロ州の遺跡・遺物などを研究する団体を組織した。イグアッペ郡ジポブラの貝塚に巨費を投じ，約２ヶ月にわたっての発掘は先にも後にも行い得ない大発掘であった。イタチンス山脈にある陸産のかたつむりの貝塚発掘には，１年余の歳月をかけた。

これらの報告は昭和１４年（１９３９）に,『ブラジル・サンパウロ州内の考古学的調査』と題して，東京人類学会の好意で発刊していただいた。

それ以後も貝塚や遺跡を発掘し続けていた。

１９４１年８月に私は急遽一時帰国の途についた。同年の１２月に至って，第２次世界戦争勃発のためブラジルへの帰国がはばまれ，忌わしい戦争に振り回されてしまった。

同じころ，蒐集した遺物や発掘した貴重な資料の数々は．サンパウロの栗原自然科学研究所に収蔵されておったが，ブラジル国の参戦で敵国側の資産凍結令が発令されたため，ブラジルの移住者は極度におびやかされていた。研究所に保管されていた遺物の処置に，当時の研究所々員一同は困惑してしまった。

特に発掘した人骨の行き先については，思案投首となった。所員の大窪文秀氏は移転する先々に資料の一部を持ち運び，人骨は住宅の屋根裏に隠匿し続けていた。橋本梧郎氏は資料の大部分を植物の標本箱に混ぜてパラナ州の奥地に運び去り，箱詰めのまま積み重ねて保管していた。

平和がやって来た。私も日本からブラジルに戻って来た。考古学資料が手元に戻りはじめた。かつて母国で夢にまで見た人骨や石器土器は，約４０年振りに私を迎えてくれたが，私の年齢は容赦なく重ねられていく。有意無意にかかわらず，未発表の遺跡・遺物をこの

まま放置するならば永久に不明の闇に投じたことに等しくなり，先住民族に申訳けない感情にとらわれたことは事実である。

２度目の渡伯は，これらを整理するために帰伯したような結果となってしまった。そして色々な困難をのり越えて，報告書出版を決意した。

この時にあたって色々な人から心温る援助・協力を賜わったことに厚く御礼をいたします。とりわけ大窪　橋本両氏には戦争中の苦難に耐えながら，これら遺物を保管して下すった。その真の友情によってこの報告書作製が可能となった。又先般橋本氏が貝塚発掘の記録帳，スケッチ・ブックなどを見付け出して下すったので更に詳細にわたって検討することができた。感謝に堪えません。

以前に御世話になった元東京大学講師八幡一郎先生には著者の実情をくみとられ，再び報告書出版に御協力をいただき，その上監修に当られたことは身の光栄であります。

パラナ開拓農業博物館々長に就任された橋本梧郎氏からは，多忙中にもかかわらず，植物関係，原稿の校正訂正など全面的に協カを得た。サンパウロ大学古代研究室の老古学教授カイオ・デル・リオ．ガルシア博士（Ｉｎｓｔｉｔｕｔｏ ｄｅ Ｐｒｅ－Ｈｉｓｔｏｒｉａ，Ｄｒ．Ｃａｉｏ Ｄｅｌ Ｒｉｏ Ｇａｒｃｉａ）は貝塚より発掘した動物骨片の分類，サンパウロ大学生物学研究室のジヨゼー・レイス博士（Ｉｎｓｔｉｔｕｔｏ Ｂｉ

ｏｇｉｃｏ，Ｄｒ．Ｊｏｓｅ　Ｒｅｉｓ）には貝類の分類，サントスの魚博物館セバスチオン・メデイロ博士（Ｄｒ．Ｓｅｂａｓｔｉａｏ Ｍｅｄｅｉｒｏｓ）には魚骨片の分類，ロンドリーナ大学地賀学教授中川原よしや氏には石器類の石質鑑定，図面関係では栗原稔昌氏などの諸氏をわずらわした。心からの御好意に対して厚くお礼申し上げる次第である。

酒　井　喜　重

序

本書はブラジルのサンパウロ州内に移民として渡った酒井喜重氏が、同志と共に州内各地でインディオの祖が遺した貝塚や土塚を調査した血の滲むような調査録である。

しかも第２次世界大戦に際しブラジル国の参戦の結果，酒井氏らが苦心して集めた彪大な調査記録，発見資料，写真などを敵産として没収されることから免れるため栗原自然科学研究所の同志の手により隠匿保管されて，戦後に及ぶという異常な状態に遭遇した。戦争中一時帰国した酒井氏は夢にもこれを忘れず，平和回復後再び渡伯して自家の事業を整えながら，３０年以上手許を離れた資料を再び整え，ここにその第一冊の公刊を行なった

のである。

その熱意は辛酸苦渋を物ともせず，ここに整然なる報告書を世に問うた。所謂専門学者といえども成し得ざることを成就した氏の態度には学ぶべきものが多い。

アンデス文明と呼ばれるペルー，エクアドル，コロンビアに及ぶアンデス山脈西斜面太平洋岸に拡がる古代文化に関しては中央のメキシコ付近と並んで早くから考古学研究が進展し，その絢爛たる文物がわが国においても充分に紹介されている。固よりアンデス山脈の東斜面から大西洋岸に至る広大なブラジルにあっても考古学研究は絶無ではなかったが，まだ殆んど開拓の緒についたばかりと言うことができる。

その地に農業を主とする日本移民が入り始めて，昨年は７０年目として記念された。その中に栗原自然科学研究所を中心とする人々の学問活動は余り顕彰されなかったようである。各国移民はそれぞれの形でブラジル国に貢献したと思うが，わが国移民の間にこのような地道な学間研究に精進したことは全く異色であると敬意を表さざるを得ない。近年ブラジルの大学，博物館などの研究機関の手による考古学研究が積極的，本格的になろうとしているようである。酒井氏らの戦前に於ける業績は当然高く評価されるようになろう。酒井氏が手掛けた遺跡はなお他に多々あり，氏はこれらの取纏めにも依然旺盛な意慾を示しておられる。

先づ本書を日伯の学界に送られるに至ったのは利害を離れて欣然その出版を引受けられた六興出版社長賀来寿一氏の好意によるものである。著者とともに記して謝意を表わす次第である。

昭和５４年１０月

八　幡　一　郎

序　　文

昭和５０年９月，私は，南米在住の北海道出身者の激励と視察を兼ね，ブラジルとアルゼンチン両国を訪問しました。

そして，現地で本道出身者が幾多の苦難に耐え，たくましく生きぬき、現在，それぞれの分野で御活躍されている姿に接し，深い感銘を覚えたのでありますが，それとともに，久しぶりに古い友人，知人とめぐり合い，旧交を暖めることができたことは，私にとって望外の喜びでありました。本書の著者　酒井喜重氏も実はその中のおひとりでありました。

私はサンパウロにおいて，実に５０年振りに氏と再会を致しました。そして，いまなお，バイタリテイに富んだ氏の気質は少しも変わらず，少年の昔にひき戻されたような錯覚す

ら覚えたものでした。

幼い頃，酒井家と私の家とは隣り合わせでもあったため，よく遊んでもらいましたが，氏はまた札幌一中（現札幌南高校）の私の三年先輩という間柄でもあったので，先輩としての温情あふれる御指導をも受けたものです。

氏は，昭和初年明治学院に学ばれ，後にブラジルに新天地を求めて勇躍故国をあとにされたのでありますが，その後数々の障害を克服し，今ではサンパウロ近郊でご子息とともに，手広くぶどう園と花園とを経営されておられます。

前述のように私が久し振りに氏にお会い出来た折，氏はブラジルの珍しい沢山の草花の標本を寄贈してくれましたので，私はその標本を北海道開拓百年を記念して建設された札幌市郊外江別市にある開拓記念館に陳列させ，道民はもとより広く日本全国の方々に観賞していただいております。

氏は渡伯後，多忙な本業のかたわら考古学を学ばれ，これまでに多くの貴重な論文を発表されてこられましたが，このたび，サンパウロ州の貝塚や古墳に関する研究の成果を一冊にまとめられ出版されることになりました。

このことは，考古学の分野に新風を注ぐものとして，きわめて意義深いものを感じます。

氏が花弁園芸や果樹の仕事の合間を縫いながら，学究の徒となってこのような貴重な研

究を重ねられた蔭には，いい尽くせぬ苦労があったことでしょう。このことは本書のいたるところ，行間ににじみ出ております。

私は，本書が考古学の発展に大きく貢献することを信じて止みません。

ここに序文を草し，酒井氏の丹精こめた労作を称えるとともに，考古学に関心を持たれる方に広く読まれることを希望致します。

昭和５３年５月　　北海道知事　堂垣内尚弘

序

先年ブラジルに移住した親友酒井喜重君が，此度彼地に於ける考古学的研究の一端として，貝塚の発掘調査其他を発表することになった。

貝塚並びに墳墓の発掘，人骨の調査など詳細に亘っての研究，私は寡聞にして彼地に於ける此の種の研究報告を知らない。それだけに君の今回の研究発表の極めて重要なことを篤と感ずる次第である。

君は昨年伴侶を失い，その憂愁の中にこの稿を草している。君は人に越えた努力家であ

るということは万々知りつつも，亦その努力の余りに大なることに驚嘆せざるを得ない。

君はその青年時代をブラジルに過ごした。ブラジルに於ける老古学研究は既に，その時に始まっている。１９６７年２月，君が再びブラジルへ立っ時，私は『ヒロシマの文化第二号』に寄せて『さらに考古学研究の飛躍を期待する』と言ったのも，君の超人的努力の持主であることを篤と承知しての言葉であった。渡伯十余年，その期待に添う如く此度それが研究をものすることは真に感激に堪えない次第である。

『開拓は誰でも出来る。しかし考古学は君以外にやるものがない』。私は便りの中に，こうした言葉を加えることを忘れなかった。君の不屈の精魂を信じていたからである。しかし，想えば，君は稀に見る超人的な強固な意志でこれを貫いてきたのではあるが，その半面，伴侶に不知不識のうちに無理な負担がかかったのではないかと，反省もさせられて何かもの寂しい。常に献身的な協力を惜しまなかった伴侶であっただけに，その心境一入深いものがある。故郷を離れて伴侶を失ったその心情，察するに余りあり近くであれば飛んで行って，抱きあって思う存分泣きたい感傷でもある。

その哀愁を乗越えて此度ものしたこの労作，感激以外の何ものでもない。

曾て幾千年前否幾万年前かにユーラシヤ大陸に居住していた人類，その一分派として南北アメリカに遣ったそれが，極めて優秀な文化を遺していたということは，私は酒井君と

共に同じ研究の理念でもあったのだ。それが近世白人の移住によって，その文化までが，抹殺されてしまった。近世南北アメリカに侵入した現在の白人以前に此の地に居住し独特の文化を持ったその貴重な記録が，かたくななスペインの一宣教師の暴挙によって焼拾てられた。このことは当に人類の痛恨事である。この聖典の焼却によってそれまでの原住民の文化の解読の途は全く断たれてしまったのである。今君の手によって，貝塚，更に墳墓，それに伴なう人骨の研究と，その失なわれた古代文化の真価が徐々に究明されつつある。マヤ文化・インカ文化は部分的には既に紹介されている。白人宣教師の暴挙がなかったなら，これらの文化はもっと明らかになったのである。

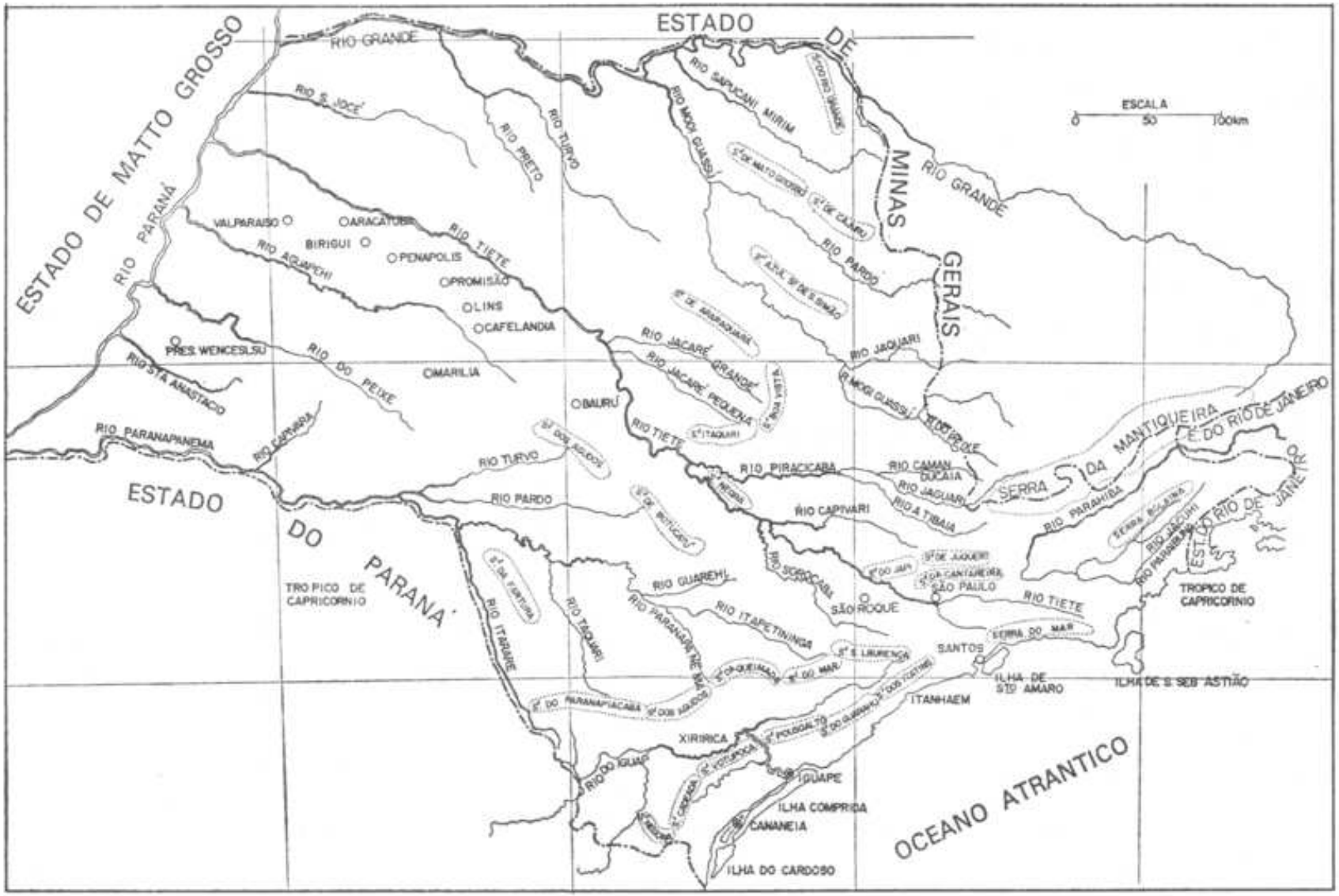
曾て我々の主張する白人以前に地上に遺された文化の鍵は，君の基礎的研究によって速やかに開かれて行くことを多いに期待するものである。

１９７８年5月１８日　　後　藤　寿　一

Ｉ　　サンパウロ州の沿岸地帯

サンパウロ州の地図を拡げると，初めに海岸地帯と海岸山脈が目につく。海岸山脈を境にしてイタニアエン（Ｉｔａｎｈａｅｍ）郡内にあるペルイベ川（Ｐｅｒｕｉｂｅ）は大西洋岸に流れている。この沿岸は南のパラナ州（Ｐａｒａｎａ）の境まで伸びている。サンパウロの高原を流れている多くの川はパラナ川に合流している。大西洋沿岸にはリベイラ・デ・イグアッペ川（Ｒｉｂｅｉｒａ ｄｅ Ｉｇｕａｐｅ）が流れ込んでいるが，この川には海岸山脈から孤立している山脈，即ちイタチンス（Ｉｔａ－ｔｉｎｓ），バナナール，（Ｂａｎａｎａｌ），ボア・ビスタ（Ｂｏａ Ｖｉｓｔａ），グアラウー（Ｇｕａｒａｄ），ポウゾ・アルト（Ｐｏｕｓｏ Ａｌｔｏ），カデアダ（Ｃａｄｅａｄａ）などの山脈から流れ出ている川が合流している。

サンパウロ州の貝塚は，大西洋沿岸やこの沿岸に河口をもつ諸川の流域に散在しているので，一応次の地域に区分することができる。即ち，サントス（Ｓａｎｔｏｓ），イグアッペ（Ｉｇｕａｐｅ），カナネア（Ｃａｎａｎｅａ）などの三地区の貝塚群である。


ESTADO DE MATTO GROSSO
ESTADO DE MINAS GERAIS
ESTADO DO PARANA'
ESTADO DO RIO DE JANEIRO
OCEANO ATRANTICO
RIO GRANDE
RIO S. JOSÉ
RIO PRETO
RIO TURVO
RIO SAPUCAHY MIRIM
RIO MOGY GUASSU
RIO PARANÁ
RIO TIETE
RIO AGUAPEHY
RIO PARDO
RIO JACARÉ GRANDE
RIO JACARÉ PEQUENA
RIO JAGUARI
RIO DO PEIXE
RIO STA ANASTACIO
RIO PARANAPANEMA
RIO CAPIVARY
RIO PIRACICABA
RIO CAMANDUCAIA
RIO PARAHYBA
RIO GUAREHY
RIO ITAPETININGA
RIO SOROCABA
RIO ITARARE
RIO TAQUARI
RIO PARANAHYBUNA
RIO DO IGUAPE
VALPARAISO
ARACATUBA
BIRIGUI
PENAPOLIS
PROMISÃO
LINS
CAFELANDIA
PRES. WENCESLAU
MARILIA
BAURU
SÃO ROQUE
SÃO PAULO
SANTOS
ILHA DE STO AMARO
ILHA DE S. SEBASTIÃO
ITANHAEM
XIRIRICA
IGUAPE
ILHA COMPRIDA
CANANEIA
ILHA DO CARDOSO
SERRA DO MAR
SERRA DA MANTIQUEIRA
TROPICO DE CAPRICORNIO
ESCALA
0 50 100km

地図 1　サンパウロ州

Ａ．サントス地域の貝塚群

サントスには地図２に示しているように，数多くの貝塚が印されているが，総て破壊されて，今日ではその痕跡すら認められないのである。これらの貝塚は１５５５年ごろにジェズイッタ派の僧，ジョゼー・デ・アンシェータ（ＪＯＳＥ ＤＥ ＡＮＣＨＩＥＴＡ）が土人の教化と共に貝塚の位置について調査した。

古くから住む住民の報告や，サントスのパケター（Ｐａｑｕｅｔま）で長年にわたって石灰の製造を営んでいたジョアキンラシャビェル（ＪｏａｑｕｉｍＸａｖｉｅｒ）の報告に基づいて記録したものである。

貝塚を破壊し，石灰を製し，サントス，サンパウロ，サン・ビセンテなどの開発が進むにつれて，家屋，事務所，寺院などの建築資材に利用された。従って，この地帯の貝塚の実態報告は極めて少ない。

サントス地域内で貝塚群の主流をなす地帯はイタニアエン（１ｔａｎｈａｅｍ）で，ツピー語で，岩囲いを意味する。

イタニアエン川の河口から８ｋｍ遡ったところに，プレット川（Ｐｒｅラｔｏ），ブランコ川（Ｂｒａｎｃｏ），アグワペウ川（Ａｇｕａｐｅu浮草の名称）が合流している。この３本川の流域にも貝塚が点在している。アグワペウ川流域の貝塚は大きくないが，海岸か

ら５０ｋｍの遠距離にあるカンブリピタンガ川（Ｃａｍｂｕｒｙｐｉｔａｎｇａ白い乳の川の意）の流域にある貝塚は大きい。

海岸から２０～３０ｋｍ離れた海岸山脈の麓近くにも貝塚が散在している。この山脈の麓から流れているプレット川は，紆余曲折しながらボアシッカ丘（Ｂｏａｃｉｃａ），ボツルス丘（Ｂｏｔｕｒｕｃｕ，大山脈の意），ペドラス丘（Ｐｅｄｒａｓ）などを通ってブランコ川に合流している。

この流域に近接している丘陵の貝塚を発掘してみると，その底面は丘の表土面に達するので，丘陵のふちに貝塚を構成していることが解る。貝塚は川の流域より少し離れて存在している。

貝塚の大部分は沼地，マンゲ林（Ｍａｎｇｕｅ，マングローブ），入江などに囲まれて発見される。運河や入江は塩水又は半塩半淡水であって，周囲はマン

地図 2　サントス地域の貝塚群　▲貝塚

地図 3　イタニアエンの地図

ゲが生えている。この中に今日でもカキ貝，アメイジオア貝，ベルビゴン貝が生育している。

貝塚を構成している貝類はカキ貝（Ｏｓｔｒａ，学名０stres brasiliana)，ベルビゴン貝（Ｂｅｒｂｉｇao，学名Lucina jamaicencia,イガイの一種）アメイジオア貝（Ａｍｅｉｊｏａ，学名Azara priscaイタヤガイの一種）などが大部分である。

アルベルト・レーフグレン（ＡＬＢＥＲＴＯ ＬｏＦＧＲＥＮ）はサンパウロ地理地質学協会の報告書（１８９３年）に，イタニアエン貝塚やプレット川沿岸に在る２個所の貝塚を調査し，貝殻はアメイジオア貝（イタヤガイ）であったと報告している。

海岸山脈から水が流れてくるので，川床に泥が溜り，軟体動物は繁殖することができない。

川上から激しく流れてくると，川は氾濫してカニまでが海に流れ込んでしまう。こんな条件のもとで貝塚の存在を如何に説明できようか？

先住土人は呑気で，奇抜な思いつき屋で，気まぐれに海岸に棲んでいる貝を採取して，４５ｋｍ，５０ｋｍ，１５０ｋｍの遠い道程を徒歩でイタニアエンの奥地の丘まで，わざわざ運び，カキ貝やアメイジオア貝の山を作ったのであろうか？　このような物語りは理窟に合わない。理窟に合う説明をするのには，大昔に遡って考察しなければならない。

１９世紀のころ，ヘルマン・フォン・イエリング（ＨＥＲＭＡＮ ＶＯＮ ＩＨＥＲＩＮＧ）や，フオン・ジーミラヅキー（Ｉ．ＶＯＮ ＳＩＥＭＩＲＡＤＺＫｌ）の貝塚の起源についての研究では，第三紀の初期から徐々に始まり，第四紀にかけて貝塚は構成された，と説明している。

又貝塚発掘で経験豊かなカルロス・ラス（ＣＡＲＬＯＳ ＲＡＴＨ）も，同じように第三紀説を述べている。

幾世紀にも亘って，山脈から流れてくる土砂や塵芥，海からの砂などが交互に沈積して，マンゲが生育するようになった。海水が浸入してくる入江や沼地に，マンゲの痕跡が遣っていることからして，この地域一帯は海水に覆われて，水面にマンゲ林が繁茂していたと推察される。マンゲ林は貝類や魚類の最も適した棲息場となり，カキ貝，ベルビゴン貝，アメイジオア貝など，その他の生物も繁殖するようになった。

海岸山脈と孤立しているイタチンス山脈（Ｉｔａｔｉｎｓ白石）の狭間から流出している川は，合流しながらペルイーベ川（Ｐｅｒｕｉｂｅ，鱶の海）となって大西洋岸に流れている。

ペルイーベの以西に流れるグワニヤニヤ川（ＧｕａｎｈａｎｈＡ 走者）はイタリリー川（Ｉｔａｒｉｒｉ恐ろしい岩）に合流して，更らに奥に向って流れ，ビグア（Ｂｉｇｕ

Ａ 鵜）を経て，リベイラ・デ・イグアッペ川に合流している。

川の流域から少し離れたビグアで，著者はカキ殻の貝塚を発見したことがある。ペルーイベから６０ｋｍ余の地点で，陸地が半円を描いており，前側の低地にバナナが植えてあった。その半円の表土より約３０ｃｍの深さにカキ穀の層があり，その層は極めて薄く，面積は確かでないが広範囲ではなかった。周囲から石器や土器片は見付からなかった。厚い表土に覆われていたので確認し難かった。この種の貝塚は不明のまま無数に存在していると推察される。

永い期間にわたって貝塚が放置されていると，大部分の貝塚は密林に覆われていった。大きなフイゲーラ（Ｆｉｇｕｅｉｒａポルトガル語で，イチジク属の木）や，巨木が貝塚上に生えており，木の根は貝殻の層を貫ぬき，地中探くに張り込んでいた。

大暴風雨で大樹が倒れて，貝塚の内層の位置を狂わせ，穴を開け，内層に含まれていた遺物が表面に現われることもあった。そのために貝塚内に穴や坑道ができ，後に爬虫類や齧歯類の棲家になった。

半野蛮人や近代人の狩猟者が動物を追い廻している間に，近代的な使用物の破片を放棄して行くこともある。これがたまたま貝塚内に含まれて，調査する学者によって間違った報告をされることもあった。

Ｂ　イグアッペ地域の貝塚群

独乙人の**リカールド・クロネ**（ＲＩＣＡＲＤＯ ＫＲＯＮＥ）は１９０５年ごろサンパウロ州地理地質学協会の会報に「イグアッペのリベイラ川渓谷の人種学的報告」と題して発表しているので，参考迄に紹介する。

『　リベイラ・デ・イグアッペ川（Ｒｉｂｅｉｒａ ｄｅ Ｉｇｕａｐｅ）の流域や海岸地帯には数多くの貝塚がある。これらの貝壊を古い貝塚群と新しい貝塚群とに分けることができる。

古い貝塚群は大西洋沿岸から３０ｋｍ以上離れた貝塚や，南方のスバウナ丘（Ｓｕｂａｕｎａ）にある貝塚，コルデイロ貝塚（Ｃｏｒｄｅｉｒｏ），更らに東方のイタチンス山脈の麓にある貝塚などである。

（ａ）氷河期時代

最初に貝塚が構成され始めたころは氷河期時代で，ウナ・ド・プレラド川（Ｕｎａ ｄｏ Ｐｒｅｌａ・ｄｏ）とウナ・ダ・アルデア川（Ｕｎａ ｄａ Ａｌｄｅａ）の合流地域，

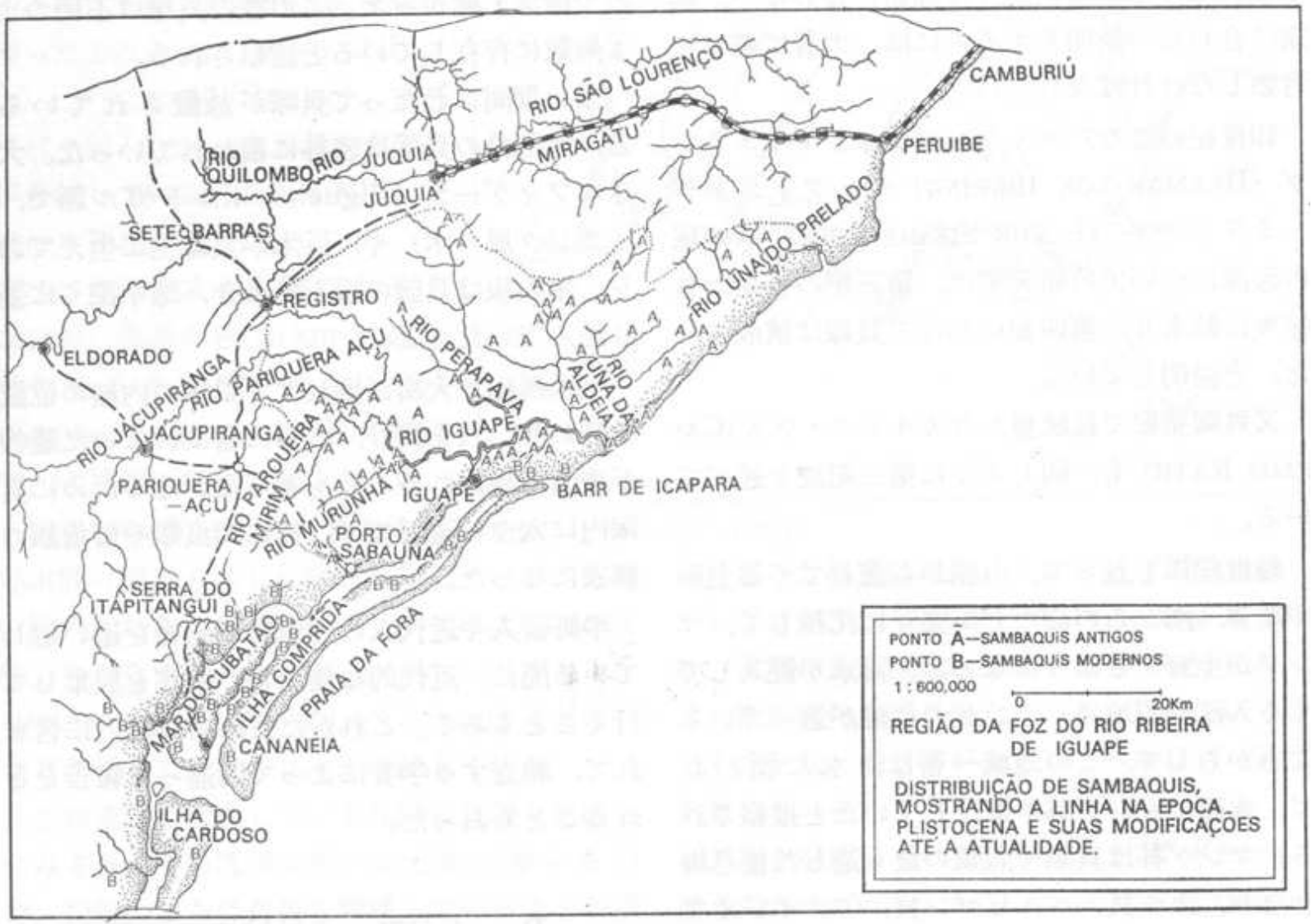
イグアッペの入江，ジャクピランガ川（Ｊａｃｕｐｉｒａｎｇａ，赤いジャク鳥），パリケラ・アス（Ｐａｒｉｑｕｅｒａ－ａｓｓｕ），パリケラ・ミリン（Ｐａｒｉｑｕｅｒａ－ｍｉｒｉｍ），コルデイロ（Ｃｏｒｄｅｉｒｏ）などの川は，海水に覆われていた。又入江の島や今日でも名の知られている島々（Ｊｕｒｅａ，Ｃａｉｏｖａ，Ｊｉｐｏｂｕｒａ，Ｇｕａｍｉｒａｎｇａ，Ａｌｄｅａ，Ｃａｍｂｉｃｈｏ）は海上に浮んでいた。

その後の地殻変動によって地殻が隆起したので，海水は後退した。海岸山脈の花崗岩や片麻岩に波状の痕跡が今でも見られる。

（ｂ）マンゲの発生

陸の隆起にもとづいて，川の水は徐々に流れ，その水流の中に塵や土が混り，満潮干潮のつど海底に溜り，何世紀にもわたって海からの砂礫，山からの塵土が繰返して蓄積され，遂に海面上に達する。即ち今日に見られるような海岸になって，塩水に育つマンゲ（Mangue Rhizophora mangle）やシリウバ（Ｃｉｒｉｕｖａ学名Ａvienia nitida）の植物が繁殖するようになった。

潮の干満は膨大な砂を運び，新しい土地をつくった。即ちパリケラ・アス，ムムーナ（Ｍｕｍｕｎａ），ペロウパバ（Ｐｅｒｏｕｐａｖａ）などの川の渓谷に数ｋｍの広さにわたっ



地図 4　イグアッペ及びカナネア地域の貝塚群

て，この現象が見られる。

（ｃ）古い貝塚

最も古い貝塚は昔の海岸線にて構築されている。カキ貝の棲息地は泥まみれで半塩半淡の水中にあり，岩が多く，マンゲの根がはびこっていて，その中で貝類が繁殖していた。貝塚人は好きなだけ貝を食べ，喰いつくすと，その貝殻山を捨てて，新しい場所に移って生活を続けた。このように川上でつくられた貝塚は最も古いものである。

（ｄ）焚火の跡

貝塚の中に火を使った跡が見られた。灰黒色になった塊の中に魚の鱗，骨が混っていた。焼け跡の大きさは４ｍ以上の塊をなし，その厚さは２０ｃｍ　もあった。

（ｅ）貝の種類

古い貝塚に数種類のカキ殻が内蔵されている（Ostra brasiliana，０．Ｖirginica，　０．Ｐuelchana，０．Ａrborea）。

この内でビルジニカのカキ殻が多かった。アルボレアのカキ貝は，マンゲの木の根に附着しているので知られている。

カキの外にアメイジオア貝（Ａｍｅｉｊｏａ 別名Ｓｕｒｕｒｕ）は貝塚に薄い層をな

していた。この貝は３０～６０ｃｍの深さに棲んでいて，砂を掘り起すと，貝は姿を現わし，足を拡げ，長い舌を出すような恰好をして別の砂地に隠れる。真珠貝のように光沢がある。ジャクピランガ川（Ｊａｃｕｐｉｒａｎｇａ）の第４貝塚にこの貝殻が多かった。

（ｆ）貝塚の大きさ

貝を喰べて養える人口の概略計算をこころみてみた。

２０Ｌのカキ殻から殻剥ぎして，肉だけにすると７４０ｇになる。１ｍ立法の貝から３７ｋｇの肉がとれる。貝塚から出土する魚骨や獣骨は想像できないので，これは除外する。カンピナ（Ｃａｍｐｉｎａ）の第５貝塚は，古い貝塚なのでここに引例する。

６９２ｍ３に含まれる肉は，２５，６００ｋｇの量となる。貝塚人が１日に５００ｇの肉を喰べたと仮定すれば，カンピナ貝塚の山を喰いつくすのには３６年の歳月を要することになる。この計算は１家族単位であるが，その員数は不明である。

（ｇ）リベイラ・デ・イグアツペの古い貝塚からの発掘物（写真７説明）

Ｎｏ．１，２　　石英の投槍先　カブテーラ貝壌

Ｎｏ．３　　石英の投槍先　カンピナ貝塚

Ｎｏ．４　　破削用の石英　カンピナ貝塚

Ｎｏ．５，６子供の犬歯と第１臼歯カプテーラ貝塚
Ｎｏ．７　　角岩のファーカ（ｆａｃａはナイフ）カラコール貝塚
Ｎｏ．８～１１　石鏃　カンピナ貝塚
Ｎｏ．１２　　火を起す黄鉄鉱石　カンピナ貝塚
Ｎｏ．１３－１８　石鏃　カブテーラ貝塚
Ｎｏ．１９　　石製ノミ　カラコール貝塚
Ｎｏ．２０，２１石のフアーカ　ジポプラ貝塚
Ｎｏ．２２　石のフアーカ　マノエル・フランコ貝塚
Ｎｏ．２３石のファーカ　バイコー貝塚
Ｎｏ．２４ 貝の口を間ける道具 カエテー・ミリン貝塚
Ｎｏ．２５ 貝の口を開ける道具モレッテ貝塚
Ｎｏ，２６ 貝の口を開ける道具ジポブラ貝塚

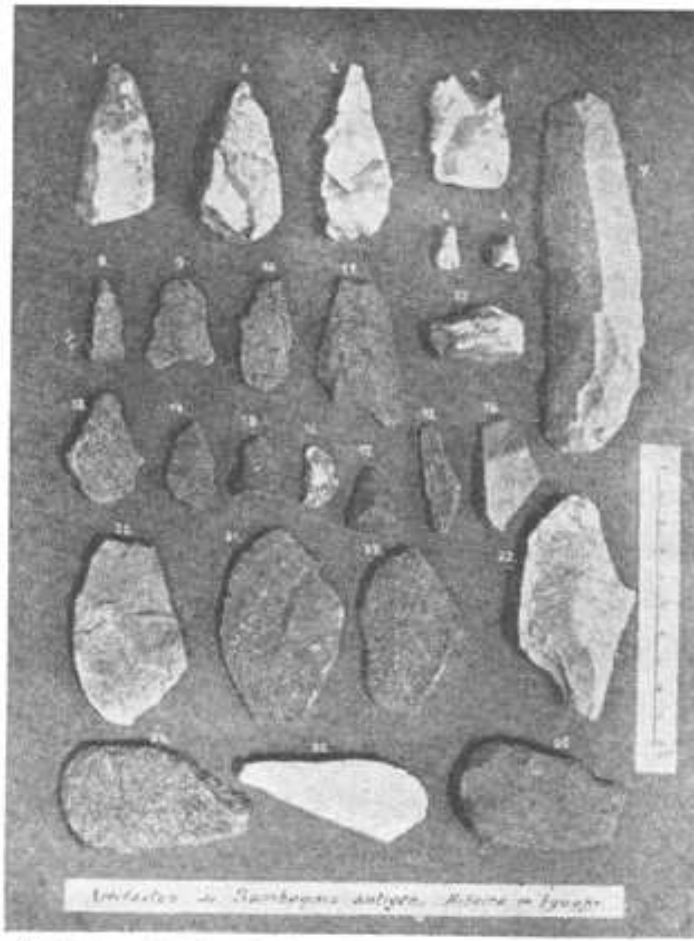


写真７　イグアッペの古い貝塚からの発掘物

Ｃ．カナネア地域の貝塚群

カナネア地域に点在する貝塚は新しい貝塚であって，構成している貝殻は，主にベルビゴン貝（Ｂｅｒｂｉｇａ０，イガイの一種）が大部分である。

古い貝塚は川上に在って，次第に川下に向ってある貝塚は，それだけ新しい時代のものとなる。

（ａ）地理的考察

或る時代の海岸線は，ムムーナ川（Ｍｕｍｕｎａ）の南東にあるコルデイロ丘（Ｃｏｒｄｅｉｒｏ）から始まって，北西のイグアッペ丘やスアミリン（Ｓｕａｍｉｒｉｍ）の北，ジュレア丘（Ｊｕｒｅａ）にかけて通っていた.。

それ以後に州が海面上に浮き上ったのは，イリヤ・ド・マール（Ｉｌｈａ ｄｏ Ｍａｒ）とスアミリン（Ｓｕａｍｉｒｉｍ）の州である。この地帯はカキ貝よりもベルビゴン貝の繁殖に最も適した地域である。

リベイラ川の河口には，洪水波浪によって崩壊した砕屑が沖積して三角洲ができた。

川は粘土を掘り出して流し，海流は長い海岸線にそれを運んで累積し，南東の方に向って細長いイリヤ・ド・マールができた。海流の力で削りとられてできたのがマール・ペケーノ（Ｍａｒ ｐｅｑｕｅｎｏ）である。

（ｂ）海岸隆起後のカナネア

海岸の隆起によって，スバウーナ（Ｓｕｂａｄｎａ）とムムーナ（Ｍｕｍｄｎａ）は，水の流れで中断された。右側のウナ・ド・プレラード川（Ｕｎａ　ｄｏ　Ｐｒｅｌａｄｏ）と左側のウナ・ダ・アルデア川（Ｕｎａ　ｄａ　Ａｌｄｅａ）は合流し，イグアッペ丘とジュレア丘は陸につながった。

イリヤ・ド・マールに初めてマンゲが生えたのは、１０００年以前のことであり，そのころからこの地域に貝塚の積成が始まった。

丘の側に入江ができると，その砂地にベルビゴン貝が生育し，後に広域にわたってマンゲ林が繁殖するようになると，カキ貝，アメイジオア貝，カニ類などが棲息するようになった。魚類ではタイーニヤ（Ｔａｉｎｈａ　学名Mugil brasiliensisボラ科），パラチ（Ｐａｒａｔｉ　学名Mugil uremaボラ科）などが棲息するようになった。
これらの貝類，魚類，カニ類の廃棄物は総て貝塚の中に見られる。

永い期間にわたって，貝塚の近くに棲んでいた或る種類の軟体動物で，消滅してしまったものもある。

（ｃ）貝塚遺物含有層

貝塚の中に一つの層をなすものに色々な層がある。例えば，火を使った跡の木炭層，灰色を帯びたカニ（Ｓｉｒｉ～Ｇｏｉａ　学名Cronius Ruber）の殻層，カキ貝の内でも光

沢のあるスルルー貝の層，岩間に棲む棘皮動物 のウニ（Ｐｉｎｄａ 学名Echinometra Subanagularis）の刺の層，などが見られる。

（ｄ）貝塚の容積

海に囲まれていた丘陵が陸の隆起で陸続きになった以後に，新しい貝塚ができた。狭い丘陵に住んでいた貝塚人の一家族は小さな貝塚をつくっていた。

家族が大形化し，親子兄妹や親族などの集団になると，双子貝塚とか大貝塚を構成するようになった。

貝塚の容積にも大少あるが，古い貝塚は一般に小さい。稀に１，０００ｍ3のものもある。新しい貝塚では高さが２６ｍで容積が１０，０００ｍ3の巨大な貝塚がある。

最も大きな貝塚としては，パラナグワ湾（Ｐａｒａｎａｇｕａ）のボグアスー（Ｂｏｇｕａｓｓｕ）の貝塚が，高さは２５ｍ，容積は１２０，０００ｍ3であった。ビラ・ノーバ第２貝塚－（Ｖｉｌａ ＮｏｖａＩＩ）は１１，０００ｍ3，カナネア市街地の前側にあるノーブレガ（Ｎ６ｂｒｅｇａ）の貝塚は６０，０００ｍ3，カルドーゾ島（Ｃａｒｄｏｓｏ）のペードロ・ルイス川（ＰｅｄｒｏＬｕｉｚ）の貝塚は３１，５００ｍ3である。

（ｅ）貝殻の混成層

新しい貝塚の断層を見ると，カキ貝殻層の下位にベルビゴンの貝層があり，次に又カキ

貝殻の層が交互に挟まっている。カキ殻の層はカキだけが層をなしているが，ベルビゴン貝の層には他の貝殻が混っている。

（ｆ）食用以外の貝類

腹足類の蝸牛貝は破壊されて貝塚の中に混っていた。その種類はまことに多い。(Troehus, Ｓ trombus, Ｃ assis, Triton,Purpura,Murex, Ｏ livancilla,Voluta,Ianthina, Bullia)。

これらの腹足動物は食べる目的で採取したのではなく，魚釣りの餌に使われたものと推考される。更らに小さな腹足類（Neritina,Terebra, Littorina,）の貝類も食用としてではなく，他の表面に附着していたものを無意識に採取したのであろう。

有肺類の一種であるカラムージョ（Ｃａｒａｍｕｊｏ，かたつむりの一種）が貝塚の表面に見られるのは，貝塚人が去った以後に周囲の湿地から這い上ったものであろう。

（ｇ）焚火の跡，発火石

新しい貝塚でも日々に火を燃していた痕跡のあることは，古い貝塚と同じである。火を使った位置は定まっておらず，広い貝塚上に黒い条を附けたように泥がかかっていた。火の跡に魚骨，鳥骨，獣骨などが暗灰色の塊りとなって混っていた。木炭片や土は変化して貝殻に附着していた。火を使った跡に石片を見付けたが，貝塚人が武器を作ったり，修理

などをしていたであろうと思われる。

ジャクピランガ川の貝塚で火をすり起す石，即ち硬度の高い椎実団栗大の黄鉄鉱石２個を発見した。私はこの２個の石を色々な方法で打ち合わせたり，あるいは交互に摩擦することによって目的を達することができた。ビラ・ノーバ貝塚でも同種類の石を見附けた。

古い貝塚でも褐鉄鉱，黄鉄鉱の破片，オレンジ色の酸化鉄などを貝殻と泥の塊の中で見付けた。

（ｈ）貝塚の遺物

リベイラ川の古い貝塚人と海岸地帯の新しい貝塚人とは，遺物の同形態をなしているので，同類の系統に属する種族であろうと推察される。

貝塚から発掘した主な遺物は石斧である。古い貝塚のものは刃部を滑らかに磨き，胴部以上は削って細めに作っている。

新しい貝塚のものは全般的に磨製石斧である。石鏃は周縁を削って作ったものである。魚骨，鳥骨，獣骨などで作った鏃の外に，只だ１個だけカキ貝で作った鏃を見付けた。

鯨の骨で作った２個のファカは，海岸の砂を掘るのに使ったと思われる。今日でも島の住民が粗末な木の柄を付けた木製の移植鍬で，貝を掘っているのを見たことがある。

骨製円板に穴を穿ったものや石灰石で作った円盤は少し厚みがかっているが軽い。その

いずれも装飾用品である。

海の狼と云われている海豹（Ｆｏｅａ　学名Ｏｔａｒｉａｊｕｂａｔａ）の歯で作ったテンベター（ｔｅｍｂｅｔａは口唇に付ける装飾品）は非常によく出来ている。当貝塚発見品として唯一のものである。

テンベターはイリリアイア川（Ｉｒｉｒｉａｉａ）のチト貝塚（Ｔｉｔｏ）で，地上６m，表土から３mの深さの貝殻層で発見された。貝塚人の所有者が紛失したものであろう。

（ｉ）土　　器

貝塚人は土器は知らない。又古い貝塚には土器は見付からない。

海岸の新しい貝塚では土器片を見付けた。貝塚の腐植表土を除去し，貝層を５０ｃｍほど掘った所に土器片を見付けたのであるが，貝塚の底部からは発見されなかった。　表土近くに混っている土器片は，農業労務者が耕作時に掘り出すことがある。

マール・ペケーノ（Ｍａｒ　Ｐｅｑｕｅｎｏ）のビラ・ノーバ第２貝塚，アロエラ貝塚（Ａｒｏｅｉｒａ），ボルタ・グランデ（Ｖｏｌｔａ　Ｇｒａｎｄｅ）のボグアスー貝塚（Ｂｏｇｕａｓｓｕ）などから出土した土器は，厚手で粗雑な破片であり，時には爪型文の土器片を見付けることもある。

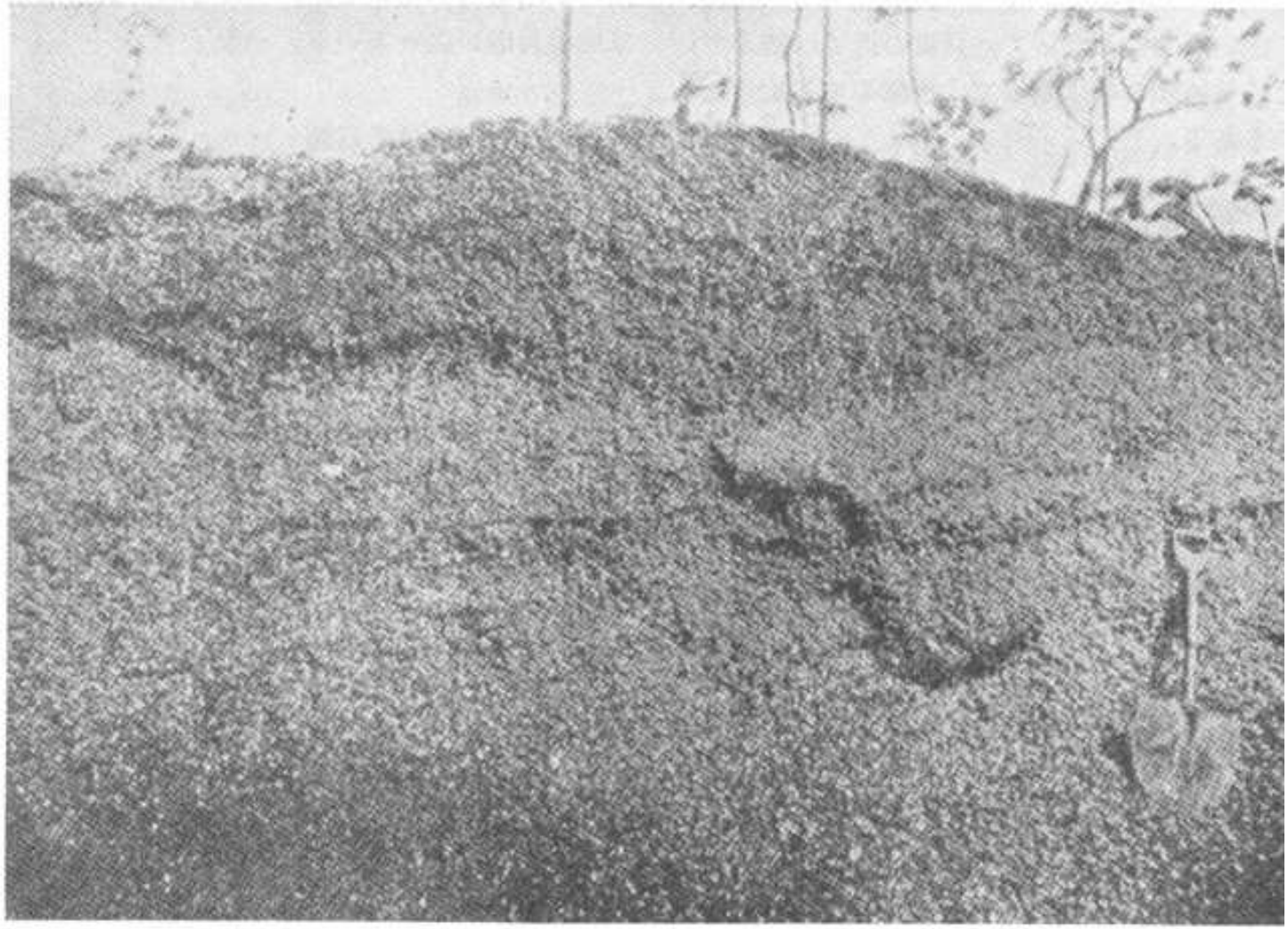


写真 8　テンベターを見付けたチト貝塚の断層面（Ricardo Krone による）

（ｊ）人骨の埋葬状態

屍を埋葬した場所が，骨を分解するような汚い層とか，黄土が塊りをなすような場所では，埋葬されたものの調査が困難であった。

ビラ・ノーバ第２貝塚で発掘した１３号人骨は背を平臥に，腕は体にそうて長く伸し，頭骨や両手の下に偏平円盤石が置いてあった。１６号人骨は上記と同じ層で，人骨の右側に大きな鯨の肋骨の部分があった。２２号人骨は左手に火を擦り起す石を持ち，頭骨の近くに大きなカキ殻で作った容器にブジウ（Ｂｕｇｉｏ　吠え猿　学名Ａllouamat　Ｃaraya）の歯が何個か入っていた。

マール・ペケーノのポグワスー貝塚では．２体の人骨を発掘した。表土の３０ｃｍは腐植土で，その下位は貝殻で覆われていて，その間に２体が交叉するような状態で見付かったが，保存状態は特に悪かった。

写真 9　第1ビラ・ノーバ貝塚　カキ殻とベルビゴン貝で交互に積成している断層面（Ricardo Krone による）

写真 10　マール・ペケーノのビラ・ノーバ貝塚の人骨側に鯨の肋骨が1本ある（Ricardo Krone によ

（ｋ）地質学的考察

氷河時代の初期に発生した変動を知るために，リベイラ川の河口や入江，並びに沿岸地帯を地質学的に観察してみた。

ジュキアとかジャクピランガ川の渓谷には，結晶質片岩（Ｓｃｈｉｓｔｏ Ｃｒｙｓｌａｌｌｉｎｏ）がある。コルディロ山脈の南方に片麻岩（Ｇｎｅｉｓｓ）と花崗岩（Ｇｒａｎｉｔｏ）が現われている。更らにその奥の方に結晶質電気石（Ｃｒｙｓｔａｅｓ ｄｅ ｔｕｒｍａｌｉｎａ）と平板雲母(Placa mica)を含んだ多様の白雲母花崗岩(Muscovit granito)がある。又東方に片麻岩の心部があって，花南岩，石灰，滑石質片岩(Schisto talco)を帯びた滑石もある。

イタチンス山脈や海岸山脈に多様の片麻岩や花崗岩があるが，これらの山脈の火成岩はしばしば亀裂を生じている。』

・・・以上はリカールド･クロネが今世紀初めころに調査し，考察したところを紹介したものである。そのころのヨーロッパ学者の強靭な開拓者精神に敬意を表わしたい。

(1)イグアツペ, マール･ペケ－ノ貝塚の発掘物(写真 11 説明)

No. 1, 4　Bulimnssp. ヘリック科

No. 2　　Ostrea brasiliana　カキ科

No. 3　　Unio sp. カラスガイ科

No. 5　　Mesodesma mactroides arcchava　lettai　メソデスマ科

No. 6　　Mesodesma mactroides　　メソデスマ科

No. 7　　ロシオ･デ. イグアッペ貝塚より発見した骨製の装飾用円盤

No. 8　　同上の石英の円盤破片

No. 9　　吠え猿の歯に穴を穿った装飾用品

No. 10　　ビラ･ノ－バ第2貝塚の人骨の首にあったガラス質石英の首飾

No. 11　アザラシの歯で作ったテンベター

No. 12　　ロシオ･デ･イグアッペ貝塚の人骨に見られた変成黄鉄鉱の飾り物

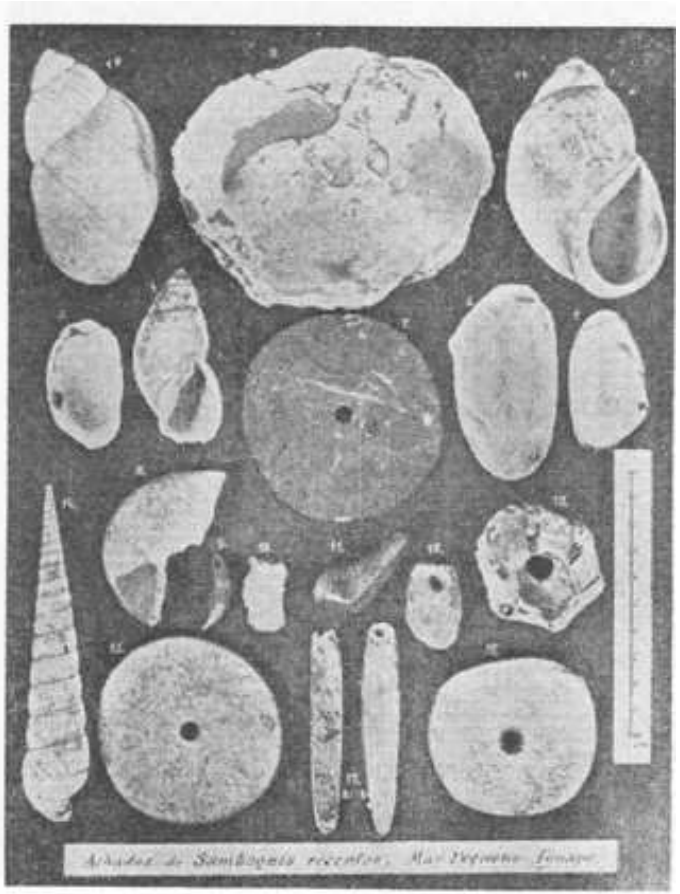


写真 11　マール・ペケーノ貝塚の発掘物

No. 13　　verruca sp. 貝の一種か?
No. 14　　タケノコガイ科の一種
No. 15, 16　チト貝塚の装飾用頁岩円盤
No. 17　　ビラ・ノーバ第2貝塚の人骨のカキ殻装飾用品

Ⅱ　ジ　ポ　ブ　ラ　貝塚

イグアッペ郡ジポブラ村の貝塚が日本移民の手によって発掘されたことは,ブラジル移民始まって以来の快挙である。

サンパウロ市に考古学に趣味をもつ同好の徒で組織した,ブラジル・インディオ文化研究同好会が,このジポブラの貝塚を発掘したのである。当時の報告はブラジル・インディオ文化研究同好会「ブラジル・サンパウロ州内の考古学的」調査と題して,東京人類学会の人類学叢刊乙,先史学第二冊として,昭和14年2月に刊行された。

その後,発掘当時の記録帳が戦争中の混乱期に一時期行方不明となったので,半ば諦めていたところ,幸いにして約40余年振りに手元に戻って来た。以下のジポブラ貝塚　アレクリン貝塚の記載は,この記録帳にもとづいて発表することが出来るのである。

最近，41年ぶりにジポブラ貝塚の現場を視察して来た。サンパウロ市からバスで4時間半，イグアッペに到ることができる。

貝塚現場には径40cm余りの巨樹が鬱蒼と生い茂っており，昼なお薄暗く，原始林の様相を呈していた。貝塚の表面には腐植物が膜状をなして覆っていたことは印象的であった。

A．ブラジル･インディオ文化研究同好会の会議

同好会(会長　市毛孝三氏)に鳥居寵蔵博士が日伯親善使節として来伯されるとの吉報が寄せられて，同好会は俄かに忙しくなった。

同好会のメンバ-はサンパウロ日本総領事館官邸にて緊急会議を開いた。出席者は会長の市毛孝三，中野巌，香山六郎，神屋信一，安藤潔，小林美登利の諸氏に著者も参加した。会議は鳥居博士の調査コースや貝塚発掘に関わる附帯項目を検討することであった．

(1)サンパウロ州奥地調査は，サンパウロ市から620kmの地点にあるミランドポリス(Mirandopolis)駅のビラノ-バ(Vila Nova)遺跡と決まり，その下準備と案内役は神屋信一氏が担当する。

(2)貝塚の発掘はイグアッペ郡の貝塚群からジポブラ村の貝塚を選定する。同地は海外興業

会社経営の桂植民他にあって，発掘，宿泊に協力が得られる。
(3) 貝塚の発掘認可の取得，発掘の指導などを勘案して，サンパウロ州立イピランガ(Ipiranga)博物館の副館長ランゲ･デ･モレッテス氏(Dr. Langue de Morretes,貝類の研究家)に依嘱することに決まる。
(4)指導者モレッテス氏との交渉に著者が当たることに決まる。渡伯して3年目の著者には,ブラジル語での交渉に自信はなかったが,口で交渉するのは三分,後の七分は心臓で交渉する始末であった。
(5)発掘の諸経費は海外興業会社(中野巌氏)に特別経費として援助を得ることに決まる。以上が会議の決定事項であった。　　(1937 年 4 月記)

B. ジポブラ貝塚発掘日記

4 月 21 日(水)

貝塚の発掘指導を依嘱したランゲ･デ･モレッテス氏と著者は,サンパウロのルス駅(Luz)にて落ち合い，午後の汽車にてサントスに下る。当日はサントスのホテルに泊る。

4月22日(木)　早朝サントスよりジュキア線の汽車に乗る。当線を走る汽車は薪を焚いて

走り，日に3往複あるのみ。終点のジュキア駅に下車し，次にバポ－ル(Vapor 河蒸汽船)に乗り換え,リベイラ･デ･イグアッペ川を下る。バポールは船尾の水車が回転して船を押し進める式で，これも薪で走る。スピ－ド感は全くない。流域の住民は総てこの交通機関に頼っている。夕刻にレジストロ(Registro)に到着し，当地のホテルに宿泊。

4月23日(金)

レジストロより約85km離れた大西洋沿岸近くにある，スバウーマ(Subauma)の貝塚調査に出掛ける。スバウーマ村より更らに3km 離れた所に双子貝塚がある。東側の大きな貝塚はグランデ･ピネイロス(Grande Pinheiros)と云って，高さは約15m, 直径約40mある。西側の方をペケ－ノ．ピネイロス(Pequeno Pmheiros)貝塚と称して，高さ10m, 直径約30mほどである。貝塚の表面より粗雑な石斧を3個見付けた。ペケ－ノ･ピネイロス貝塚を取り壊し,貝殻を石灰を作るために運搬していた。本貝塚は30年程以前にリカ-ルド･クロネ博士によって発掘調査をされたことがある。一且レジストロに戻り,再びバポールにてイグアッペに下る。当地のホテルに泊る。

4月２４日(土)

イグアッペ旧市街地の響察署にて,所轄管内に在る海輿(海外輿業の略字)管理下の桂植民地内のジポブラ貝塚発掘許可願いを提出するが,認可の前例が少ないので,あの書類,こ

の書類で時間を空費し．発掘認可を得たのが夕刻近くなり，本日も同市に宿泊する。

4月25日(日)

イグアッペからリベイラ･デ･イグアッペ川を再びバポールで遡航する。川は蛇行している。イグアッペからジポブラまでの距離は，川沿では23kmであるが，直腺では約10km程度である。バポールは途中で薪がなくなると，薪を山積みにしてある岸辺に接岸して，人足や乗客の手伝いで．薪1本づつ手渡しして船に積み込み，再び走る。これ程長閑な情景を見たことがない。約5時間で桂植民地に到着した。植民地内に点在している貝塚を－巡した後，当地の日本人会々長中村伊作氏宅に旅装をとく。今後は当家を根拠として貝塚の現場に通うことになる。

4月26日(月)

待望の貝塚調査に取りかかる。雇用労務者の手配も

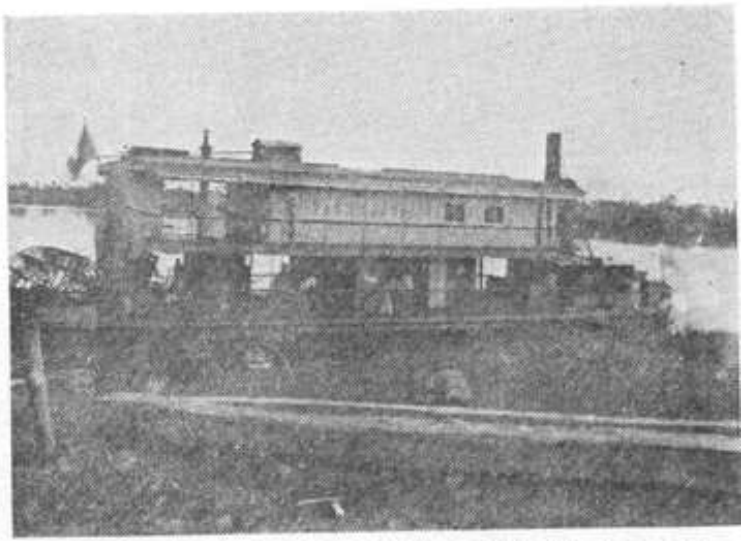


写真 13　リベイラ・デ・イグアッペ川を航行するバポール（Vapor　河蒸汽船）

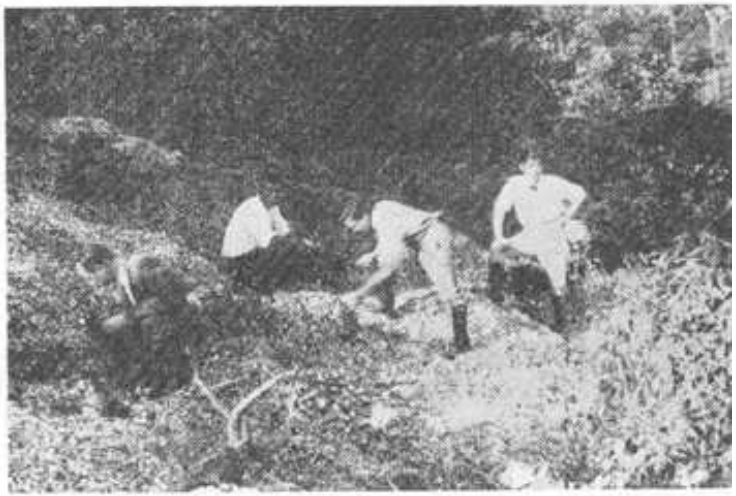


写真 14　スバウーマのグランデ・ピネイロス貝塚　左端にモレッテス氏　中央の貝殻採取中のは著者

写真 16　貝塚の全貌　貝塚の左側の椰子樹より頂上に立っているモレッテス氏

済んだ。ジポブラ村内に5個所の貝塚がある(地図12参照)。その内で,ベルナド(Vernado)と呼ぶ丘陵の南西麓にある貝塚は,無痕の状態であった。労務者たちで貝塚の表面や周辺の雑草灌木を切って清掃する。

貝塚の東側は丘陵の斜面で.バナナやミカン樹が植わっている。植民地の入植以前におけるカボクロ(Caboclはインディオと白人の混血人種)の住居跡のようである。丘陵の麓は沼沢地である。宿を出る時に昼食の弁当を忘れた。モレッテス氏は貝塚周辺から甘藷を見付け,貝塚傍で焼いてくれたので,腹の足しになった。飲料水代りには,まだ酸味のあるミカンで我慢した。

貝塚表面から鯨骨の破片や魚骨が見付かった。又40個余りの石器を表面にて蒐集したが,大部分は石斧であった。

貝塚頂より南よりに大樹が倒伏し,根が半ば露出して,共にカキ殻の塊が掘り出された状態で見られた。塊りには火を焚いた痕跡がある。

4月27日(火)

昨目は空腹,疲労。入浴後の食事時には2人で僅かにビ-ルを飲んだ。モレッテス氏は朝まで仕事着のまま眠っていたようである。

貝塚の東端は沼地で,蚊の発生地でもある。躯の露出部に数匹の蚊が止り,血を腹一杯に

味う。腹が満腹状態になって飛び上ることが出来ない。手掌で一発食わすと真赤な自分の血が肌に飛び散る。

貝塚表面の雑物除去中に，南側中腹表面より凹面砥石の破片，数個の石器，東側斜面上より人間の歯，魚骨多数を見付けた。

宿舎までの距離は3kmある。労務者は5km 以上の距離から通っている。

4月 28 日(水)

朝から雨模様。現場に行く途中で俄雨となり，濡れ鼠となる。作業中も3回ほど俄雨に見舞われたが，逃げ込む場所がない。こんな日は労務者は少ない。

貝塚の表面積を測量するために頂上に基本杭を立て，東西南北に2m間隔に小杭を立てる。やや楕円型をなしている。頂上西端より横巾3m，奥行6mの区画を設け，発掘を始める。貝塚を構成している状態を究明するのに断層面を現わすためである。この断層を便宜上，第1断層と呼ぶことにする。発掘した貝殻は，一輪車にて背後の場外に運び出す。

貝塚表面より35cmの探さはカキ殻混りの黒色腐植土で，その下部は純白のカキ貝殻の層であった。この層内から径約70cm，厚さ20cm ほどのカキ殻の塊が出た。火を使った痕跡である。塊りの下位，即ち表土より70cmの深さに魚骨を混えたカニ殻の層があり，これに混って打製石斧3個が見付かった。

4月29日(木)　日本の天長節である。貝塚の発掘は休み。発掘した遺物の整理袋をミシンで作る。モレッテス氏は昆虫採取に出掛ける。

4月30日(金)

貝塚の南側脇に日蔭小屋を建てる。椰子の葉や稲藁で,簡単に素早く建てる労務者の姿は生々と見えるが,発掘作業になると,注意の上に注意を重ね,慎重に鍬を入れさせるので,神経を使うらしく疲労感が眼に見える。

第1断層に2人の労務者を当てて発掘を続け,第1断層の裏側,即ち貝塚の東端より階段式に第2断層作りを始める。この層より石斧4個,魚骨は小袋に一杯採集した。

5月1日(土)

朝霧が深い。現場に到着する間に,朝霧で濡れ身となる。

第1断層のカニ層は黄色を呈して続いている。カニ層から魚骨,石器5個を見付ける。

5月2日(日)

ブラジルの宗教的祭日で,労務者は休む。代って桂植民他の青年団7名が勤労奉仕に来てくれた。

第1断層のカニ殻層は未だ続いている。アメイジオア貝はカキ貝に混って出るが,共に貝蓋の破損していない物が多い。器物を使って蓋を開けたか,火で焼いたかであろう。

写真 17　貝塚の南側は稲藁や雑草で覆われている

写真 18　貝塚の北側斜面

写真 19　貝塚の南側　雑草や稲藁を除去した跡

写真 20　貝塚の脇の日蔭小屋と運び出した貝殻の山

第2断層から磨製石斧，人骨片などが出土した。午後3時ごろに定期的にくる俄雨で，濡れ身になった。

5月3日(月)

モレッテス氏はこれまでに採取した昆虫や貝殻の整理で，現場行きを休む。

青年団の－部が奉仕に来てくれた。

第1断層の表土から1mの深さより骨器1個を見付けた。魚骨は相変らず多く出土する。下層に進むにつれてアメイジオア貝が多くなり，カキ殻は石灰化して崩れているものもある。

写真 21　第2断層　労務者の鍬先を注意深く監視しているモレッテス氏

発掘中に俄雨があり，バナナの葉の下に逃げ込むけれども矢張り濡れる。

帰りに船着場の店で，奉仕青年団の諸君に茶菓子で接待する。

5月4日(火)

現場に向う途中で降雨となる。バナナの葉で躯を包んでみたが，矢張り濡れた。

第2断層の表土は黒色腐植土で，探いところは40cmもある。石器3個，多数の魚骨が出土

写真 22　貝塚の表面や貝層の中から出た貝殻の塊り。火を使った跡

した。帰りも雨である。

5月5日(水)

日本の端午の節句。レジストロの薬剤師北島弘毅氏が饅頭を持参して陣中見舞いに来てくれた。これで2度目である。

第2断層にて骨器1個を見付けた。骨器の出土はすくない。

第2断層の下側に第3断層の発掘を始めた。この層より石器5個，人骨の下肢骨片1個が出土した。表土より1mの深さに，灰色がかった層があり，中から多数のカニ殻が出土する。又1.5mの深さに砥石1個を見付けた。

5月6日(木)

第2断層より打製石斧2個が出土した。午前中でこの層の発掘は終る。

第3断層より人頭骨が初めて現れたが，時間が遅いので，明日発掘することとする。この層より3個の石斧を見付けた。

更らに労務者たちは第4層の発掘に移る。

5月7日(金)

昨日現われた第3断層の人骨の発掘を続ける。最初の人骨であり発見した順から，便宜上，第1号人骨と呼ぶことにする。慎重にマッチ棒で掘り進める。モレッテス氏も手伝ってくれ

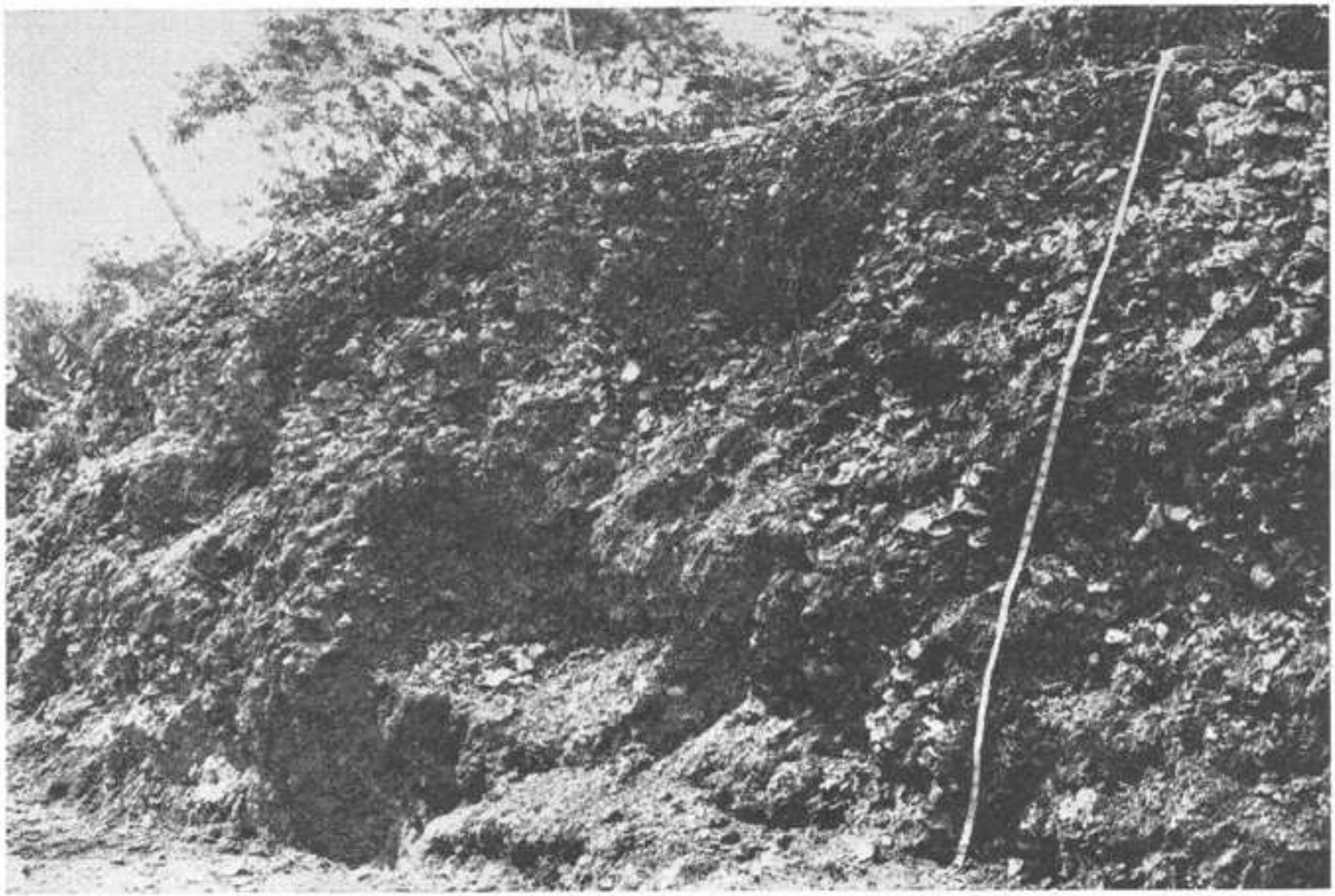


写真 23　第3断層面

る。発掘中に降両となるが，逃げる気にならない。夕方の定時刻までに掘り終えることができなかった。

モレッテス氏は明日帰聖の予定である。今日で彼の貝塚発掘の指導を終えることになる。献身的に協力してくれた事に対して，心底から謝辞を述べる言葉がでて来なかったのは残念である。彼も人骨の発掘半ばで引揚げることに，未練がましいように見受けられた。

5月8日(土)

モレッテス氏は早朝から帰聖の仕度をしていた。此処から離れがたいようであった。18日間，共に生活し，指導してくれたことに対して，オブリガードあ(りがとう)だけでは，気がすまない。外に感謝を云い

写真 24　第2断層面

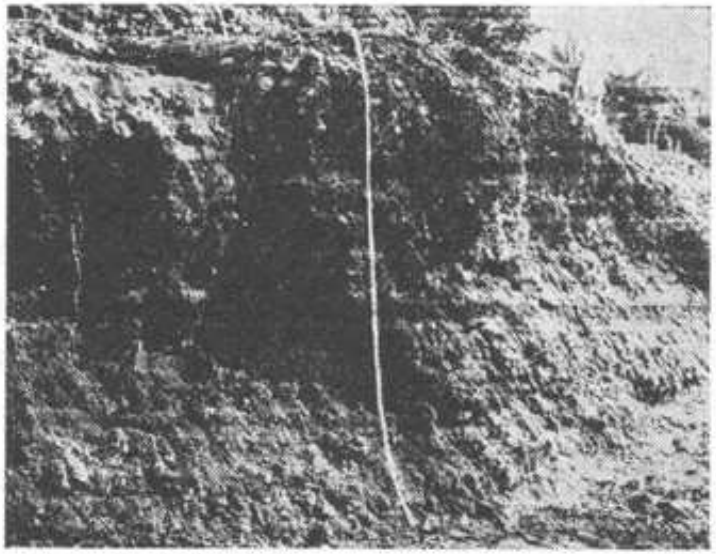


写真 25　第4断層面

現わす言葉を知らないが，心が代りをしてくれたであろう。

バポ-ルに乗ったモレッテス氏は，盛んに手を振っていた。陸からもそれにこたえて手を振った。

貝塚の発掘を始めて以来，晴れ上った天気は少ない。稲の収獲期に入っているが、雨が降り続くので，農家は腐心している。晴れ上ると労務者は稲刈りの方にまわるので，勢い貝塚の労務者は少なくなる。

第1号人骨の発掘を続行する。頭骨は北向，両下肢骨は曲げ，左手は骨盤の方に伸している。右手は頭骨の下側にある。恰度手枕で眠っている状態，横臥の屈葬である。表土より150cmの深さにあった。

5月9日(日)

日曜日で労務者は来ない。独りで発掘現領こ行く。

第3断屑を発掘*，第2号人骨に突き当る。下肢骨，骨盤，頭骨の順に掘り進む。頭骨は貝殻の重圧で細かく崩れていた。埋葬位置は表土より150cmの深さであった。

人骨の附近より魚骨が多く見られ，カキ殻が黒く焼かれて出土した。

5月10日(月)

農繁期となる。貝塚の労務者は子供と老人である。

第3断層の発掘を続けていると，ポッカリ穴が開いた。人骨が埋葬されてあるので，この個所は近日中に来られる鳥居博士の研究場所として，そのままにして置く。

5月11日(火)

第3断層より石斧4個出土する。表土より150cmの深さに，シジミ貝の一種(学名Anomalo-Cardia brasiliana)が平板状に塊まって薄い層をなしていた。

夕刻近くになって，レジストロ寺院の神父と海興の溝口氏が陣中見舞に来てくれた。

5月12日(水)

第3断屑の南端よりで，表土から150cmの深さに，魚骨，カニ殻などで黄白色を呈した層が現われた。黄白色層と上位のカキ殻層との間に薄い黒色腐植土層が挟まっていた。

最下位の階段式第4断層の発掘に移る。この辺は貝塚の麓で，沼地に接している。上方からの流土が累積しているので，層は厚い。厚い腐植土層の下側に，薄いカキ殻の屑がある。腐植土層から人骨の下肢骨片3個を見付けた。

5月13日(木)

第4断層の表土より，黒く焼かれた人骨の上肢骨，下肢骨の破片数個が出土した。

5月14日(金)

第4断層を発掘していると，大蝸牛の一種カラムージョ(Caramujo)の殻や田螺類の殻が

所々に見られる。貝塚の頂上に至るに従ってその量は少なくなるので，沼地から這い上ったものであろう。

第４断層の発掘は一応これをもって中断し，サンパウロに帰る。

5月17日（月）　鳥居博士の講演会はサンパウロ法科大学講堂で，午後9時より催された。演題は「日本の者古学」に就いてで，内容は日本の土器は瓢箪を基本として発達した，石器時代に使った武器の鋒先に毒薬をつけなかった，などの骨子であった。帰り路，コーヒー店で安藤全八，小林美登利両氏たちと，吾々の考古学同好会は何如にしてブラジル考古学界に貢献して行くべきかを論じ合った。帰宅は午前１時過ぎになった。

5月25日（火）

早朝から桂植民他の主だった人達は，ポルト（Porto　船着場）にて，鳥居博士一行の到着を待つこと３時間にして．バポ－ルが着いたのを出迎えた。一行は令息の龍次郎，粟原自然科学研究所の神屋信一，聖州新報新聞社社長の香山六郎，薬剤師の北島弘毅，海興の吉田の諸氏であった。ポルトの倉庫事務所にて簡単な挨拶，紹介程度にして，上野氏土地内にある貝塚に至り，植民者の手で発掘したが，遺物らしいものは出土しなかったが，隣接の岩間で博士は余り大きくない平盤の重ね石を発見し，これは祭壇型のものであろうと説明された。附近より土器の破片を見付けた。

写真 26　貝塚上の後列中央の鳥居博士　前列左端は著者（1937 年 5 月 25 日撮影）

5 月 26 日(水)

空は貝塚の発掘日和。荷馬車を乗用に急造し，博士父子を乗せて先頭に立つ。植民者総出動。 30 余名は弁当を腰に，鍬を肩にして，その後に続く。さながら砂漠のキャラバンである。

現場にて著者は，貝塚の発掘経過，出土品，人骨の埋葬状態などの概要を説明した。

第 3 断層で神屋氏は第 3 人骨，著者は第 4 人骨，溝口氏は第 1 断層で第 5 人骨を担当して発掘したが，3 体共夕方までには掘り上げられず，そのままで終った。

夕食後，中村伊作氏宅で植民者たちと座談会を催す。博士はジポブラ第1貝塚の調査結果について，これと云って珍らしいことは発表されなかったが，原始的な粗雑な石器は研究の価値が充分にある。一般の人々には貝塚に興味はないかも知れないが，人種学的には面白い。クローネ氏の発表している程の遺物が出土しないとすれば，この貝塚は特殊的存在であるかもしれない。外国人で 1 個の貝塚に 20 日以上も発掘を続けた例がないので，今回の貝塚発掘は貴重である，などと説明された。

座談会での逸話を紹介しよう。

北島氏は「私はブラジル生れの二世であるが，もし今仮りに，ブラジルと日本とが戦争状態に入った場合，日本人の親を持つ吾々二世

は，どちらに従って行くべきか?」

博士は「あなたは此の国に生まれたブラジル人であるから，当然あなたの弓は日本に向けるのが当りまえです」

二世としての悩みのようであった。午後９時に解散する。

5 月 27 日（木）

神屋氏と著者は貝塚現場に至り，昨日に引続いて発掘する。 第3号人骨は頭部を南方に向け，頭骨の下に左手を置き，下肢骨は屈折していた。著者の第４号人骨は頭部が北向きで，木の根で破壊されており，下肢骨は屈折していたが，上肢骨は伸ばしていた。

午後４時半頃に，貝塚上で鳥居博士を取り囲んで労務奉仕の人々と共に，記念撮影をする。今晩も会長宅で座談会を催す。

5 月 28 日（金）

日伯文化交流の使節員としてブラジルに招聘された鳥居龍蔵博士並びに子息龍次郎氏は，ジポブラ貝塚の調査を済まされ，帰国の途に着かれた。

ポルトに立たれた博士は，「自分はペルーに巡って帰国するが，ブラジルの遺跡についての発表は君たちに任し，自分は発表しない」と最後に言い遺して，12 時の河蒸汽船に乗られ，お互いに別れを惜みながら，手を振り帽子を振って別れた。

貝塚の発掘は，その後も継続し6月12日を以って終了した。
発掘労務者数176人　その外，桂植民地の青年団並に日本人会一同の勤労奉仕もあった。
発掘総経費　2コントス115ミル900レース

C．ジポブラ村の貝塚群の概況

イグアッペ市の北西約20kmの地点にジポブラ村(Jipobura)がある。リベイラ・ド・イグアッペ川は，村の西側を蛇行している。ジポブラ村に5個の丘陵があり，それぞれの麓に貝塚が見られる(地図12参照)。

ジポブラのポルト(船着場)より北北東約4kmの地点に標高68mのベルナド(Vernado)と呼ぶ丘陵があって，その西側斜面の麓に貝塚がある。周辺は沼地である。便宜上この貝塚をジポブラ第1貝塚と呼ぶ。以下は説明する順位に番号を附す。

第1貝塚の東方1.7kmにカイオバー (Caioba)丘陵があり，その南麓に第2貝塚がある。周囲は沼地に囲まれている。

ベルナド丘陵の南南東1.3km離れて，グランデ丘陵(Grande)があり，その西麓に第3貝塚がある。この貝塚も周囲は殆んど沼地である。ポルトより南東約1km離れて，リベイラ・ド・イグアッペ川の川岸から僅か200m離れた地点の標高150mの山は当村最高の山である。山の

南西麓より僅かに離れた平坦地に第4貝塚が見られる。

この貝塚は1905年ころに独乙人のリカ－ルド･クロネによって発掘され，サンパウロ州地理地質学協会の報告「イグアッペのリベイラ川渓谷の人種学的観療」の一部にジポブラ貝塚が僅かに報告され，未発掘の部分が遺されていることが，写真などから観察される。現在では当局より発掘禁止指定貝塚となっている。貝塚の周囲は密林に覆われて近寄ることができない。

第4貝塚よりりベイラ川に沿って400m川下の岸辺に，露出した岩山がある。この頂上にある第5貝塚の貝殻は，総て石灰工場に運ばれ，僅かにその痕跡を認め得るに過ぎない。

執れの貝塚も丘陵の麓にあって周囲は沼や川が流れている。

以上の貝塚群の内，ベルナド丘陵のジポブラ第1貝塚は原状のままで攪乱されずに今日に至っていた。この貝塚は前記したように，数年前にカボクロが貝塚附近に住家を建て，果樹などを植えた跡が遺っており，貝塚の東端に隣接部落よりポルトに通ずる小径があった。

D．ジポブラ第1貝塚の発掘状況

ベルナド丘陵はジポブラ村のやや北方，丘陵の南西麓にジポブラ第1貝塚がある。

(a)貝塚の大きさ

貝塚の高さは7.38m, 東西の長径は21.60m, 南北の長径は32.70mでやや楕円形をなしている。総面積は約547 ㎡である。貝塚の2/3以上は丘陵の傾斜上にあって，東部と南部は緩慢な傾斜であるが，沼地に面する西部と北部の勾配はやや強い。

(h)貝塚の表面

貝塚を発掘する前に，貝塚上の灌木，樹の根，稲藁(貝塚上の一部で稲作していた)などの雑物を除去した後，貝塚の表面を調査する。

覆土は黒色腐植土であるが，一部耕作などで貝殻と表土が入り混り，実際は表土面の測定が困難であったが，一部の表土の厚さを推定した。

表面より鯨骨片，多数の魚骨，石器類約50個，人骨の歯，火を使った痕(径約70cm, 厚さ20cmのカキ殻の焼けた塊り(写真22参照)など見付けた。

(c)第1断層面の説明

貝塚を発掘するに当って，断層面の調査が主要目的であるから，断層づくりをする順を追って説明を進め

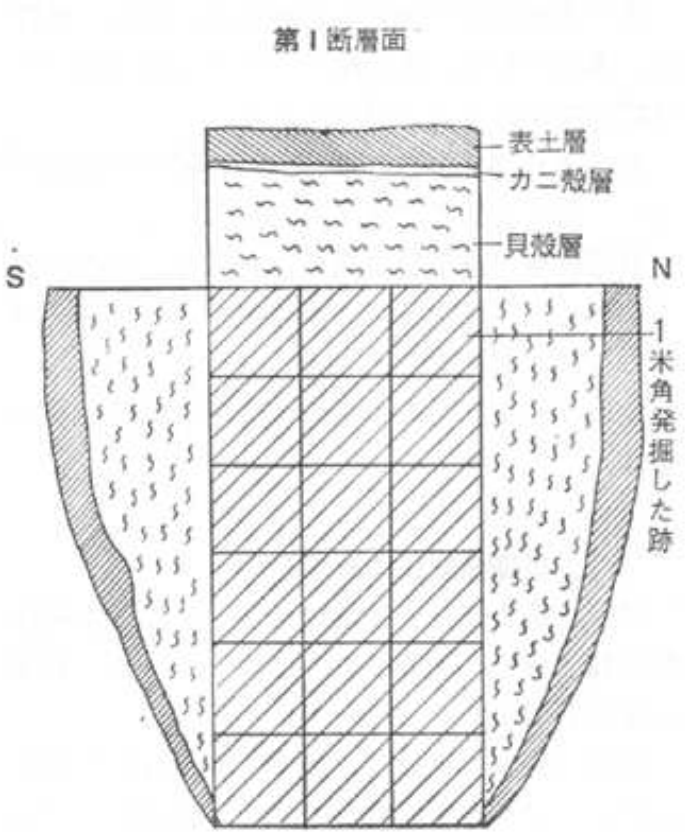


図 27　第1断層図

る。

初めに貝塚の頂上，やや中央部を巾3m，深さ2m，奥行きは沼地に向って6mの長さに発掘し，後に同じ巾で貝塚を貫通せしめたのである。

東側の丘陵との接点より発掘し，盛り上っている貝塚の頂上に向って掘り進める。これを第1断層と呼ぶこととする。

第1断層の断面図(図27)に見られるように，左側(南)の表土の厚さは10-20cmであり，右側(北)は10-30cmの厚さである。正面(西)の断層面は20-30cmの表土で，その真下にカランゲージョ(Carangue jo，カニ)の爪や甲羅の廃棄物の層をなしている。カニの層は黄白色を呈し，約10cmの厚さがあり，魚骨も多く含まれていた。

カニ層の下側は純白のカキ殻の層をなし，表土より約1mの深さに至ると，アメイジオア貝がカキ殻層に目立つほどに混っていた。カキ貝やアメイジオア貝の両蓋は，破損していないものが多い。　同じ探さにて骨器，石器など発見した。

(d)第2断層面の説明

第1断層の西側に隣接し，L字型の階段式に，北から南に向って巾3m，長さ約10mに亘って発掘する。

表土は20-40cmの厚さであるが，中央部に直径約80cm，やや円筒型の黒色土の層がある。

かつて貝塚上に巨木が生えていて．強風で倒伏し，それによってできた空洞に腐植土が流れ込んだものである。

表土より約1.50mの深さに，もう一つの表土が挟まっている。上位の表土を第1次表土，下位の表土を第2次表土と呼ぶことにする。

第2次表土は帯状をなし，約20cmの厚さがある。第1次と第2次表土との間にある貝殻の大部分はカキ殻で純白色を呈している。

第1次表土下のカキ殻層より，磨製石免　多数の魚骨，人骨片などが出土し，第2次層から打製斧や縫針のような骨器が出土した。

(e)第3断層面の説明

第2断層の西側に，前記と同じ方向に巾3m，長さ11mに互って発掘する。北側は傾斜が強く，表土の流失が多く，薄い層になっていた。中央部はカキ殻の積成層が凹面をなすので，流土が停滞して厚く，深い個所で50cmの厚さがある。

表土より1mの深さに，厚さ10cmの第2次表土が挟っている。この表土の下側に，灰色を呈したカニ層が見られた。この周辺より人骨の下肢骨片，石器など出土した。表土から1.50mの深さに更らにもう－つのカニ層が帯状に見られ，黄白色を呈し，魚骨も多く含まれていた。

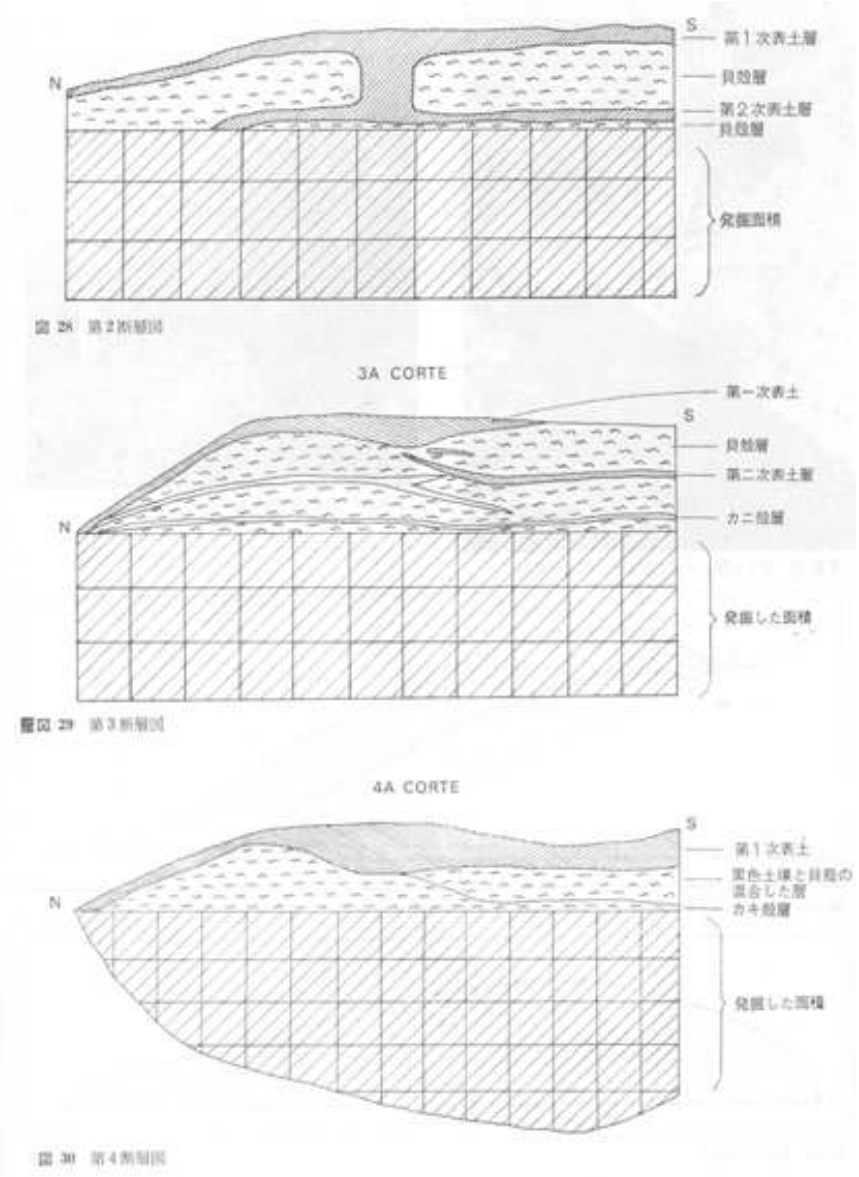
この深さにシジミ貝の一種が薄い層をなしていた。附近より砥石，石斧などが出土した。

第３断層より数体の完全な人骨が発掘された。

(f)第４断層面の説明

第３断層の西隣り，沼地に接した最低の位置に設けた。表土の大部分は流土の溜りで，黒色土の厚さも極めて厚く，１～1.50mに達するところもある。その下位はカキ殻層が約20cmの厚さで拡がっていた。

表土近くに頭骨片，指骨の一部が出土し，又黒色土の中などより人骨の下肢骨片３点，少し離れて人骨の上肢骨片，下肢骨片が見出され　た。黒色土の所々にて淡水産のカラムーシジョや　たにし田螺に似た貝が見られたが，これらは貝塚人の食料ではない。第１断層～



第３断層にかけてカラム－ジョ貝は見られない。

(g)貫通断層面の説明

第１断層より第２断層にかけて設けた貫通溝で次の状態が見られた。

表土近くから石器が数個出土し，下層のカキ殻にアメイジオア貝が目立つように混っていた。第２断層の辺りで，表土から1.50mの深さに第２次表土帯があり，第３断層では2.50mの探さで，表土帯が見られた。この第２次表土の下側に灰色を帯びたカニ層が拡っていた。

第２次表土より大形の打製石斧，骨器，獣骨片，多数の魚骨，火の跡(カキ殻が黒く焼けて塊状をなす)などが見出された。

表土より　3.70mの深さのカキ殻は黒色土と混り，共にアメイジオア貝も見られた。

貫通断層の最下位の探さは4mで，丘陵の表土に達した。探さ41nのカキ殻層より砥石，山豚の牙など発見した。

丘陵の表土は，やや赤褐色を帯びた粘土質である。

(h)貝塚最底位の丘陵

貝塚の最底部は丘陵上にある。丘陵は赤褐色粘土質土壌で，北側の岩山に続いている。貝塚の縁が岩山にかかっている。

貝塚と岩山の境目に，握拳大の小石が１列状に並んでいるので，境目の貝殻を除去して

見ると，その配列は，やや湾曲して弧を描いている。人工的であるが，何を意味しているかは不明である。貝塚人たちが，遊びがてらに小石を並べたとも推察される。

E. 人骨の埋葬状態

人骨は総数11体発掘することができたが，比較的に完全なものは僅か5体であった。発掘した人骨の番号は，発見した順序に附けた。

(a) 第1号人骨

第3断層の平地面で，表土より1.50mの深さにて発見した。

頭骨を北方におき

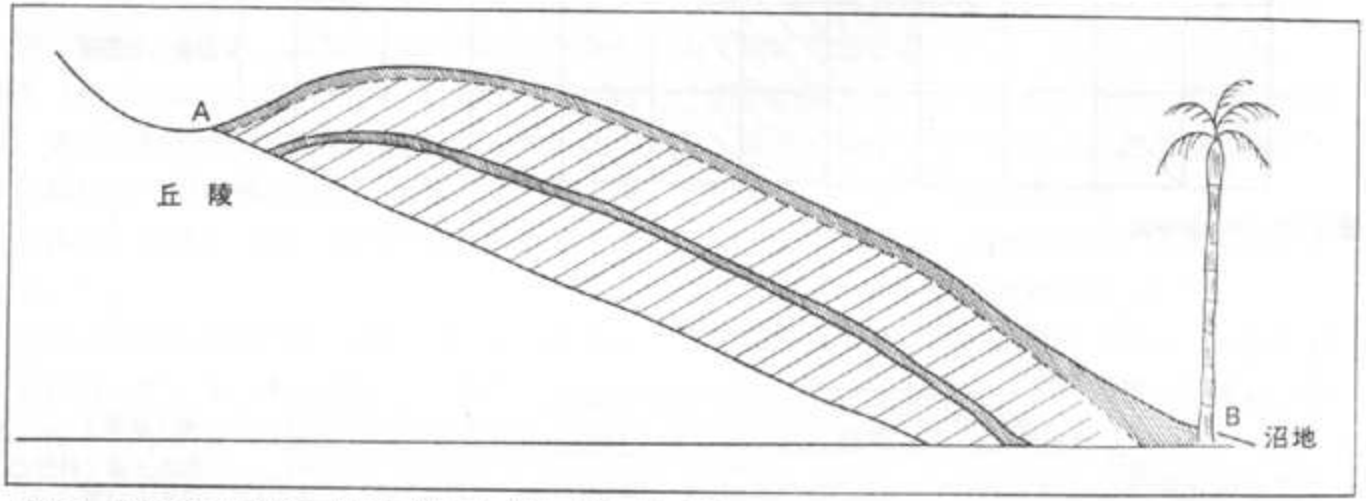


図 32　南北の断面図並びに第1次表土層と中間の第2次表土層

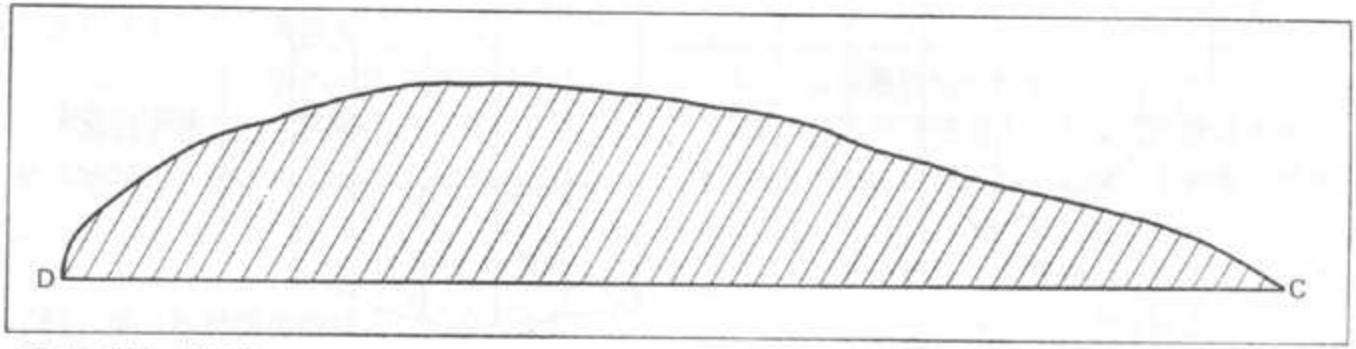


図 33　東西の断面図

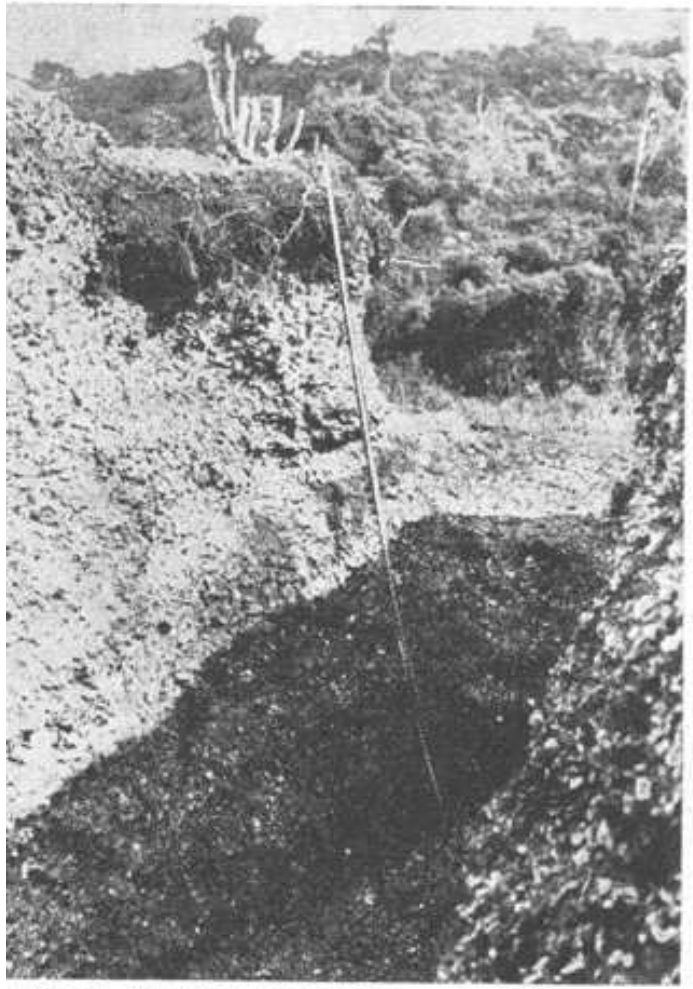


写真 31　第1断層より第2断層への貫通断層面

写真 34　貝塚の西側斜面を階段式に発掘

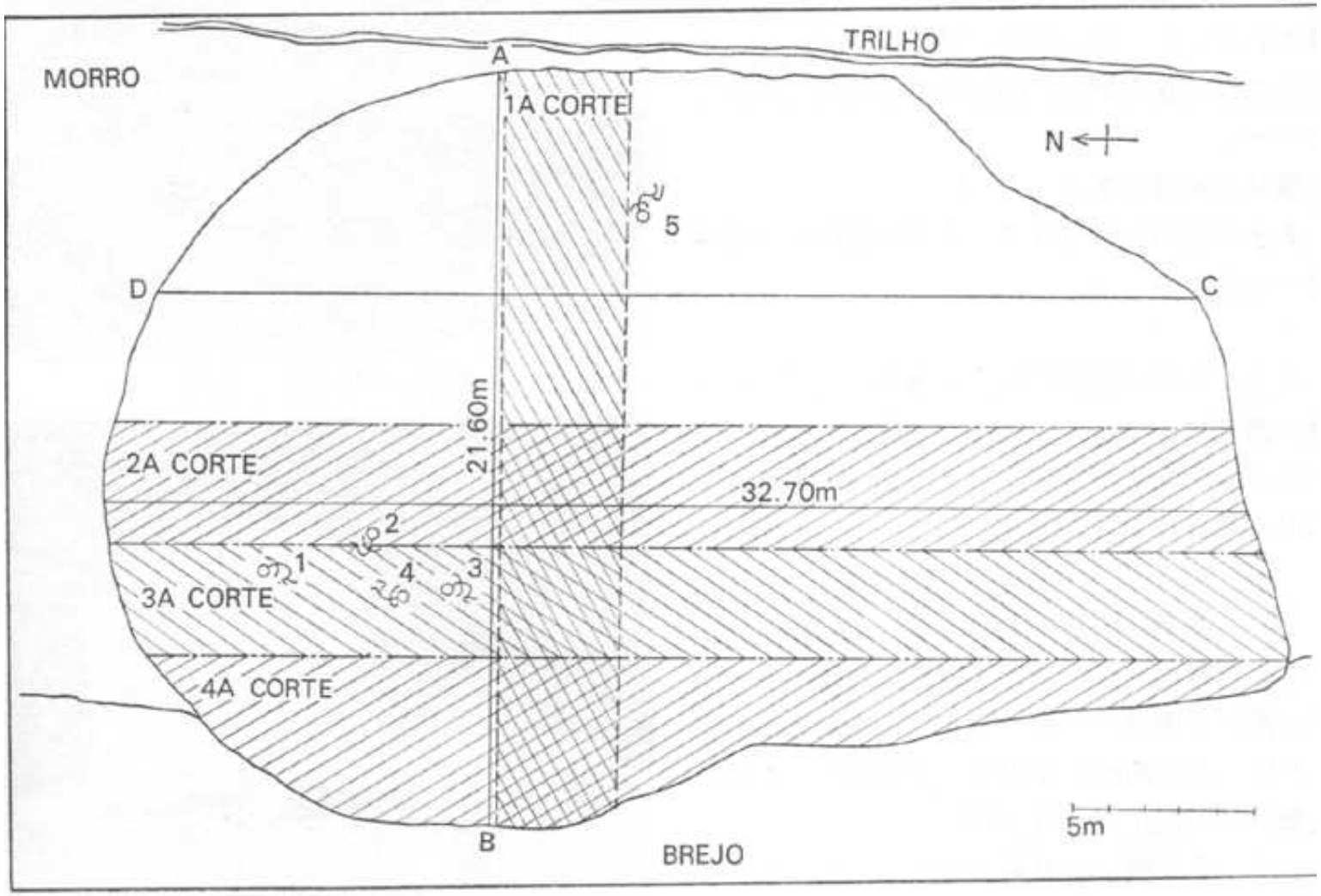


図 35　貝塚平面図並びに各断層平面図　人骨の埋葬位置

,顔面は西の方に横向けとなっていた。右上肢骨は頭骨の下側にあり，左上肢骨は顔の向いている方向に屈折し，両下肢骨も西側に揃えて屈折していた。

恰度，手枕の姿勢で，横臥屈葬にされていた。

(b)第２号人骨

第１号と同じ断層の平地面で，表土より1.60mの深さ，即ち第２次表土中にあって，第１号人骨より南東約1.50mほど離れた位置に，第２号人骨を発見した。

初め，第３断層面の近くに屈折した下肢骨が現われ，骨盤に続いて肋骨，脊椎骨，頭骨の順に断層面の奥に横たわっていた。

頭骨は南東にあり，顔面は北を向き，右上肢骨は頭骨の下側に，左上肢骨は不

写真 36　第３号人骨の埋葬状態（５月27日撮影）

写真 37　第５号人骨の埋葬状態

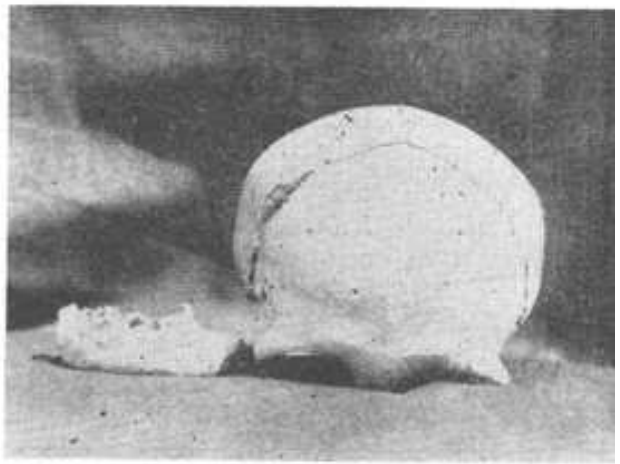


写真 38　ジポプラ第１貝塚の頭骨

明であった。横臥の屈葬である。

埋葬の位置が第2次黒色腐植土混りの層で，人骨の保存条件は良好とは云えない。人骨の附近より魚骨，黒く焼けたカキ殻が出土した。

(c)第３号人骨

第３断層の平地面で，表土より 1.50m の深さの第２次表土帯にあった。第２号人骨より南方約 3m ほど離れていた。

頭骨は北方に，顔面は東横向き，頭骨の下側に左手があって，右手は背後に仲し，両下肢骨は東側に屈折していた。

手枕で眠っている姿勢の横臥の屈葬である。

(d)第４号人骨

第３号人骨の北隣りに約1,50mほど離れ，３号の頭部と４号頭部とが，互いに鉢合せの状況で発見された。深さの位置は第３号人骨と，ほぼ同じレベルにあった。

頭骨は南にあり，顔面は東側に向けていたが，木の根で破壊されていた。両下肢骨は東側に屈折し，両上肢骨も同

写真 39　第１号人骨の埋葬状態（５月８日撮影）

写真 40　第２号人骨の埋葬状態（５月９日撮影）

じ方向に伸していた。

横臥の屈葬である。

(e)第５号人骨

第1断層の近くで，表土から約40cmの深さに，貝殻混りの腐植土と貝殻層の接点があり，その位置において第５号人骨を発見した。

頭骨は西に向き，顔面は北向きで木の根で破壊されていた。左上肢骨は頭骨の下にあり，右上肢骨は背後に伸し，両下肢骨は北側に屈折していた。

横臥の屈葬である。

表土に近接した位置で，人骨の保存には悪条件の位置であった。

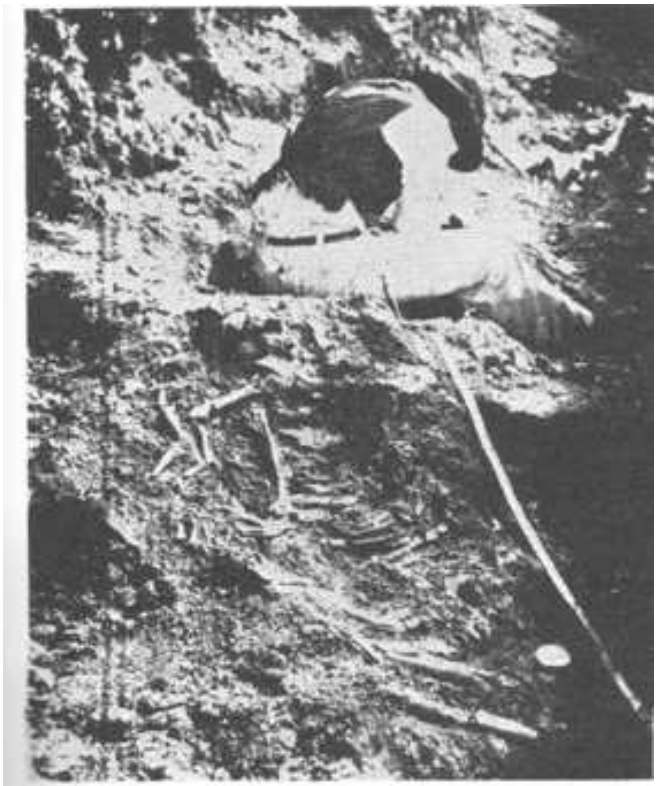


写真 41　第4号人骨の遺棄状態（5月27日撮影）

以上の５体は比較的完全に発掘したので，詳細に調査することができた。

以下に記載する人骨は断片的で，遺棄された状況に見られた。

(f)遺棄人骨

この記録は,ジポブラ貝塚発掘日誌から,人骨に関わる部分のみを抜粋したものである。

(1)第2断層を発掘中，表土近くに人骨の上肢骨片が出土(5月5日)。

(2)第3断層の発掘を始める。表土面にて人骨の下肢骨を遺棄の状態で見出した(5月5日)。

(3)第4断層の表土は厚く，この黒色土の中から人骨の下肢骨片が出土した(5月12日)。

(4)第4断層の表土中に，黒く焼けた上肢骨片，下肢骨片が出土した(5月13日)。

(5)第4断層の発掘中,表土近くにて破壊された頭骨片及び指骨の一部を発掘す(5月29日)。

(6)第4断層の最下部,即ち表土より3m の深さの貝殻層より下肢骨片を発掘す(6月5日)。

F. 遺物の種類

(a)石　器

ジポブラ第1貝塚より発掘した石器の総数は178個で，その石質は，大部分が玄武岩(Basa1to)で，僅かに石英(Quartzo)が見られる。

石器の分類では，大型石斧は少なく，小型石斧が多い。全般的に粗雑である。代表的石器を選んで記載した。

石器の測定数字は次の順序で記す。

長さ　×　巾　×　厚さ

(1)磨製石斧　20cmx9.5cmx5cm　全面的に磨かれている。刃部は鋭い。

(2)磨製石斧　21cmx16cmx5cm　全面的に磨かれているが，石質が軟かいので傷っき易い。巾が広い。

(3)半磨製石斧 14cmx8cmx3.5cm　部分的に磨製。裏側は打製で平盤。刃先は粗雑。頂部の握り具合は良好。

(4)打製石斧　9.5cmx6cmx3.5cm　縁部は打製，身より頂部に向って厚みがある。握り具合は良好。

(5)半磨製石斧10.5cmx7cmx3cm　刃部は打製,身から頂部にかけて磨かれ同じ厚みである。肩部は細く握り具合は艮好，長三角形を呈する。

(6)半磨製石斧　11cmx5,5cmx3cm　刃部は薄く打製。身は磨製。項部は厚みがある。

(7)打製石斧　8.5cmx4.5cmx2.8cm　一面は打製平盤。反面も打製。

(8)打製石斧　8.5cmx4cmx3cm　一面は打製平盤。反面の線部は打製，身の中央部に高みがある。

(9)偏卵三角形打石器　高さ6.8cm,幅は6. 4cm　打石器の内でも珍らしい型をしている。上部から見ると，偏卵形をなし，３面を有し，それぞれの面に指先大の凹部があって，物

を叩く場合に栂指，人差指，中指をそれぞれの凹部に入れて握るに便利である。

　発掘場所は第1断層，表土より　2.70mの探さであった。

(10)平盤梯形打石器　8.3cmx6-4cmx 3cm　巾の広い方は6cm。狭い方は4cm。上下両端に使用した痕跡がある。

(11)楕円形打石器10cmx8cmx3.5cm　やや平盤で，楕円の上下両端部に使用した痕跡がある。

(12)長角形打石器　6cmx4cmx3.5cm　長い方の上下両端部に使用の痕跡がある。

(13)円形打石器　5.5cmx5.5cmx4cm　やや厚みがあって，周縁に使用の痕跡がみられる。

(14)円形打石器　7cmx6.3cmx4.3cm　周線に使用の痕跡がある。

(15)小刀石器10cmx6.5cmx3.5cm　裏面は平盤，

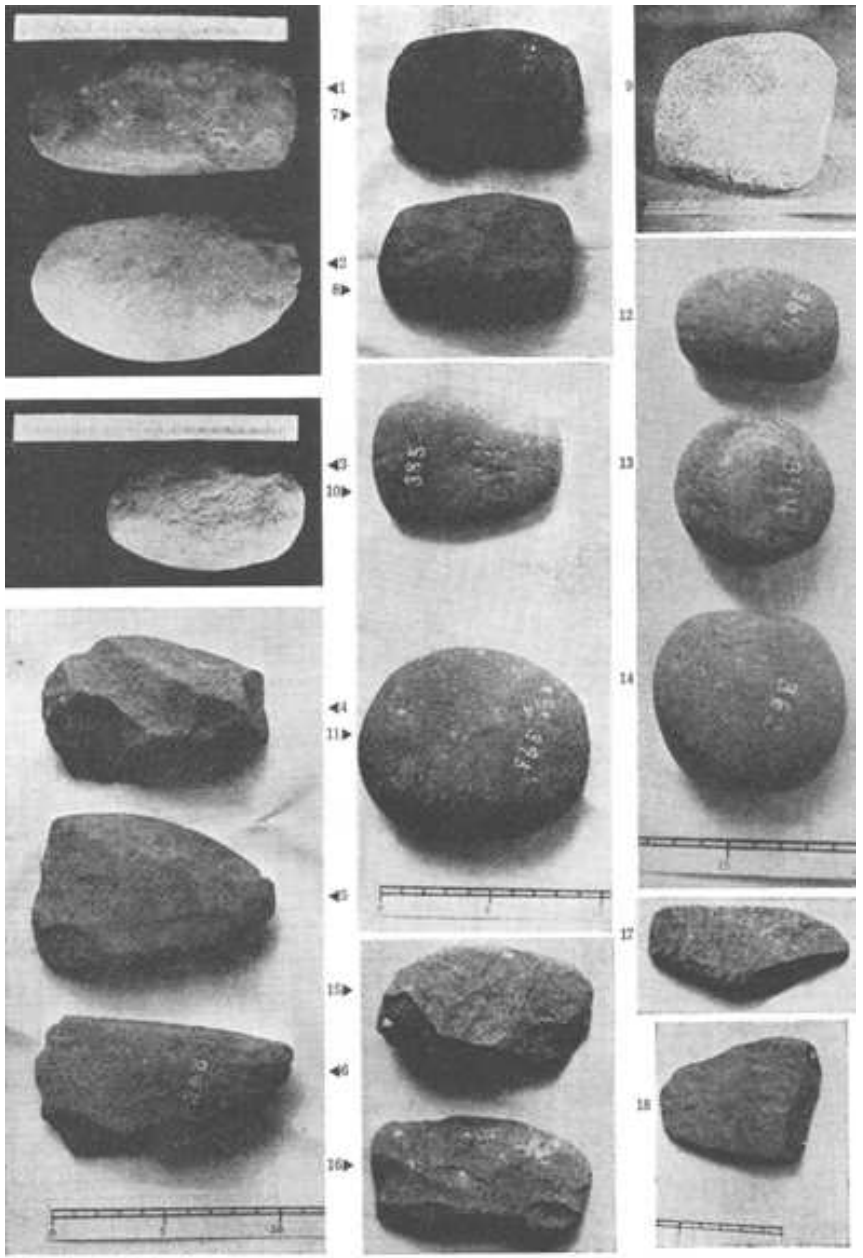


写真 42　石器の種類（1～18）

上縁に刃部，反対側の厚みがある部分が指当である。
(16)小刀石器10.5cmx5.5cmx2.5cm　裏面は平盤，上線は刃部，下側の厚みの部分が指当である。
(17)小刀石器　9cmx4.3cmx1.5cm　裏面は平盤。刃部は打製。斜面の部分は厚みがあって，指当である。
(18)小刀石器　7.5cmx5.5cmx2cm　裏面は平盤。刃部は打製。欠いた厚みの部分が指当。
(19)錐形石器　8.5cmx4cmx2.3cm　裏面は平盤。反面は山型。刃先は尖る。
(20)錐形石器　9.5cmx6cmx2cm　全体に厚みがあって平盤。刃部は鋭い。
(21)皮剥石器　8cmx5.8cmx0.9cm　裏面は平盤。周線は打製で鋭く，全面的に薄い。
(22)皮剥石器　7.3cmx6cmx0.8cm　面は滑らかで平盤。周線は鋭く，全般に薄い。
(23)皮剥石器11cmx5cmx1.3cm　面は平盤。周縁は打製で鋭利。
(24)皮剥石器　7.6cmx4.2cmx1cm　裏面は打製で平盤。表面は中高で周縁は打製により刃部を形成する。
(25)皮剥石器　7cmx5cmx1cm　某面は打製で平盤。表面の周縁も打製で鋭利。
(26)皮剥石器　7cmx4.5cmx1.3cm　裏面は打製で平盤。表面は中高に。周縁は鋭利。
(27)鏃型石器　9cmx6cmx1.5cm　周線は打製で鋭利。この種のものは極めて少ない。

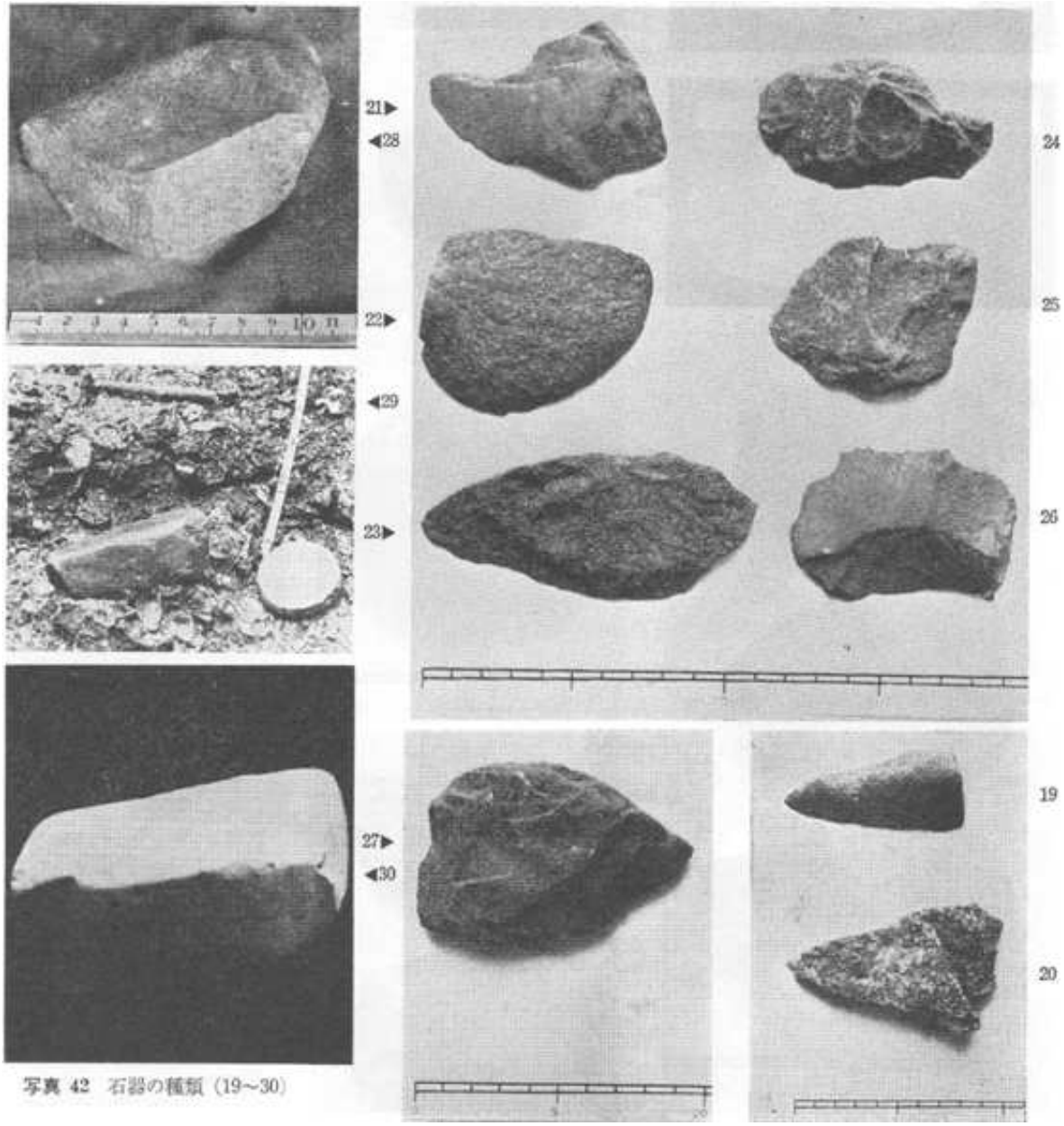


写真 42　石器の種類（19～30）

(28)皿形砥石　破片である。石器の皿面や縁高は滑らかに磨製。縁高の厚さは1.4-2cm。皿の探さは約3cm。底部の厚さ2-2.4cm。形状はやや楕円形。大きさ長さ14.5cm, 巾は8cmと推定される。

ブラジル・インディオ文化研究同好会「ブラジル・サンパウロ州内の考古学的調査」(東京人類学会，人類学叢刊乙，先史学第二冊， 1939年)ではこの石器を石ランプとして発表している。石ランブとした理由は,鯨や魚の油が豊富であるからと日本流に推定しているが,4千年から6千年前の古代貝塚人の生活環境や宗教的観念などから老えて,石ランブの名称は疑間に思われる。

ジポブラ第1貝塚では磨製石斧は少ないが，打製石器が極めて多い点からみて砥石と推定するのである。尚今後の研究に期待する。

石器の発見位置は第1断層近くの表土である。

(29)砥　石

砥石の表面は偏長方形で，やや平盤面をもつ。長さ26cm, 巾の広い方は15cm, 狭い方は10cm, 厚さは巾広の方が高くて9cm, 狭い方の厚さは4cm。平地面に置くと傾斜をなす。

発見位置は第3断層，表土から1.50mの深さであった。

(30)　砥　石

上記(29)の砥石と同型。長さ24cmの偏長方形で，巾の広い部分は12cnl，狭い部分は8cm，厚さは巾広の方が10cm，狭い方は4cmである。僚斜の度合いは前記の砥石と同様である。

(b)貝　類

貝塚に含有している貝の種類には次のものがある。

カキ科の貝類は全体量の約80%イタヤガイ科　　約5%

タイス科
ハマグリ科
マクラガイ科
ヤツシロガイ科
エロドナ科
全体で約5%

貝類以外の魚蟹類が約10%
以上の比率は推定量で計算した。

貝の種類

(1)オストレア･ブラジリアナ　カキ科
Ostrea brasiliaiia.

(2)ルシ－ナ･ペチナタ　イタヤガイ科
Lucina Peclinata.

(3)タイス･ハエマストマ　タイス科
Thais haemastoma Liune

(4)アノマロカルディア･ブラジリアナ　ハマグリ科　Anomalocardia brasiliana Gimelin

(5)オリバンシラリア･ウルセウス　オリビ科　Olivancillaria urceus Roding

(6)トナ･ガレア　ヤツシロガイ科
Tonna galea Linne

(7)エロドナ･マクトロイデス　エロドニ科
Erodona mactroides Daudin,

(8)石灰質筒　軟体動物の一種。舟食虫は塩水に

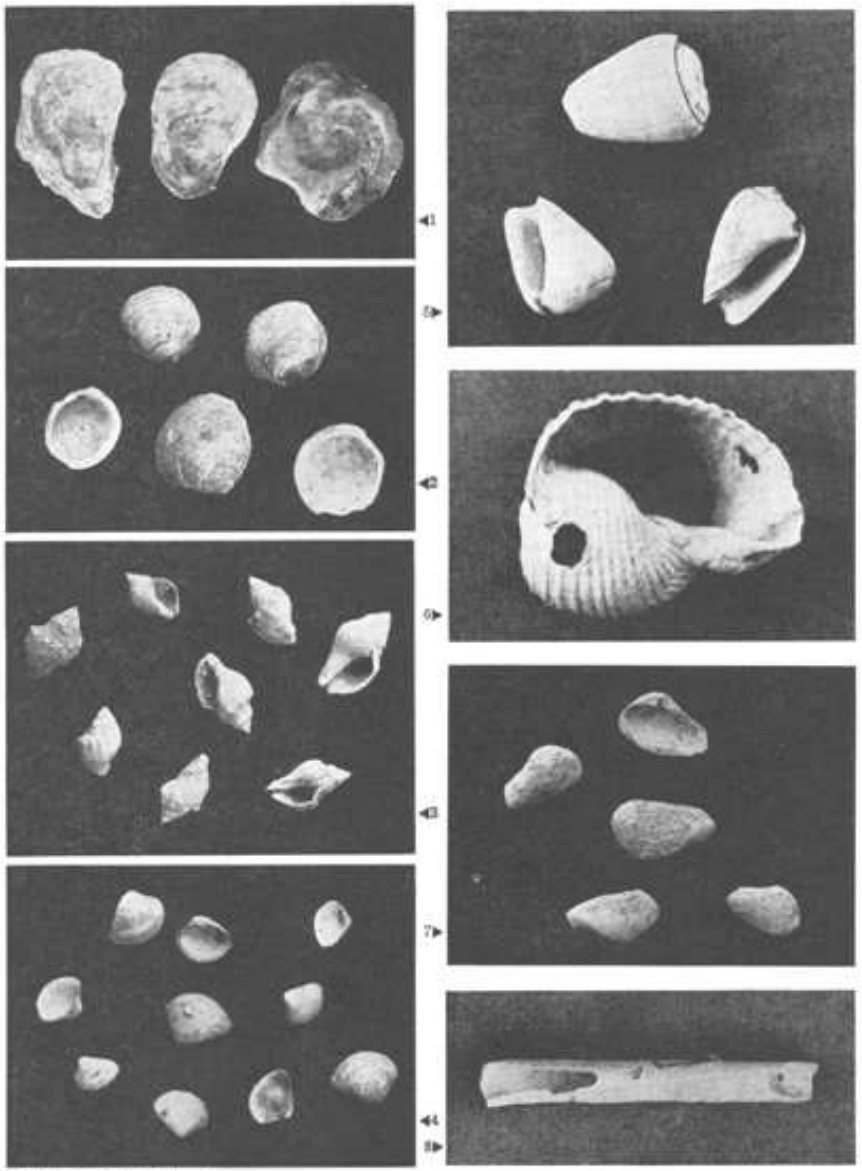


写真 43 貝の種類（1～8）

漬っているマンゲや木の根を石灰質で包み．筒を作る。

(c)動　物

貝塚から発掘された獣骨は極めて少ないが,出土した骨片にもとづいて説明する。

(1)鯨の内耳骨製品　発掘位置は貫通断層で，表土から2.50mの深さで発見した。

鯨の内耳製品は，長さ7cm,1部を平坦に削り，末端の細い部分の巾は0.5cm,太い部分の巾は1.9cmある。この種の用途は不明であるが,類似したものとして,リカールド･クロネはカナネア郡のチト貝塚からアザラシの歯で作ったテンベター（Tembeta下唇に穴を開けて差し込む一種の装飾具)を発見している。

鯨の骨片は貝塚の表面から出土し,又附近の貝塚からも発掘されている。

鯨の形態について参考までに説明しておく。ブラジル海域に棲む鯨はミンク(Minke)の種で，クロミンクとい

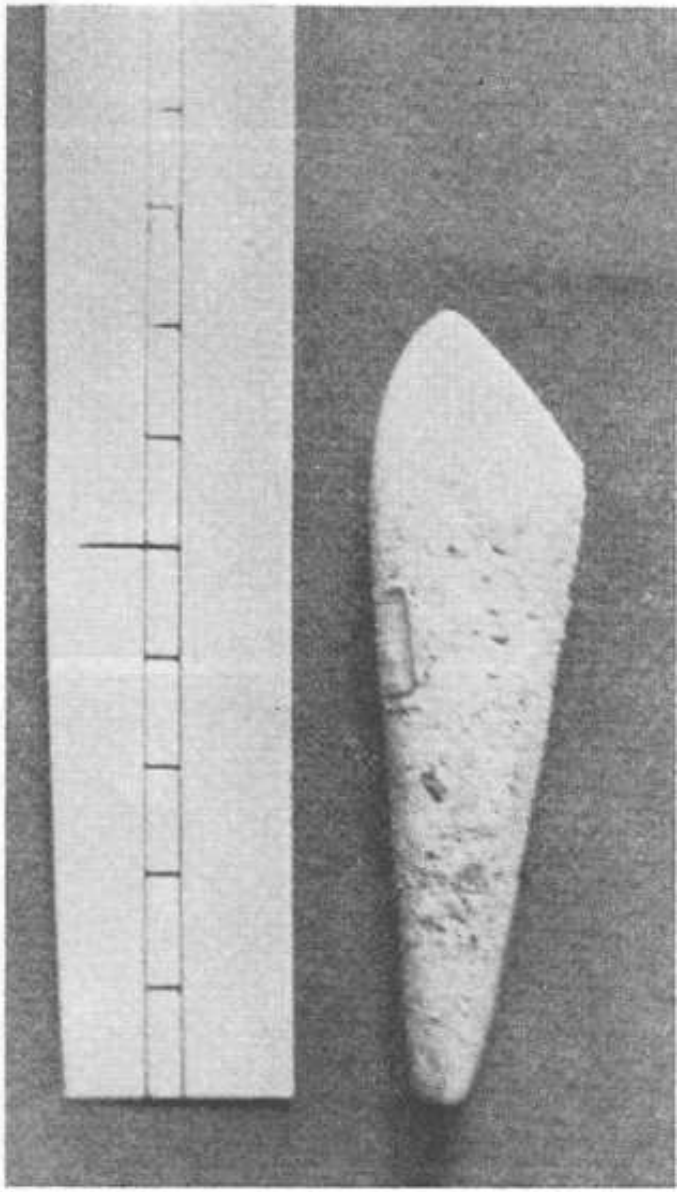


写真 44　鯨の内耳骨製品

い，ヒゲクジラの中では小型の鯨で，体長は9m以下である。ヒゲと胸ヒレに特徴がある。ヒゲは黄色がかった白色で，黒青色の縞がある。胸ヒレは白いバンド状の班点がある。この班点が目立つ。

学名はBaLaenoptera bonarensisである。

(2)ポルコ・ド・マット(Porco do Mato 山豚)　山豚の牙は第3断層，表土から3mの深さで見付けた。その生態については，アレクリン貝塚の動物編を参照されたい。

(3)アンタ(Antaブラジル貘)　貝塚の第3断層，表土から2.50mの深さよりアンタの歯，骨片2個，又第4断層の腐植土層より骨片3個出土した。(アレクリン貝塚動物編を参照)

(d)植　物

(1)ヤシ類

貝塚から出土した植物では椰子の種子がある。貝殻山の重圧で，多少偏平になっている。植物の種子が貝塚から出土することは極めてまれである。貝塚人が採収して来て，果実を食べた後，その種子を貝塚に拾てたものか，貝塚周辺に自生していて自然に落下して貝殻に混入したものかは不明である。

サンパウロの貝塚の周辺に見られるヤシの類には，次のものが普通である。

ムクジャーヤシ(Mucuja)　　Acrocomia sclerocarpa Mart.

ジョオウヤシ(Geriva, Coquinho)

Arecastrum romazoffianum Becc.

ブレジャウーバ(Brejauva)

Astrocaryum ayri Mart.

マクマン(Macuman)　　Syagrus campestris Wendl.

果実はそれぞれ食用となるが，ブレジャウ－バは刺が多く，その幹は細い。土人は弓や矢を作るのにも多く用いた。

(2)果実類

サンパウロ州の海岸山脈から海岸の叢林にかけて自生している果実の数は極めて多いが，土人が多く利用したであろうと思うものを少し拾って見ると，次のものがある。

ブラジルキイチゴ(Amora preta)　　Rubus brasiliensis Mart.

オオバライチゴ(Amora vermelha)

Rubus Rosaefolius J. E. Smith.

インガ－(Inga)

図 45-1 Mucujá-Acrocomia sclerocarpa Mart.
ムクジャーヤシ

図 45-2 Jerivá-Arecastrum romazoffianum Becc.
ジョオウヤシ

Inga affinis DC.

ツヤミオオイナゴマメ(Jatoba)

Hymenaea stilbocarpa Hayne.

クダモノトケイ(Maracuja roxo)

Passiflora edulis Sims.

グァビロ－バ(Guabirova)

Abbevillea maschalantha Berg.

タチバナアヂク(Pitanga)

Eugenia uniflora L.

ジャボチカバ(Jaboticaba)

Myrciaria cauliflora Berg.

バンジロウ(Goiaba)

Psidium guajava L.

クルマバパパヤ(Jaracatia)

Jacaratia dodecaphylla A. DC.

(3)マンゲ類

図 45-3 Mangue branco-Laguncularia racemosa Gaertn.

図 45-4 Mangue vermelho-Rhizophora Mangle Linn.

マンゲ林について

貝塚から軟体動物の舟食虫がマンゲの根を石灰質で包み，筒状の殻(写真43-8参照)を作り，貝殻に混って出土した。このことからして，貝塚の周辺にマンゲが繁殖していたことが認められる。

参考までにマンゲについて記す。

熱帯地方において，内陸の密林である熱帯降雨林をジャングルというのに対して，海岸汀線の密林をマングローブ林といい，ブラジルではマンゲ林(MangalまたはManguezalという)の名で呼ばれている。

熱帯，亜熱帯の海岸で，泥土が堆積し，潮の干満に応じて水面に出没する様な地域，河口，狭い海峡の地域に発達する。

マンゲ(マングロ－ブ)というのは単一な樹種の名称ではなく，種々雑多な植物からなり，分類的には類縁関係の遠い種類も含まれている。マンゲは形態学的に見ると，短い主幹をもった喬木であるが，高潮時には主幹がかくれ勝で，多くの樹冠が見えるにすぎない。干潮時には枝根は密叢となって見られるので，灌木の中に入れられている。

特徴としては，塩水に対して抵抗性の強いこと，支柱根を有するもの，気根を有するもの，胎生をなすものが多いことである。

ブラジルのマンゲには7科12種が知られているが，この内サンパウロ州の海岸に普通に見られるものには次の３種がある。

アメリカシロマングロ－ブ(Mangueb ranco)　　Laguncularia racemosa Gaertn

アメリカヒルギ(Mangue vermelho)　　Rhizophora mangle L.

クロマングロ－ブ(Mangue Siriuba)

州の南部にはアメリカヒルギがよく発達していて，イグアッペからカナネアにかけてのコンブリーダ島と大陸の間の狭い海峡にはその大群落が見られる。この近くの海浜に，これらの果実が多く打ち上げられているのを見るが，砂浜では定着せず，マンゲ林の中の泥土中で，はじめて定着発芽するのである。

またこのマンゲ林の中は，多くの動物の生育場所ともなっており，カニの類ではこうした地域に好んで生育するものがある。カキ貝をはじめ，種々の貝類，エビなどの甲殻類もよく生育している。哺乳動物としては，食肉目アラヒグマ科のマウン･ペラード(Mao pelado学名 Procyon canerivorus nigripes Mivart)が有名である。犬ぐらいの大きさで，足の平が湿地を歩く様に発達しており，マンゲ林でカニを漁って歩く夜行性の動物である。

(e)カニ類

カランゲ－ジョ(Caranguejo カニ，　Decapodes brachyuros)は節足動物の甲殻類で十脚目ー短尾亜目に属する。

貝塚からカニ類の爪や甲羅などの残滓が，数条の帯状になって貝殻層に挟っているのが見られる。このことからして，貝塚周辺のマンゲ林に豊富に棲息していたことがわかる。

ブラジルに約90種におよぶカニ類が棲息しているが，その内マンゲの根元を好んで棲息するものに次の３種類がある。

ウシデス･コルダツウス　ゲカルシニス科

　　Ucides Cordatus

ゴニブシス･クルエンタター　グラブシス科

　Gonipsis cruentata

オシポデ･クワドラター　オシポデ科

　Ocypode quadrata

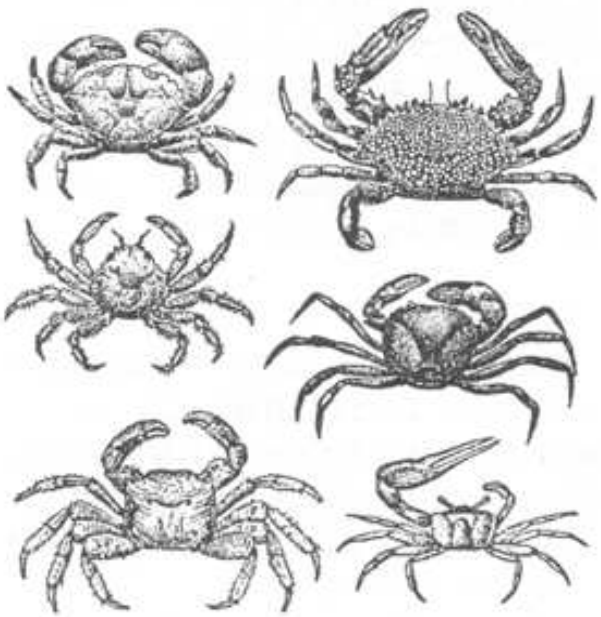


図 46-1　カランゲージョの種類

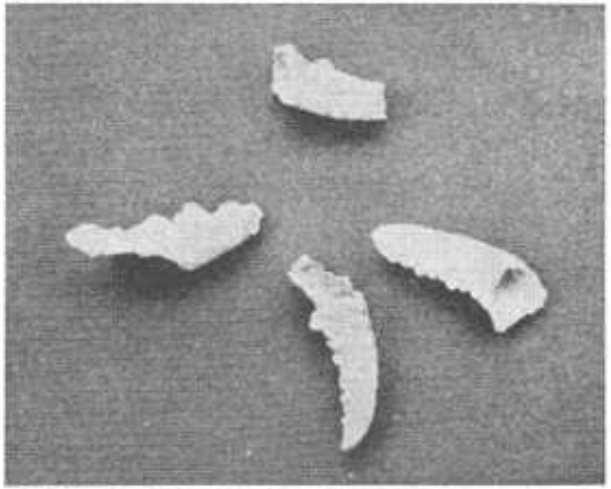


写真 46-2　カランゲージョの爪

カニは5対の脚を有し，胸部の中央に円形，卵形，又は角形の甲殻があり，腹部を二重に被っている。大部分は海辺に棲息しているが僅かに淡水に棲む種類もいる。食べ物には生きているものを捕えて食べるが，死肉も大好物である。海岸に生えているウリクリ(Uricuri)というヤシの葉で松明を作り，夜この松明を持って歩くと，その明りで浜辺に這い上っているカニを容易に捕獲することができる。

甲殻類のエビも貝塚に含まれていたであろうが，その分類はまことに困難である。

(f)魚　類

貝塚に魚骨が多く見られた。特にカニ殻の層に多く含まれていたが，貝殻にも混っていた。魚の種類は多種多様であるが，貝塚から出土した魚骨を分類し，それにもとづいて説明する。

(1)ミラグアイア(Miraguaia)シアエニス科　　Pogonias chromis.

下顎に約20本の髭があって，銀色の横縞が4状帯をなしている。成魚になると体長は1.50m になり，重量は60-65kgに達する。この種の魚の雄は，生殖期に入ると，強い音を発生させる。魚の気胞に特殊な構造があって，海面に太鼓の音に似た薄い膜面のような震いをひびかせる。深海に棲み，又マングゲ地帯にも棲む。食べ物は軟体動物や，魚の歯でかみ砕け

るような貝類は総て喰べる。時にはカキ貝を荒すこともあると云われている。

　ミラグアイアの歯は貝塚から比較的多く見出した。

(2)グアイビ－ラ(Guaibira)アジ科

　　Oligophtes saliens.

　外皮の鱗は，上の方は灰色で下側は銀色である。大西洋沿岸のリオ･デ･ジャネイロから北部にかけて棲息している。

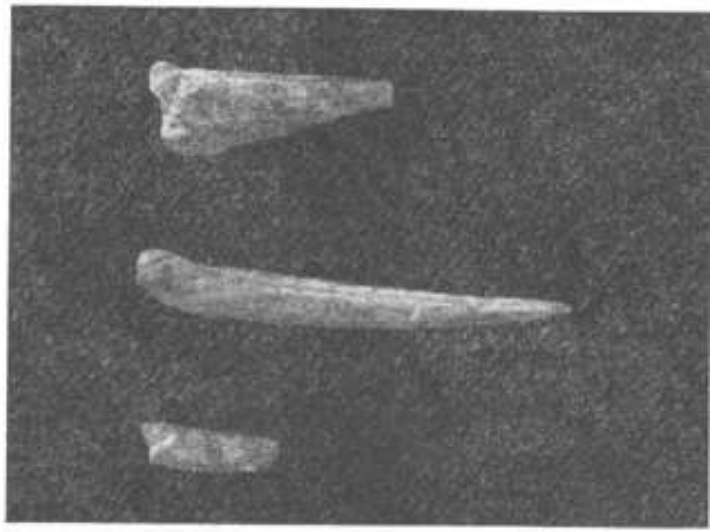


写真 47-3
(上)　チェルネ　背ビレの初の骨
(中)　バーグレ　背ビレの骨
(下)　ライア　尾骨

(3)チェルネ(Cherne)セラヌス科

　　Garupa nigrita.

　ブラジル南部ではチェルネテ(Chernete あるいはChernote)といい，北東部ではセリガ－ド･チェルネ(Serigado cherne)と云われている。背ヒレは２つに分かれている。幼魚期の体色は様々な斑点があって変り易く，多色に富んでいるが，成魚になると均一のチョコレート色になる。体長は2m　を超すものもあって，体重は400kg に達する。

(4)バーグレ(Bagre)アリウス科　　Nematognathos.

バーグレの言葉はポルトガル，或いはスペインから南米にもたらされた語であるが，その語源はスマトラで，この名のついた魚がいるので，アジアが語源の発生地とも云われている。

ブラジルのバーグレはArii科に属し，海産のものと，奥地の川や湖に棲むものとが，同じ名称で呼ばれている。

バーグレは口に長い顎髭がある。背ヒレや胸ヒレはあるが鱗はない。顎髭を常に動かして食べ物を探す。口に歯はないが平板骨が僅かに見られる。時には口内にヤスリのような小さな刺状のものが生えている。

雄は口の中に卵を収容し，卵が経2cmに達し，黄色をおび，卵内児が動き始めるまで注意深く育てる。海底，川底の泥土の中に棲むのが好きである。バーグレは海から河口に至り繁殖し，川に

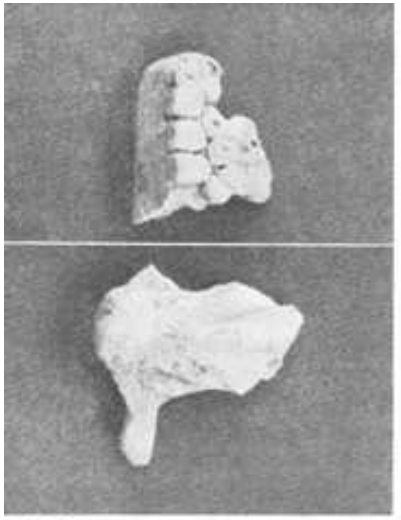


写真 47-1
(上) ミラダイア　平顎の歯の一部
(下) 頭骨の一部

写真 47-2　ダイピーラ
(上) 背骨の一部
(下) 頭骨

図 47-4　バーグレ

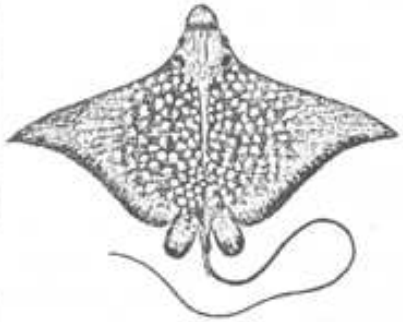


図 47-5　ライア

図 47-6　タイニア

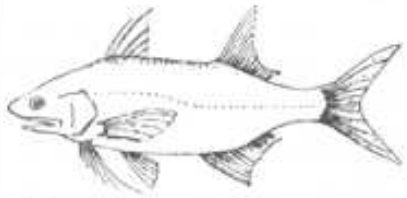


図 47-7　パラサ

上って行くこともある。土人語で海のバーグレをグリー (GuriまたはUri)と呼んでいる。食料として重要な位置を占めている。

(5)ライア(Raia エイ)アカエイ科　　Raia-amarela Dasyatis say.

ライアは軟骨の骨格をもつ魚として知られている。体の背部は平盤で,遊泳の胸ヒレは広く,尾は長く,腹部に割目のエラがある。大部分は海中に棲息しているが,淡水に棲むライアも少なくない。

ブラジル沿岸の東端のナタール(Natal)から南端のリオ･グランデ･ド･スール(Rio Grande do sul)にかけて棲息し,最も普通に見られる種類は,アマレーラ(amarela)である。

ライアの中に種類多様のものがある。海産ライアのチタ(Chita)は背が褐色がかっていて,黒い斑点がある。淡水産のものは体形が楕円型で,背部に美麗な縞模様があり,これに属するものにはコカール(cocal),リストラーダ(listrada),フォゴ(fogo)などがある。

電気を放つ器官をもつものはブラジル沿岸に棲んでいる。川に棲むものには,エレートリカ(eletrica または tremedeiro)と呼ばれるものがいる。

プレゴ(Prego)と呼ばれるライアは尾に鉄鋸歯型や弓矢の先のような尾をつけて,外敵を負傷させることがある。

この魚には愛情物語がある。或る漁夫が尾に鉄鋸歯状の骨の突起をもつ雌ライア2匹を捕

えて浜辺の上に引き上げた時に,直ぐその後から雄のライアが多数,傍にやって来た。数えて見ると14匹の雄ライアが命を失うことを恐れずに,自から進んで来たのである。魚の珍らしい愛情を記録した物語である。

物の形態に似た名称で呼ばれているものに,サッポ(Sapoひきがえる),ビオラ(ViolaまたはGuitarra)などがある。

或る種類は卵胎生で,稚魚が完全に発育してから生れるものがある。他のものは卵生で,角膜質の皮で卵を作る特徴があって,一般に四角形をなしている。

(6)タイニヤ(Tainha)ボラ科　　Mugil brasiliensis.

ブラジル全域の海岸に棲息する。

体長80-100cmに達する。幼魚は淡水に育ち,後に或る期間は半塩半淡の水域で過ごし,後に海に移る。

(7)パラチ(Parati)ボラ科　　小さな口で,横腹は塩をふりかけたように白い。体長は35-40cmていどである。ブラジル沿岸に多く棲息する。

G. ジポブラ貝塚のむすび

大陸から移動して来た古代人は,大西洋沿岸に面した海岸山脈や孤立しているイタチン

ス山脈の麓近くまで至り，海潮が満ちている状況を眼のあたりに見た。所々に島々が浮揚している。島の周園にマンゲ林が繁茂していた。

自然食の宝庫地

マンゲ林の根元は，枝根が密叢しており，この根元を好んで集って来る動物が多かった。その中にカキ貝類，カニ類，エビ類などがあり，又これらの動物を餌食にして集ってくる魚類にはライア（エイ）などがいた。類は友を呼ぶ方式で魚類も豊富になった。

幾世紀にわたって，海の宝庫は誰れにも侵されることなく，繁栄の一途を辿り続けた。海の動物は殖える上に，更らに殖えていき，共喰いの闘争が繰り返されて，動物の死骸も増して行った。カニが急激に繁殖した。　陸で動物の死骸を清掃する鳥に，カラスに似たウルブ（Urubu）がいる。ウルブーは常に空から地上の動物の動静を監視している。他方，海の清掃者はカニであり，海のウルブ－と云われている。

大陸ではイタチンス山脈の連峰が連綿と続き，天然林に覆われ，人跡未踏の天然林には果実をつけた樹が多種多様に生えていた。この原始林に，樹々の間を駈け巡る動物たち（アレクリンの動物編参照）も豊富に生息していた。

古代人の移住

古代人は海の宝庫をもつジポブラに移住して来た。ジポブラ島の周囲は海潮に溝ちていて，マンゲ林が繁茂していた。

貝塚の最底位置の残浮物の状況から考察して見ると，当時マンゲ林の根元には，カキ貝が最も多く，次にイタヤガイ（アメイジオア貝）が棲んでいた。古代人はカキ貝を常食にし，イタヤガイが増殖すると，それが常食に代った。カニ類が繁殖期になると，夜間，貝塚の傍まで這い上ってくる。貝塚上の焚火の傍わらでカニの甲羅や爪を石器で叩き割って，肉を食べた。そのカニの残滓は，黄灰色をおびた帯状の層をなし，貝塚の所々に見られた。

海の動物の味覚だけに頼っていると，陸地で動物を捕獲することを知っていた古代人は，獣肉の味を想い出し，ブラジル猿や山豚の狩猟に出かけ，捕獲した動物を貝塚の上で焼いて喰べた。これらの骨や歯の－部は，貝塚最底位近くに見られた。貝塚構成の後期に至って，この傾向は見られず，獣骨の出土量が少ないことから捕獲頭数がわずかであったと考えられる。捕獲する道具が幼稚で，動物を追い廻す苦労が多かった。島の周囲では安易に食糧が得られるので，あえて無理する必要がなかったであろう。

陸で果実を味わったことも，想像できる。

魚骨はカニ類の層に多く見られたが，貝殻にも混っていた。魚を捕獲する器具が発見され

ないことから，恐らく手づかみできるほど豊富に棲んでいたであろうと想像される。

鯨の骨の破片，その内耳骨の装飾品などの出土した量はきわめて少ない。近隣の貝塚にても脊椎骨，肋骨などが断片的に発見されているにすぎない。貝塚人には鯨を捕獲する技術もなく，猟器はいづれの貝塚からも発見されていない。近海に魚群が棲息していた。イグアッペ地域は浅瀬である。鯨はこの魚群を追って，浅瀬に乗り上げ，身動きができなくなって，貝塚人の食糧となった。島々に棲んでいた貝塚人たちが集まって来て，鯨の肉を分けあったと想像される。1977年にもカナネアの近海で鯨が浅瀬に乗り上げ，住民の食糧になったことがあった。

火の使用

貝塚の上層，中層，下層などに，火を燃やした痕跡がきわめて多い。貝塚人は海から採った貝類，カニ類，魚類，又は動物などを，火を取り囲みながら，焼いたり，焙ったりして喰べていた。時には火の傍で石器などを作っていた。

石器の使用

古代人の移住当初は，カキやイタヤガイなどを小石で割って喰べたが，肉に貝殻の破片や粉末が附着して喰べにくかった。皮剥や小刀の石器を作ることができて，貝の蓋を簡単に

開けられるようになった。カニ薪は叩石を使用したと推察される。　石器の大部分は石斧であるが, 掌中に収まるていどのものが多かった。貝塚の下層近くに大型石斧が見られたが, 量的には少なかった。鯨, 獣類, 樹の皮剥ぎなどには大型石器を使用されたであろうロ　石器の材質は玄武岩が多く，近くの岩肌にその材料が見られる。

貝塚の伝説

貝塚人は食糧の残浮物を一定の場所に拾て, 自然に貝塚を構成するに至った。貝塚人たちは火を取り囲み, 捕獲して来た動物, カニ, 貝, 魚などの肉を喰べ, その食べ滓の骨, 甲羅, 爪, 貝殻などを, 火元の周囲に捨てた, 周国が残滓で高くなると, 別の場所に移動した。貝塚に火元の移動した痕跡が数多く見られた。貝塚以外のところには決して残滓を捨てなかった。

もしも食べ滓の動物の骨, 魚の骨, カニの甲羅や爪, 貝殻などを海や森に拾てると, 拾てられた残骸は, 自分たちの仲間に向って「お前たちは其処に居ると, 貝塚人が来て, この俺のように, お前たちを捕えて喰べてしまうから, 其処から逃げなさい」と仲間に知らせるので, みんなが逃げてしまう，と古代からの伝説を信じていたかも知れない。

貝塚上で常に火を燃し続けていたことが, 残骸の散乱を防いだ原因でもあったのである。

屍の埋葬

貝塚から発掘した人骨の大部分は，正常な状態で横臥の屈葬である。その姿勢は，左手あるいは右手を頭部の下側においている。貝塚人の日常生活で，眠る姿勢は手枕して眠っていたことが推察される。死は永い眠りであり，死と眠りとを区別することができなかった。屍に手枕をさせ，眠った姿勢にして貝塚に埋葬したのであろう。それは埋葬の方位には関係がなかった。

埋葬の位置に就いては，第２次表土，即ち貝塚の中間に挟まっていた腐植土層の近くに埋葬されているものは．５例中４例までが，その土壌近くに埋葬されていた。わずかに浅く掘るか探く掘るかで純貝殻層内に埋めることが出来る。あえて浅くも探くもせずに土壌を目当てに埋葬した感がある。土壌に対する観念にもとづいての行為であったと思われる。

その観念とは，貝塚人の先祖である古代人は大陸に住居地があった。その大陸生活の習慣が貝塚人の子孫に伝達していったと推考される。遺棄された状態の人骨の中には焼かれた骨片も出土している。貝塚人同士の闘争によるものか，異人種間の戦いによるものかは不明であるが，喰人種であったことは否定できない。

中間の腐植土層

貝塚の中間に黒色腐植土の層が挟まっていることは，ジポブラ島の周囲の貝類，カニ類をことごとく喰いつくしたことを意味する。この貝塚人は新しい宝庫の地を求めて移動して行った。

中間の腐植土層の厚さは約10cmであった。10cmの層を構成するのに要する年月は不明であるが，長期間にわたって経過したものであろう。著者は昨年，40余年振りに同貝塚の跡を訪れてみた。貝塚跡に経40cmの樹が何本も生え，枝葉が空を遮えぎって薄暗く，原始林の様相を呈していた。表面に苔類が生え，薄い膜状の腐植物で覆われていた。

上位の貝塚人

貝塚の中間に挟まっている腐植土層を境にして．貝塚の下位を構成した貝塚人を，便宜上，下位貝塚人と呼び，上位を上位貝塚人と呼ぶことにする。

上位貝塚人がジポブラ島に移動して来たのは島の周囲に貝類，魚，カニ類が再び繁殖し，豊富に棲息するようになった以後である。

貝塚から発掘した人骨は，いづれも中間腐植土層からのもので，残念ながら下位貝塚人の人骨は発掘していないのである。貝塚を構成した下位貝塚人と上位貝塚人とが同一種族であるや否やは，比較することができないが，発掘した遺物の形態からして，両者に類似点

が多い事実から，同一種族と推定する。

現　況

ジポブラ島は,今では大陸と地続きになっている。島の周囲に繁茂していたマンゲ林は姿を消し,沼地となり,湿地帯となって小喬木が代って繁殖している。地図の上では島ではなく，ジポブラ丘，ベルナルド丘と書かれている。

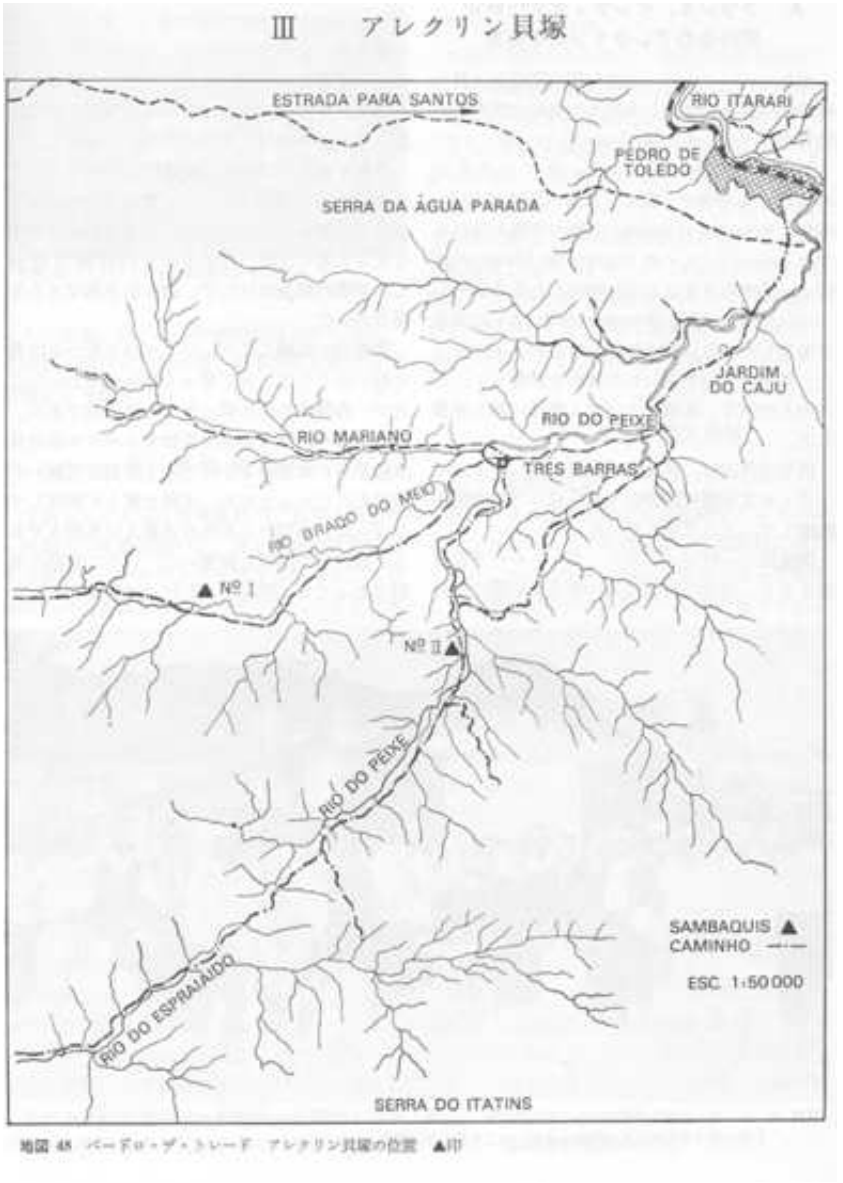
A．ブラジル，インディオ文化研究同好会のアレクリン貝塚発掘

ブラジル･インディオ文化研究同好会々員の神屋信一氏が,サントス地方の海岸山脈地帯を旅行中に，ジュキア線(Juquia)ペードロ･デ･トレ－ド(Pedro de Toledo, 元アレクリンAlecrimと呼称す)駅より東方15kmの地点，即ちイタチンス(Itatins)山脈の中腹を流れるブラッソ･ド･メイオ(Braco do Meio)の川辺に,陸産のカタツムリに類似したカラムージョ(Caramujo学名Strophocheilus sp.)の貝塚を発見したのは1936年10月ごろのことであった。貝塚の中央と思われる個所を試掘して,幼児の人骨破片,乳歯および成人骨の一部を発掘した。

同年12月29目，神屋氏の報告に基づいて，インディオ文化研究同好会々員を以って調査団を組織して，この貝塚に赴いた。

調査団の一行がペードロ・デ．トレードに到着すると，地元の在留邦人10数名が応援に加わった。トラックで山麓のトレス・バーラス（Tres Barras）村に到着すると，更らに応援に馳せ参じた者数名が加わった。道案内に当った大城重助氏は，数頭の農耕用乗馬を調達されたので，馬の背にゆられながら，清麗な渓谷に沿って急坂の山径を登り，現場に到達した。

貝塚を中心に20余名の調査団が，喧騒の中で11体の人骨を発掘したころ，突然当地の武装警官3名が現われ，発掘の中止命令と同時に発掘した3人骨の没収，作業中のものは再び埋没し，学術的調査は叶わず，遂に引き揚げざるを得



地図 45 ペードロ・デ・トレード アレクリン貝塚の位置 ▲印

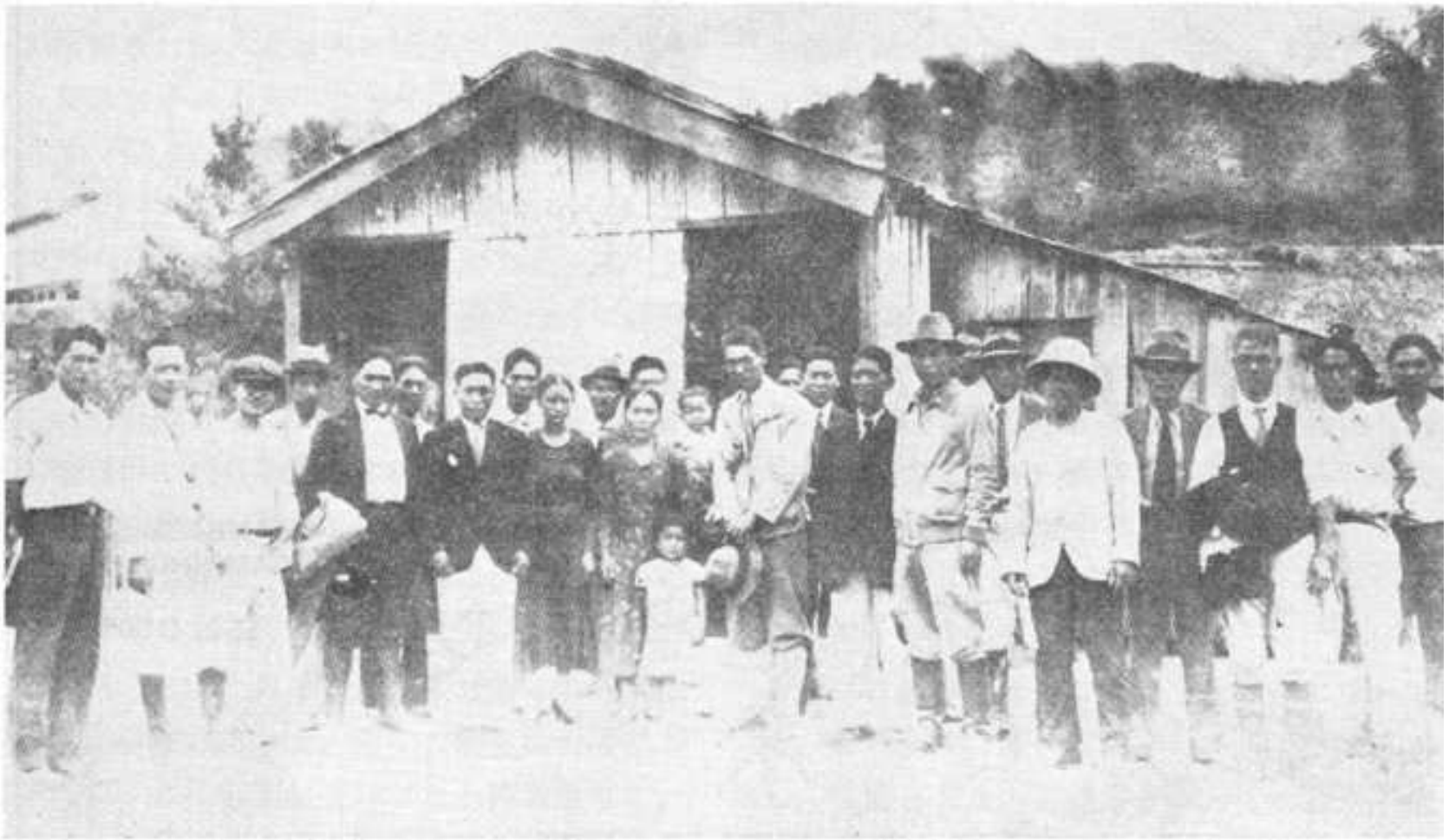


写真 49　インディオ文化研究同好会の貝塚調査団　トレス・パーラス部落に於ける貝塚調査団の一行　中央前列，帽子を手に持つ市毛孝三氏（同好会会長）右より２人目が著者

なかった。

調査団を組織してサンパウロから斯かる山奥に赴いたことは，末だ会って見られなかったことで，当響察の目に留ったことは当然である。然も本会の会長市毛考三氏はサンパウロ市の日本総領事の肩書があり，その上発掘許可願いが届けられなかったため，当局を更らに刺戟してしまった。当国からみれば日本人は外国人である。無許可で勝手な振舞いは，いかに寛裕な国柄であっても，黙許するわけには行かなかったようである。余りにも学術的迫求にのみ走り，又お祭り騒ぎの行動が禍いをもたらしたことで反省させられた。

B. 単独発掘

予想もしなかった突発事件で，貝塚の調査は一時頓挫の状態が続いた。然し著者の貝塚に対する執念は，いやが上にも燃えあがった。この時に初めて貝塚の虜になってしまったことは事実である。

翌年の6月19日より23日の5日間にわたって，アレクリン貝塚発掘の許可願いを当局に提出し，許可を取得した。今度は慎重である。著者の助手として大城重助氏及び弟の栄吉氏が協力してくれた。この発掘でやや詳細にわたって調査することはできたが，決められた短

い期間の調査では，貝塚の全貌を究明することはできない。矢張り未発掘の部分に未練が残った。

トレス･バーラス村に日伯両語の小学校がある。ブラジル語の教師は州政府の派遣教師である。日本語教育は同地域に在住する日本人植民地の父兄会によって運営されていたが，日語教師の欠員状態が続いていた。

アレクリン貝塚の調査に通っていた著者に，この小学校の日語教員の要請があった。当時のブラジルの教育局では，外国語の教育資格者は州政府の資格試験の認定を得ることが規定されていた。著者はその規定に該当していたので，奉職の要請に応じた。

写真 50　アレクリン貝塚調査団の発掘状況

以後は奉職のかたわら，学校の休日を利用して，貝塚調査の貫徹に努めた。然もこの発掘に1年以上の歳月を費したことは勿論である。

地元に住む大城重助氏は，同じイタチンス山脈の渓谷から流れているペイシ川(Rio do Peixe)沿いで，トレス･バーラスより　4kmほど登った地点に同じ形態の貝塚を発見した。初

めに発見したブラッソ･ド･メイオ川沿いの貝塚をアレクリン第１貝塚といい，ペイシ川沿いのものをアレクリン第２貝塚と呼ぶこととする(1938 年８月の記録帳による)

C. アレクリン第１貝塚

(a)地理的位置

サンパウロ州の玄関口に当る港市サントスからはじまるジュキア線鉄道は，大西洋岸に面して擁立している海岸山脈と，奥地に向って孤立しているイタチンス山脈との中間を通ってジュキアに達する。サントスから100km余りのところにペ-ドロ･ド･トレ-ドという駅がある。この駅は1938 年ころまでは，アレクリン(Alecrim)駅と呼ばれていた。

現在では鉄道線と平行してバス路線が走っている。駅の傍らを流れるペイシ川に沿うて行くこと　7kmほどで，イタチンス山脈の麓に達する。山脈のそれぞれの渓谷から奔流してくる３本の川は．この麓のトレス･バーラス村で合流している。左側の川をペイシ川，真中をブラッソ．ド･メイオ川，右側をマリアーノ川と呼んでいる。

真中のブラッソ･ド･メイオ川が流れる谷間に沿うて，急坂を7.5km 程登った所に，額ほどの平担地がある。其処に日本人の農家があって，その居宅の近くにアレクリン第1貝塚が

ある。

(b)貝塚及び周囲の状況

この貝塚の位置は，前記の通り，わずかな平坦地にあって．三方は山肌に囲まれている。貝塚は平担地の内でも，やや丘をなしている。ブラッソ・ド・メイオ川はこの丘を右廻りして東の方に流れ去り，西側斜面は4mほど削り取られて急斜面をなす。東南の傾斜は，やや緩やか。

西側の急斜面は川の氾濫によって削りとられたものであろう。丘の北西側に渡口麗栄氏の住宅があり，又西寄りに10数本のミカン樹が植わっていた。数年前にブラジル人某が貝塚の頂上に家屋を建てる時，柱の穴掘りに人骨が出た，と云い伝えら

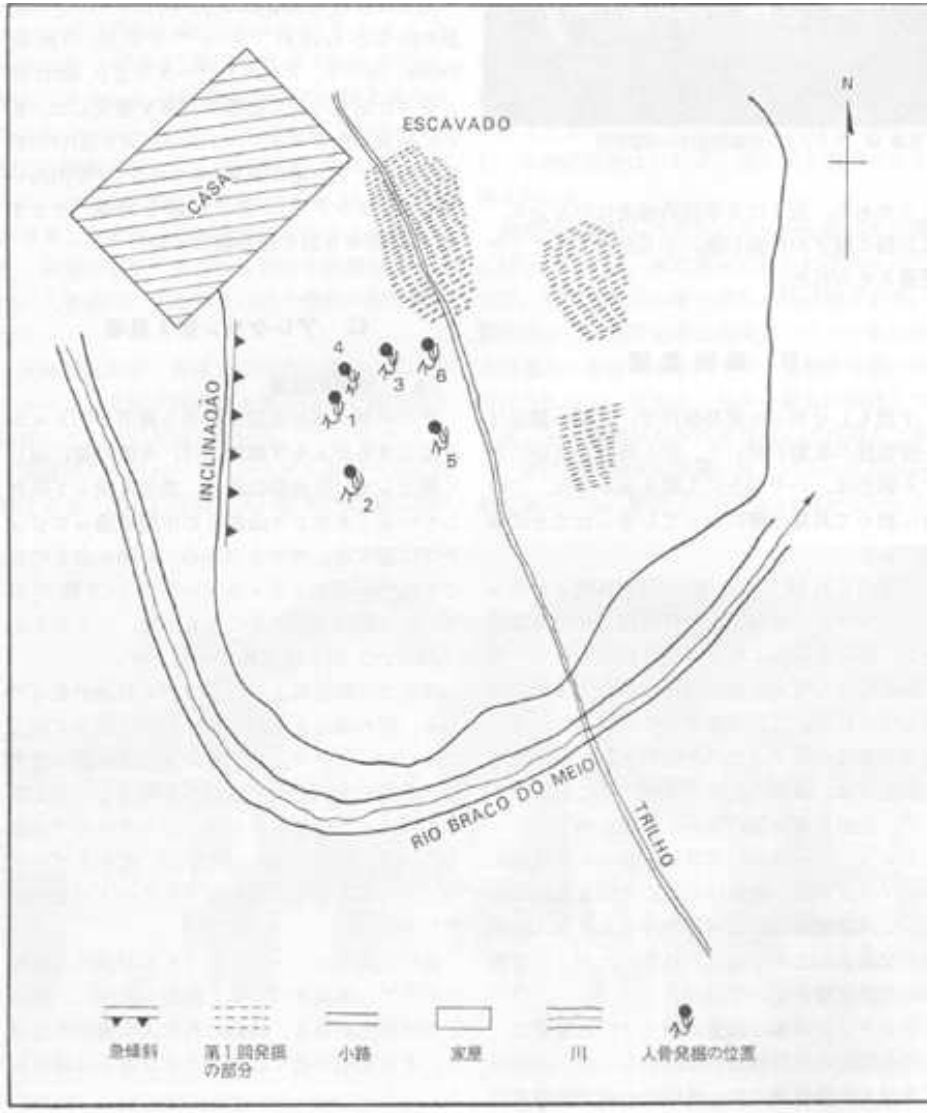


図 51　アレクリン第1貝塚附近図及び人骨埋葬位置

れている。貝塚全体としては甚だしい破壊が見られなかった。

貝塚の広さは南北に30m, 東西に25mの，やや楕円形をなし，南端の川岸より頂上までの高さは5mである。表土のカラム-ジョの貝殻破片は散乱しており，一見して貝塚であることがわかる。表土は恐らく永年に亘っての降雨や,傍を流れる川の氾濫で流失したものと思われる。

現在の地表下20-40cmの深さで貝層に達する。貝層の深さは約1-1.5mで,貝殻の大部分が腐植土と混っていて,貝殻だけの層は見られなかった。カラムージョの貝殻は殆んど風化,重圧で破壊されたもの90%で，残りの10%は原型のまま発掘された。

D. 発掘状況

前記した初めの試掘や，インディオ文化研究同好会の発掘で，貝塚の埋葬状態は立坐の屈葬であることが判り，以後の発掘が進むにつれて更らに明瞭となった。

以下は人骨の発見した順序に基いて番号を附し，発掘の状況を記載する。

(a)第1号人骨は幼児骨を伴う

位　置

成人骨，幼児骨共に地表下75cmの深さにて発見された。その位置は黒色土で，カラムージョの殻破片が僅かに混っていた。その下位は黄赤色の粘土質土壌であった。

石　塊

成人骨の上部に，およそ四角形の偏平な石塊(長さ，巾共に25cm，厚さ12cm)が埋葬されていた。

発掘時の状況

頭部は石塊の北側にあって，木の根で破壊され，顔面は俯向，上腕骨，尺骨は頭骨の近くにあった。石塊の下に肋骨，脊椎骨などがあって，いずれも石の重圧で細かく砕けていた。石塊の南側に脊椎骨の一部，骨盤，足骨などがあり，大腿骨は石塊の左右に見られた。

副葬品

成人骨の頭部側にカキ殻1枚。又体の附近よりプジウ(吠え猿)の歯　アンタ(ブラジル貘)の歯の一部が出土した。

幼児骨

成人骨の南西約30cmほど離れた位置にあって，頭部は成人の足骨側に見られた。頭部より西方50cmに上肢骨の一部　80cm離れて下肢骨があり，脊椎骨，肋骨，骨盤などは細砕されて不明瞭であった。

埋葬当時の考察

屍の両脚を折り曲げ，体の周囲や頭部を植物性のもので包み，副葬品のカキ殻を背後に供えて土壌を埋戻し，頭上に石塊をもって蓋を施した，と推考される。

時間の経過にともない，肉体と植物性は腐敗し，隙間の広い背後に倒れ，足骨，骨盤はその位置に止まり，肋骨，脊椎骨が石塊の下敷になった。成人の倒伏状況からして南向きの立坐の屈葬で，幼児は成人の前側に埋葬した。

(b)第2号は幼児骨

位　置

この人骨は地表下20cmという浅い位置で発掘した。表土が薄いので人骨の保存状態は極めて悪かった。

石　塊

なし。

発掘当時の状況

頭骨は北東の位置にあって，破壊され，脊椎骨を中にして両側に肋骨が見られ，その左側に上膊骨の－部があり，頭骨より肋骨の末端まで35cmで，下肢骨は見付からなかった。

副葬品

なし。

考察

埋葬の位置は表土から浅く,鄭重に埋葬した形跡が見られず,むしろ遺棄の状態と見られる節があった。

写真 52　第1号人骨埋葬状態　写真の右端が幼児骨

(c)第3号人骨は幼児骨を伴う

位　置

貝塚のほぼ中央は最も高い所で,地表から30cmの探さでは黄色をおびた砂質の土壌である。その下位35cmはカラムージョ殻破片を含む黒色土。更にその下位は黄赤色粘土質土壌で,この層内から第3号人骨を発見した。粘土層には貝殻片は含まれない。表土から人骨までの探さは1mであった

写真 53　第2号幼児骨

発掘当時の状況

人骨の上に5個の石塊が載っていた。西側に3個,東側

に2個であった。 3個の石塊の北端に，顔面が西向きになった頭骨があり，頚部の下側に丸形小石1個，その南隣に，やや丸形の石塊(径約20cm)があり，更らにその南に隣接して長方形の偏平石塊(長さ20cm, 巾16cm)が見られ，これらの石塊の下敷きになっていた肋骨，脊椎骨は細かく砕けて原形は認められなかった。

東側に並んだ2個の石塊の内，奥の方の石塊は，やや梯形の偏平石(長さ25cm, 幅20cm)で，表面滑らかな平面砥石である。隣接の石塊は最も大きく，やや卵型の偏平石(長さ30cm, 巾20cm)で，中央部に浅い溝を有する砥石である。これらの石器の下敷になって，やや斜めに立っている下肢骨が見られる。左上膊骨は後頭部にあり，右上膊骨は横向き顔面の上位にあった。

副葬品

顔面の前側に，平饅頭形の小石(径約7cm)と1枚のカキ殻とが重なり合っていた。頚部より獣牙に穿孔した首飾り35個と，上肢骨あたりより同じく20個の飾り物が発見された。上記の砥石も副葬品と見做される。

写真 54-1 第3号人骨埋葬状態 石塊群で埋葬された状況

これらの石塊群の外側，即ち北東35cmの位置に，頭骨の

破片と数点の骨片があるにすぎなかった。

埋葬当時の考察

埋葬は南方に向けて立坐の屈葬であった。首や腕にブジウの牙で作った首飾りをつけ，背後に小石やカキ殻を供え，屍の周囲を直接土壌が附着しないように，植物性のもので包み，背後に幼児骨を横臥させて，土壌を埋戻し，屍の肩上のあたりに三ッ巴状に石塊を並べ，その上に一番大きな有溝砥石で蓋を施した。この砥石は日常使用していたものであるが，副葬品を兼ねたものとして興味ある埋葬状態である。

写真 54-2　第3号人骨の石塊群を除いた跡

写真 55　第4号人骨埋葬状態　人骨と石塊

(d)第4号人骨は幼児骨を伴う

位　置

地表下60cmの探さで，カラムージョ殻片の少ない黒色土中で発見された。

石　塊

頭部より北に約10cm離れて楕円形偏平石塊(長さ30cm, 巾20cm)があり，又西側に，やや長方型の偏平石塊(長さ25cm, 巾10cm)があった。

発掘当時の状況

頭骨は北西の位置にあり，上顎骨，下顎骨は頭骨の側に見られたが,細かく砕けていた。頭骨の南隣りに肋骨があり，頭部を中央にして.

その左右に大腿骨,腓骨,脛骨などがやや斜めに立ち,右側の足骨が南側に散在しているのが見られた。

写真 56　第5号人骨　巨石塊と埋葬状態（頭骨の上位にあるのはカラムージョ貝）

副葬品

上記の石塊の，ほぼ中間に饅頭形の小石1個が見られた。

幼児骨

成人骨より南西10cmの位置に，幼児骨の頭骨破片と他の骨片数個が見られた。

埋葬当時の観察　頭骨が北側にあって，足骨や骨盤が南側に見られるから，南向きの立坐の屈葬である。

埋葬に当って,屍の背部を植物性のもので満し,小石を人体の横に副葬品として供え,土

壌を埋戻して,頭部の前側に長方形の石塊を置き,楕円型の石塊を蓋石として埋葬した。幼児骨は石塊の外,即ち成人の前側に横臥にて埋葬された。

(e)第5号人骨

位　置

家屋に通ずる小径の近くで,地表下60cmの深さで発見した。

石　塊

人骨の傍に長方形偏平の大石塊(長さ100cm,巾50cm,厚さ約20cm)があり,当貝塚で最も大きい。

発掘当時の状況

人骨は石塊の西隣に接していた。頭骨は北北西の位置にあって,頭部は仰向け状態に見られた。上肢骨,下肢骨は共に屈折し,指骨は頭部の西側にあり,足骨は南側に散在していた。

副葬品

頭骨の周囲より7個のカキ殻を見付けた。人骨の周辺よりパーカ(Paca)やアンタ(Anta)の歯や牙,粗雑な骨器数個が出土した。

埋葬時の観察

足骨や骨盤は人体の南側に見られ，南向きの立坐の屈葬にし，背後にカキ殻を供え，獣の牙歯や骨器などを体の周囲に置き，植物性のもので体を包み，土壌を埋戻して，頭上部に長方形の偏平石塊を置いて埋葬した。

時間の経過にともなって，石塊の重量で背後に倒伏した。上肢骨や下肢骨が脊椎骨の上側に見られるので仰向けに倒れたことが分かる。副葬品のカキ殻は山岳地帯では極めて珍らしく，海岸地域との交易を意味し，又獣歯牙により森林にて弓矢で獣類を狩猟し，食料に供していたことを間接に物語っている。

(f)第6号人骨

位　置

家屋に通ずる小径の下，地表より40cmの深さにて見付けた。

石　塊

なし。

発掘当時の状況

肋骨，脊椎骨，骨盤などは東西の方向に横臥の状

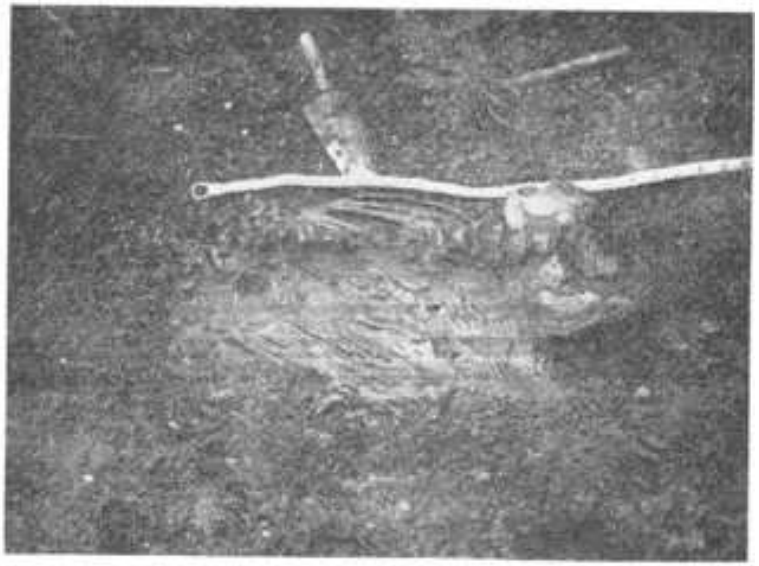


写真 57　第6号人骨　胴体だけの人骨

態で見られた。頭骨，上肢骨，下肢骨などは，その位置に見られなかった。

副葬品

なし。

考察

石塊や副葬品は使用されておらず，埋めた深さも浅く，胴体だけが遺棄の状態で埋葬されていることは稀有の存在である。

敵部落との闘争に際して，捕虜を殺害し，頭部は戦勝記念にし，手足は食料に供し，胴体だけ埋葬に伏したとも思考される。

E. アレクリン第2貝塚

貝塚周囲の状況

トレス･バーラス村より，ペイシ川に沿うて4kmほど登ったところに，第2貝塚がある。地形や環境は第1貝塚と全く類似していて，規模がやや小形といった程度である。

貝塚のある場所は，緩かな傾斜上にある。貝塚はわずか1mほどの高さで，やや円形をなし，直径約16mである。表面にカラム－ジョ殻の破片が見られることから，貝塚であること

が解る。ペイシ川は貝塚の西側を流れて，南に下っている。家屋に通ずる小径は．貝塚の北西に通っている。又東側にバナナが数本植わっており，貝塚上にゴイアバの樹が見られる。1920年ごろに，貝塚上に家屋を建てたと云われ，その跡と思われる所にヤシ樹の柱が腐蝕していた。

第2貝塚より発掘した人骨を，煩雑を避けるために第1貝塚に引続き，発掘した順に，通し番号として記載した。

(a)第7号人骨の埋葬状態

位　置

この成人骨は貝塚東部のバナナの木の附近で，表土より70cmの深さ，カラム-ジョ殻泡りの砂質土壌の層内より発掘した。

石　塊

写真 59-1　第7号人骨上の重ね石の状態

写真 59-2　第7号人骨　石塊群を除いた跡の埋葬状況

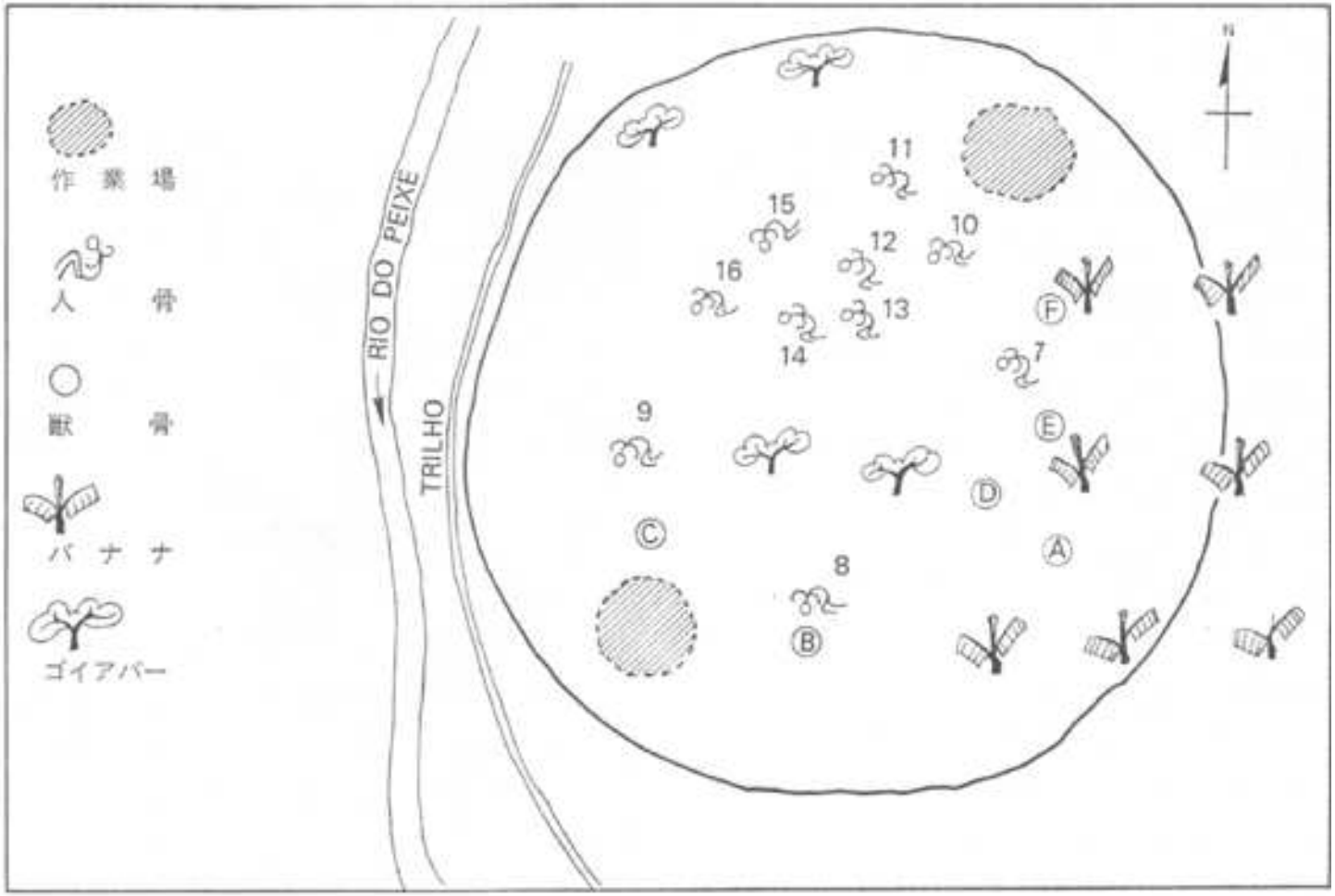


図 58　アレクリン第2貝塚　貝塚周囲と人骨獣骨埋葬の位置

人骨の真上に3個の石塊が2段に積み重なった状態に見られた。最上位は蓋石で，ほぼ方形偏平の石塊(長さ30cm，巾26cm)である。その下側に2個の石塊が東西に並び，東の石塊は三角形偏平石塊(長さ　35cm，巾21cm)，西側のも三角形の偏平石塊(長さ25cm，巾20cm)である。この2段重ねの石塊群の南に隣接して，小型の偏平石3個が，三角点の状態にあった。

発掘当時の状況

積み重ねの石塊を除去して見ると，人骨は南北の位置に埋葬されていた。南端に足骨が見られ，左右の四肢骨は平行状に並び，やや中央に頭骨と脊椎骨の部分があって，頭骨の北西に肋骨と骨盤がある。

この人骨の周囲に幼児骨は見られなかったが，頭骨の北側に獣骨の骨片が数点見付かった。

副葬品

石塊の項目に記した3個の小石は副葬品と見做される。

埋葬時の考察

埋葬は西向きの立坐の屈葬である。屍の前側に小石の副葬品を供え，背後に動物の骨を置き，土壌を埋戻して，頭上部に2個の石塊を並べ，更らにその上に蓋石を置いて埋葬した。

石塊の重庄で体位が西寄りにねじれて，そのままの状態で押し潰され，頭部を股間に突込んだように見られた。

従来からの墓穴の広さからみれば，多少狭く，屍が腐蝕しても石塊群は余り移動せず，そのままの状態で鎮圧している。

(h)第８号人骨の埋葬状態

位　置

上層は黒色砂質土填で，探さ35cm，，この位置に黒く焼けた獣骨片が，かたまって出土した。次の層はカラムージョ殻破片混りの砂質土壌で，55cmの厚さがあった。

人骨は表土から80cmの深さで発掘された。

発掘当時の状況

人骨の上側に４個の石塊が東西に並び，手前の東端の石塊は，短方形で厚みある偏平石(長さ25cm，巾20cm)で，その上に饅頭形小石が1個重ねおかれていた。小石のある石塊の下側に頭骨が見られ，細かく砕けて原形は認められな

写真 60-1　第８号人骨上の石塊群　その上位左右にカキ殻あり　右側カキ殻の中央に穴が見られる

かったが，頭部の周囲から獣牙に穿孔した首飾り 44 個を発見した。

西隣りの石塊は長三角形(長さ約 40cm, 底辺 18cm, 厚さ 13cm)で表面は割石のような荒肌で，この石の下側に脊椎骨が破砕していた。

さらに西に隣接して長方型偏平石塊(長さ32cm, 巾20cm)がある。この石塊と前記の長三角石との間に小形の割石が挟まっていた。西端の石塊(長さ30cm, 巾23cm)は中央に浅い凹面を有する砥石で，その下側に左右の足骨が見られた。足骨の北側に，下肢先の膝先は南方に向いていた。

副葬品

足骨の西側にカキ殻1枚，反対の東側のカキ殻の中央に孔が穿ってあった。この隣に饅頭形小石が見られた。人骨の北東よりに骨器1個出土す。前記した獣牙の首飾り 44 個，凹面の砥石も副葬品である。

埋葬当時の考察

石塊の重庄で体位が西寄りにねじれて，そのままの状態で押し潰され，頭部を股間に突込んだように見られた。

従来からの墓穴の広さからみれば，多少狭く，屍が腐蝕しても石塊群は余り移動せず，そのままの状態で鎮圧している。

(h)第８号人骨の埋葬状態

位　置

上層は黒色砂質土填で，探さ35cm，，この位置に黒く焼けた獣骨片が，かたまって出土した。次の層はカラムージョ殻破片混りの砂質土壌で，55cmの厚さがあった。

人骨は表土から80cmの深さで発掘された。

発掘当時の状況

人骨の上側に４個の石塊が東西に並び，手前の東端の石塊は，短方形で厚みある偏平石(長さ25cm，巾20cm)で，その上に饅頭形小石が１個重ねおかれていた。小石のある石塊の下側に頭骨が見られ，細かく砕けて原形は認められなかったが，頭部の周囲から獣牙に穿孔した首飾り44個を発見した。

西隣りの石塊は長三角形(長さ約40cm，底辺18cm，厚さ13cm)で表面は割石のような荒肌で，この石の下側に脊椎骨が破砕していた。

さらに西に隣接して長方型偏平石塊(長さ32cm，巾20cm)がある。この石塊と前記の長三角石との問に小形の割石が挟まっていた。西端の石塊(長さ30cm，巾23cm)は中央に浅い凹面を有する砥石で，その下側に左右の足骨が見られた。足骨の北側に，下肢先の膝先は南方に向いていた。

副葬品

足骨の西側にカキ殻1枚，反対の東側のカキ殻の中央に孔が穿ってあった。この隣に饅頭形小石が見られた。人骨の北東よりに骨器1個出土す。前記した獣牙の首飾り 44 個，凹面の砥石も副葬品である。

埋葬当時の考察

人骨の埋葬方法は今迄に見られない屈葬で，南向きに両膝を地面にて折り曲げた正坐の姿勢である。

屍の背後両側にカキ殻を１枚宛に，又小石を置き，首に首飾りを施したものに，土壌を埋戻した。頭部上の周辺に３個の偏平石塊を三角点に置き，その上に蓋石を安置した。この積み重ねた石塊群の上に饅頭形小石とか破砕した小石が見られた。屍を埋葬した後，その上で火を焚き動物を焼いて供養した形跡がある。装身具，石器，骨器，カキ殻などの副葬，正坐の埋葬，動物の供養などからして，部落社会の他位がうかがわれる。

写真 60-2 第8号人骨 石塊群を除いた後の検出状態

写真 61 第8号人骨の検出状態

写真 62 第10号人骨の検出状態

(c)第9号人骨(少年)の埋葬状態

位　置

表土は黄赤色の粘土質土壌で，厚さは4cmであるが，この層は1920年ごろに家屋を建てた折りに地均し用に搬入した土壌である。この下側の土壌は黒色の砂質壌土で，厚さは50cm，次は同質の土壌で，やや灰色を帯び約20cmの厚みがあった。続いてカラム-ジョ殻混りの黒色土壌で，厚さは約30cmである。人骨はこの最底位において発見した。搬入の粘土層を除き，表土から1mの深さにて発掘したのである。

発掘時の状況

頭骨は4，5片に割れ，うつ伏せの状態である。頭骨の下側に掌指骨が見られ，又西方に址骨が散在し，東方に肋骨と脊椎骨とがあり，下肢骨は頭部を挟むように，八の字形に南西と北西の左右に分れ，上肢骨は頭部の北と南東に分かれていた。人骨全体は30cm2の面積内に収まっていた。

石　塊

頭骨に隣接している石塊(長さ19cm，巾15cm)と，左隣にほぼ楕円形の偏平石があった。

副葬品

頭骨の割目に　8cm　と12cmほどの小石があり，頭部附近に赤色の軟石があって，頭骨

と下肢骨の-部とが赤色に染まっていた。人骨の西南部にカキ殻1枚と骨器2個を見付けた。

埋葬当時の考察

屍を南西に向けた立坐の屈葬である。人体の前側にカキ殻や骨器を置き，土壌を埋戻し，頭上に赤色の軟石や小石を副葬品として並べ，その両側に小形の石塊を置いた。

時間の経過とともに，赤色の軟石は自然に溶解して頭骨を赤色に染め，更らに下肢骨まで染色した。下肢骨が左右に開いたので頭部が股間に落ち込んだ。

人骨は頭蓋骨の厚さから，15，6才の少年と推定する。子供の埋葬用石塊は小形のものを使用し，赤色軟石で躯に化粧を施し，鄭重に埋葬したものと推察す。

(d)第10号人骨の埋葬状態

位　置

表土は黒色土壌で，その深さは50cmである。次の層はカラムージョ殻破片混りの黒色土壌で，人骨はこの層内にあって，表土から75cmの深さに当っている。

発掘当時の状況

下肢骨は直立の状態で，凡そ70度の角度を示し，わずかに西方に傾き，上膳骨の一部は東側に横倒れになっていた。頭骨は直立した下肢骨の基にあって，脊椎骨と骨盤は腐蝕して

見あたらなかった。

石　塊

頭骨の北東に方形偏平石塊(長さ18cm, 巾16cm)と，ほぼ円形の偏平石塊(長さ20cm, 巾19cm)の2個が並んでいた。

副葬品

人骨の上側より骨器5佃とカキ殻2枚が出土した。

埋葬当時の考療　屍は南西に向けた立坐の屈葬である。墓穴の広さと埋葬する位置によって，人骨の状態は千変万化するものである。　この人骨の場合は，屍
を墓穴の壁に接するように安置し，背後をわずかに開けている。土壌の埋戻し，頭部の周辺に骨器やカキ殻を副葬品として供え，石塊2個を置いて埋葬を終った。

時間の経過と共に，頭部と石塊が背後に崩落したことが解かる。

(e)第11号人骨の埋葬状態

位　置

表土は黒色の砂質土壌で，厚さは50cmあり，その下側にカラムージョ殻破片混りの土壌があり，人骨はこのカラムージョ層の底位，即ち表土から75cmの深さにあった。

発掘当時の状況

頭骨は北東側にあって,頭骨だけが体骨から55cm　も探い位置,即ち表土より1.30mの深さに見られた。頭骨の北東側に,やや偏平な石塊(長さ20cm, 巾18cm)があって,その下側に短い丸棒の石器があった。

頭骨の西側に上肢骨,肋骨,脊椎骨などが並び,その南端に割れ目のついた小石2個が重なって見られた。西隣りに,屈折した下肢骨と足骨があって,下肢骨の端に2個の長三角形偏平石塊(長さ　20cm, 巾14cmのものと長さ18cm, 巾15cm)が並び,その上に蓋石に使用した長三角形の偏平石塊(長さ26cm, 巾15cm)がのっており,更らにその上の西端に長方形偏平石と,東端に平丸型石器が見られた。

副葬品

上記の小形石,短丸棒石器,平丸型石器などの他に,人骨の周辺より骨器4個,カキ殻3枚が出土した。

写真 63　右側は第11号人骨の埋葬状態　左側は第12号人骨の埋葬状態

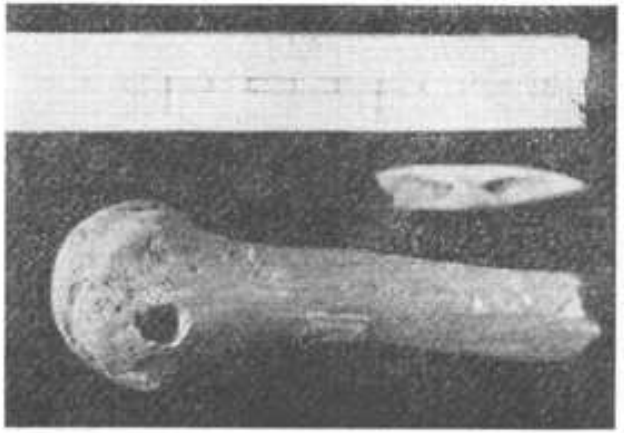


写真 64　第12号人骨の肩球関節に刺っていた骨器

石　塊

4個の石塊を使用していた。

埋葬当時の考案

屍は西方に向けた立坐の屈葬である。埋葬の折り，墓穴を広く，－部深く掘ったため，時間の経過につれて，頭部は深い方に崩落し，体骨は広い範国に拡がった，と推察される。

(f)第12号人骨の埋葬状態

位　置

第11号人骨の北側に1mほど離れて，第12号人骨を発見した。表土より80cmの深さで，カラムージョ殻破片混りの層内であった。

石　塊

頭骨の真上に三角形偏平石塊(長さ40cm, 巾23cm)があって，南隣りに，ほぼ方形の偏平石姐(長さ27cm, 巾25cm)が並び，その上に積み重なっている偏平石塊(長さ26cm, 巾15cm)は3個の石塊で埋葬している。　発掘当時の状況　かさね石塊の西側に下肢骨や足骨が現われていた。これらの石塊を除去して見ると，両下肢骨の中央部に頭骨が僻伏状態にあって，石塊の重圧のため，細かく粉砕していた。

この人骨の各個所より骨器を見付けることが出来た。骨器の発見された場所は次の通り。

A. 肋骨間で上部より3枚目あたりに，鋭利な骨器が背後から刺った状態に見られた。

B. 腰部あたりからも先の尖った骨器が見付かった。

C. 頚部の辺からも骨器が発見された。

D. 上腕骨の着け根，即ち丸味のある肩の球関節に骨器が刺ったままで発見された(写真64参照)。

人骨の南東から猿の下顎骨が出土した。

副葬品

饅頭形石器3個が人骨の左右に，即ち南側に2個，北側に1個おいてあった。

埋葬当時の考察

敵部落との闘争で負傷した者らしく，体内より4個の矢先が発見されたことは珍らしい。

この戦死者の埋葬にあたって，西方に向け，立坐の屈

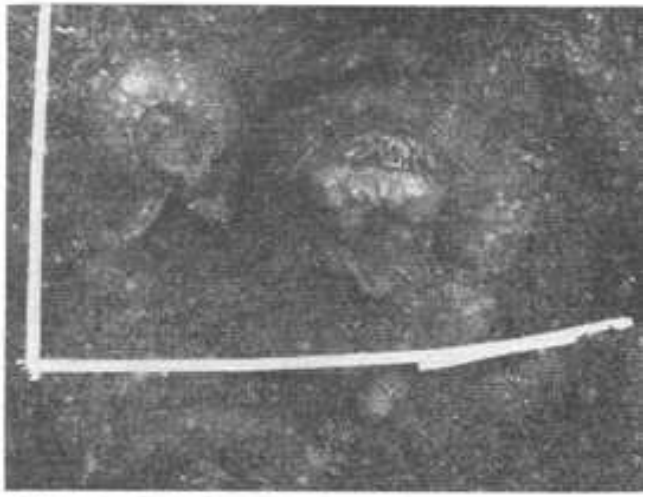


写真 65　右側は第13号人骨　頭骨の上に首飾あり　左側は第14号人骨の頭骨

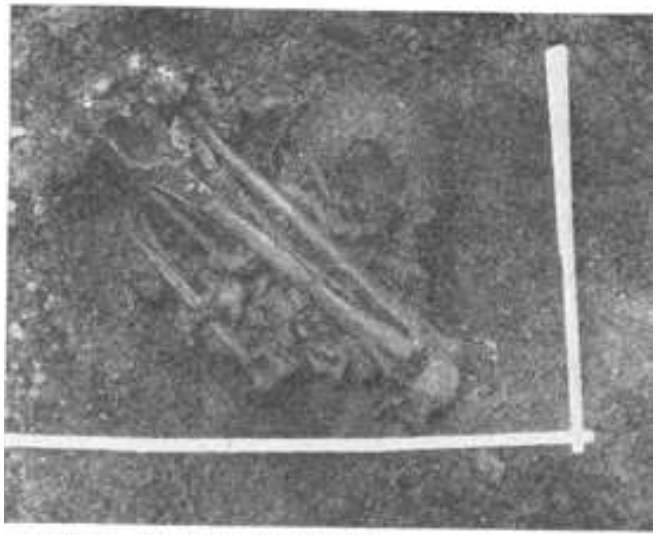


写真 66　第14号人骨の埋葬状態

葬にし，両脇に石器を置き，背後に猿の頭部を供え，土填をかぶせ，頭上あたりに2個の偏平石を並べ置き，その上に偏平石塊で蓋を施し，鄭重に埋葬したものと推察される。

(g)第13号人骨(少年)の埋葬状態

位　置

第12号人骨の南隣りにあって，表土より80cmの探さ。カラムージョ殻破片混りの層内から発掘した。

石　塊

人骨の東側に偏平石塊(長さ20cm，巾9cm)があり，わずか離れた南側に長方形偏平石塊(長さ　25cm，巾18cm)と隣接して同形石塊(長さ　20cm，巾12cm)が並んでいた。

発掘当時の状況

上記の3個の石塊の中央に頭骨が僻伏になり，下肢骨や脊椎骨は南側の石塊の下にあって，殆んど破砕し腐蝕していた。

副葬品

頭骨の周辺より獣牙の首飾15個，並びに西側より饅頭型石器2個が出土した。

埋葬当時の考察

頭蓋骨の厚さから見て,子供の骨である。埋葬の方位と状態は不明であるが,石塊を使用していることから大人の埋葬方法と同様に取扱ったものと推考される。副葬品の首飾,石器,石塊の使用などからして,知名人の少年であったかも知れない。

(h)第14号人骨の埋葬状態

位　置

第13号人骨の西側にわずか10cmほど離れており,埋葬の深さや土壌の層などは13号と同様である。

発掘当時の状況

上肢骨は東西に,やや斜めに横たわり,頭骨はその中程にあって,顔面は北東に横向き,脊椎骨や肋骨は頭骨の下側に散在していた。

石　塊

頭骨の北東に楕円形偏平石塊(長さ30cm,巾20cm)と北側に長方形の石(長さ20cm,巾10cm)とが並んでいて,この間に円形石(長さ13cm, rfj 10cm)が挟まっていた。

副葬品

上記の丸形石の外に,人骨の東側に丸型偏平石器2個が出土した。

埋葬当時の考察

屍は西向きの立坐の屈葬で，埋葬は背後に石器を置き，埋戻した後，頭上にも石器を置いて埋葬したものと推察される。

(i)第15号人骨は幼児骨を伴う

位　置

第12号より西方1.20mほど離れた場所は，表土が黒色の砂質土壌で，厚さは50cra。その下のカラムージョ殻破片混りの層の厚さは　45cm であった。人骨は表土より60cmの探さにて発掘した。

発掘当時の状況

両下肢骨は屈折し，開いた状態の中に頭骨があり，顔面は西方に向け，頭骨の南側に肋骨が並び，その下側に脊椎骨があった。

石　塊

右下肋骨の南端に楕円形偏平石塊(長さ27cm, 巾14cm)があった。

副葬品

頭骨の下側に鮫の歯で作った首飾1個を努見した。又人骨の上から骨器1個が出土した。

幼児骨

成人骨の真上に，即ち表土より50cmの深さで，幼児骨２体分が見付かったが，土壌の多湿で幼児骨の殆んどは腐蝕し，辛うじてその痕跡が認められたに過ぎなかった。

埋葬当時の考察

屍を南方に向けた立坐の屈葬である。

首に鮫の歯の首飾をつけ，土壌を埋戻した後頭上に骨器と石塊を置いて埋葬し，更に幼児２体を成人の上に埋葬したのは当貝塚では初見で貴重な存在である。又鮫の歯の首飾りも珍らしいものである。

写真 67

写真 68

(j)第16号人骨上に獣骨埋葬

位　置

この人骨は第15号人骨の北東隣りわずか20cm　ほど離れ，深さは表土から50cmの位置にあった。

発掘当時の状況

下肢骨は北東に横たわり，その上側に頭骨，肋骨，脊椎骨などが

並んでいた。

石塊～副葬品

なし。

獣骨の埋葬

第16号人骨の上層，即ち表土の砂質土壌を10cm掘り下げたところに，動物の頭骨を発見した。獣頭骨の上に猿の牙で作った首飾り12個と，東隣りから完全に形をなすカラムージョ殻２個が出土した。

埋葬当時の考察

屍は西南に向けた立坐の屈葬である。この人骨は石塊，副葬品もなかったが，屍の上位に，猿の首飾りをつけた獣頭骨が埋葬されていたことは．人間の埋葬と同等に取扱った点，貴重な存在である。

F. 動物の埋葬

アレクリン第１貝塚の発掘時代は，人間と動物関係について，人間の埋葬状態から観察して，常に人間が主体で動物は従に推察して来た。人骨埋葬状態一覧表でもわかるように，主従関係と見做されるものは６例中２例に過ぎない。人間を埋葬した場所以外に，動物を単

独に埋葬した例が見られなかった。

アレクリン第２貝塚の発掘時代に移って，従来の主従関係にあるとして取扱ったものに，最後の第16号人骨の場合がある。人間の埋葬した上位に動物を埋葬しているということは，今まで主従として取扱って来た感覚に基づいた結果であった。

この第2貝塚の先住民族に第1貝塚民族より一歩前進した社会的構成がみられる。動物に対する取扱いに別途の感覚を持つようになった。従来の主従関係から離れ，むしろ動物に対する愛情感覚が極端に現われ始めている。動物の埋葬を，人間の埋葬と同等に取扱うようになったことである。前記の第16号人骨の場合は，人間の埋葬状態より動物の埋葬の方が，鄭重に取扱われている。第16号人骨と上位の動物とに相関関係はなく，動物を別途に埋葬した，と推察するのが妥当と考えられる。第２貝塚で動物を単独に埋葬した実例が多いので，アレクリン貝塚日誌より動物の埋葬記録を抜粋し，発掘した順序に記載する。

(a) A動物

土壌は黒色の砂質土壌で，表土から35cmの深さに黒く焼かれた動物の骨片がかたまって出土した。

観察一貝塚上で火を燃やし，狩猟して来た動物を焼いて喰べた跡である。

(b) B動物

土壌は砂質土壌で，表土より15cmの深さに石器2個が30cm間隔で発見された。石器の下側13cmの深さに動物の下肢骨4本が並び，更らに10cm下にて獣頭骨を発掘した。表土から38cmの深さにあった。

観察一動物の頭骨はアンタ(ブラジル須)に類似していた。初めに頭部を埋葬し，動物の脚の肉を喰ってから，その上に置いて埋葬し，更に石器をその上に置いて供養したと推察される。食料を供給してくれた動物への感謝の行為であろう。

(c) C動物

表土より70cmの深さは黒色或いは暗褐色混りの砂質土壌の層で，次に灰色を帯び，火を使用したと恩われる薄い層が挟り，その下側はカラム-ジョ殻破片混りの土壌である。この灰色層の下側，即ちカラム-ジョ混りの層に3個のやや小形偏平石を三角点に置き，その中央部に動物の頭骨の一部と下顎骨の-部とを見付けた。その頭骨の周辺より副葬品と見倣される猿の牙で作った首飾り1個，カキ殻1枚，粗雑な骨器2個が出土した。三角点に置かれた石の上に蓋石と見倣される，ほぼ方型の偏平石(長さ巾共に18cm　が置いてあった。

観察一貝殻混りの土壌内，3個の石に囲まれた獣頭骨に首飾り，カキ殻，骨器などの副

葬品を置き蓋石を施した埋葬は,従来人間の埋葬方法をそのまま動物に施したものである。先住民族の家族の一員として飼育していた動物のようである。

(d) D動物

作業場の近くで見付けた。砂質土填の深さは60cmで,その下側に灰色の薄い層,次にカラムージョ殻破片混りの層などとなっていた。発掘位置も灰色層の下側に獣頭骨があって,その上に,ほぼ円形の砥石,周辺に小型偏平の石器2個骨器の破片数個などが出土した。

観察一獣頭の上に石器3個,骨器破片などを供えていることは,鄭重に埋葬した点でC動物と同じである。

(e) E動物

表土の5cmは黄赤色粘土質土壌で,昔家屋建築の折り地均しのために搬入した土壌である。次の層の探さ20cmは砂質土壌で,続いてカラムージョ殻破片混りの層となっている。E動物はこの2層の間,即ち表土から25cmの深さに,長楕円形の偏平石塊(長さ34cm,巾28cm)があって,その下側に獣頭骨を見付けたが,石塊の重圧で粉砕されていた。石塊の上部に石器3個と骨器2個が出土した。

観察一獣頭骨の上にあった石塊は,従来人間の埋葬に使用して来たものと大差のない石塊を施し,その上に石器や骨器を供えて鄭重に埋葬してある。

(f) F動物

表土の53cmは暗褐色の砂質土壌。その下側は貝殻片温りの土壌で,厚さは25cmであった。F動物は表土より75cmの探さに長三角形偏平石塊(長さ22cm, 巾17cm)の右端の上に,長楕円形偏平石塊(長さ20cm,巾17cm)の左端がわずかに重なり合っていた。左側の石塊の下に動物の下顎があり,右側の石塊の下に脚骨が見られた。両石塊の南東に長さ16cmの石棒片と,上部より骨器3個が出土した。又両石塊の北西側に円形偏平石(長さ10cm, 巾9cm)と北東側に長方形石(長さ　21cm, 巾10cm)とが配置してあった。

観察一この埋葬に石器,骨器, 4個の石をもって鄭重に取り扱っていた。今迄の動物埋葬は殆んど頭部と脚部は別々に埋葬されて来たが, F動物は頭部,脚部共に埋葬されていた。

G. 作　業　場

貝塚の南西側の隅近くに作業場と思われる遺跡が見付かった。

表土は黄赤色粘土質土壌。厚さは7～10cm で,下側は貝殻破片混りの土壌で深さ約50cmである。この底辺近くに薄い灰色をおびた層があって,これを中心に,約1.50mの狭い範囲内から骨器の粗製品,破片類が約60個,磨製石斧の破片約10個,焼けて黒くなった人間の

下顎骨の－部，両頭蛇の頭骨などが出土した。

ここで火を燃し，火を取り囲みながら石器や骨器を作り，他部落との闘争で捕虜を撲殺して焼いて喰べたり，両頭蛇を捕えて来て喰べた跡のようであった。

又，貝塚の北東隅にも，表土より約30cmの深さに，骨器の破片が多数，石器の破片5,6個ともに出土した。ここも上記の作業所と同じように使用された跡と認めることが出来た。

貝塚の両端に作業場があって，バナナの植わっている辺りは，中央よりやや低いので，貝塚の低い方に獣類を埋葬し，高みの方に人間を埋葬したものと推考した(図58参照)。

Ⅱ．アレクリン第1・第2貝塚の人骨埋葬一覧表

アレクリン第1貝塚の人骨6体と第2貝塚の人骨10体の埋葬状況を表に現わし，その調査の各項目別に検討して見る。

(a)埋葬の深さ

人骨の埋葬された深さによって，その人骨の生前の行動や部落社会における地位などを想定することが出来る。深度の浅いものから順を追って説明する。

20cmの深さ一第1貝塚の第2号人骨である。発掘当時に下肢骨は見られず，副葬品，石塊

など使用されていない。その上浅く埋葬されていることは遺棄に等しく，部落では幼児の死亡が軽視されていた。

40cmの深さ一第1貝塚の第6号人骨で，頭骨，上肢骨，下肢骨などは見られず，胴体だけの存在であった。副葬品，石塊など使用されず，部落では無視された存在である。

50cmの深さ一第2貝塚の第16号人骨が該当する。副葬品や石塊などを伴わないので，部落内での地位は一般以下であったと推察される。人骨の上位に埋葬された動物が第16号人骨との関係の薄いであろうことは前記の通りである。

深度が60cm以上になると，いづれの人骨にも副葬品と石塊で埋葬されているので，部落内では普通人であったと見做すことが出

アレクリン第1貝塚

摘記	項目 / 人骨号数	表土からの深さ cm	埋葬状況	方位	石塊数	副葬品					備考
						首飾	カキ殻	石器	骨器	小石	
	1	75	立坐屈葬	南	1		1				猪の歯 鹿の歯
幼児	2	20	不明	不明	0						下肢骨なし
幼児を伴う	3	100	立坐屈葬	南	5	55	1	2		3	成人から 35cm 離れて幼児
幼児を伴う	4	60	立坐屈葬	南	2					1	成人から 10cm 離れて幼児
	5	60	立坐屈葬	南	1		7	未完成品			バーカの歯 鹿の歯
胴体	6	40	横臥	不明	0						

アレクリン第2貝塚

動物を伴う	7	70	立坐屈葬	西	3					3	頭部の近くに獣骨片
動物を伴う	8	80	正坐埋葬	南	4	44	2	1	1	2	
少年	9	100	立坐屈葬	南西	2		1		2	1	赤色軟石
	10	75	立坐屈葬	南西	2		2		5		
	11	75	立坐屈葬	西	4		3	2	4	3	
負傷	12	80	立坐屈葬	西	3				4	3	猿の下顎骨
子供	13	80	不明	不明	3	15				2	
	14	80	立坐屈葬	西	3			2		1	
幼児を伴う	15	60	立坐屈葬	南	1	1			1		成人骨の上位に2体の幼児骨
	16	50	立坐屈葬	南西	0						

アレクリン第1，第2貝塚の人骨埋葬状態一覧表

来る。

深さ60cm以上の人骨を比率順に並べて見る。

深さ　70cm代のもの31%　　80cm代のもの31%　　60cm代のもの23%

100cm代のもの15%

以上の結果から検討すれば，探度が深まるにつれて部落社会での地位も一般的に高まったと考えられる。最も深い100cmのものは2体で，第1貝塚の第3号人骨と第2貝塚の第9号人骨である。

第3号人骨は，石塊の数量，副葬品の数などから見て部落の特権階級の位置を示している。

第9号人骨は年令的に若く少年であるため，石塊や副葬品の所有量は一般の者と大差ないが，頭上に赤色の軟石で頭骨や下肢骨まで染まった例は初めてである。屍体の顔面や躯に締麗に塗布したことは，その家族の社会的地位を考慮した上での行為であった，と推察される。

貝塚の表土は多年にわたって風雨に晒され，表土の流失，川の氾濫などを蒙むって表土の変化，又前記した試掘や乱掘を受けているので，未確認の個体もあるであろうからして，これだけで被葬者の部落社会に於ける地位を測定した結果には信愚性が薄いかもしれな

いが或る程度の目標になると考えられる。

(h) 埋葬方法

幼児，子供，胴体埋葬の人骨を除くと，正常に埋葬されたものの大部分は，立坐の屈葬である。一般に屍を埋葬する場合は，両脚を膝関節のところで折り曲げて，足部と畢部を接着させて地面につける。両手は膝の上に置く，或るものは有孔の獣牙歯や魚歯の首飾りを頚や腕につけて埋葬する。異例としては第８号人骨の正坐の姿勢が１例だけであった。

埋葬する場合，墓穴は一般にやや広い面積に掘っている。屍を墓穴の前側に納め，その周囲は植物質のもので屍を包み，直接に土壌が屍体に附着しないようにする。

屍体の横又は背後に副葬品としてカキ殻，石器，骨器，小石などを置く。時には幼児，獣頭をその前後に置いて土を埋め戻す。或いは土壌で覆った後，その上側に幼児や動物の頭部などを置くこともある。

しかる後，偏平な石塊で頭部の上，又は周囲に2～3個を置き，更らにその上に安定した蓋石を積み重ねる。この場合，日常使用していた砥石を蓋石にすることもある。これで全体に土壌を覆いかぶせるのである。

時間の経過につれて，屍体の筋肉，内臓　植物質などのものは腐蝕すると共に，土圧や

石塊の重圧などで腐蝕部分の多い方向に倒伏する。即ち人体は背後か横の方に倒れる。同時に石塊も乱れ崩れるものが多い。反面に墓穴を狭く掘った場合は,そのままの位置に頭部は股間に或いは体内に崩れ落ち，石塊はその上側にあることが多い。

何故に，立坐の屈葬にて埋葬したかという疑問が生ずるが，明確にその理由を説明することは困難である。併し埋葬の姿勢は,生前の日常生活と関連することが多いのである。部落で集会,会議を催す場合に,長老,会長或いは呪術者の前では,相互に時据の姿勢をとったことが想像できる。死亡した場合も,生前に行っていたと同じ姿勢にして,霊界の会議に出席できるように埋葬したものと推察される。

(c) 埋葬の方位

イタチンス山脈のほぼ中腹にあるアレクリン第１貝塚と第２貝塚の立地状況を調べてみよう。ブラッソ･ド･メイオ川沿いの第１貝塚やペイシ川沿いの第２貝塚は共に，北方は山肌が聳立しているのに反して，第１貝塚は南東に，第２貝塚は南西の方向に，それぞれ視界が拡がっている。山脈の渓谷から流れて来る川は明るい下界に流れて行く。貝塚の位置で人体を埋葬する場合は,下界を見おろせる明るい方向に向けて埋葬するのは自然である。埋葬は宗教的観念に基いているのではなく，自然の環境に従うことは当然である。

屍体を埋葬する場合に，南方の下界に向けて埋葬し，屍体が骸骨になる頃に，空間の広い方向に体位が崩れ，大部分の頭骨が北方に倒伏していたことは事実である。著者はブラジル，インディオ文化研究同好会「ブラジル・サンパウロ州内の考古学的調査」（東京人類学会の人類学叢刊乙，先史学第二冊1939年）に，北方埋葬と発表したことがある。発表以後に同貝塚並に第2貝塚の発掘調査を続けた結果，立坐の屈葬の体位は，足部と腰部は相接して南側に向けているが，肉体の腐蝕と共に，頭骨や脊椎骨は北側に倒伏し，肋骨は脊椎骨の上側にあることからして，仰向けに倒伏したことを確かめた。即ち南方に向けて埋葬したものが北方に倒れた事実を確認することが出来たので，ここで「南向きの埋葬」と訂正する。

(d) 石塊の使用

石塊を使って屍体を埋葬する実態は，この貝塚の特徴である。埋葬方法の項に記載したように，屍体を土壌で覆い，頭上の周辺に2～3個の石塊を並べ，その上側に別の石塊で蓋を施している。使用している石塊は総て偏平で安定している。尚第3号と第8号人骨では砥石を蓋石として利用していた例もある。

石塊の多寡も貝塚先住人の部落階級の徴表に関係し，石塊数の多い者ほど副葬品も豊富で部落内の知名度が高かったのである。

石塊を使用する意義について検討して見る。貝塚発掘当初に著者の考察は,石塊の使用は死者に対する一種の恐怖感から,死者が再び現世に出現できないように石塊で抑圧するのに使った,と。発掘が進むにつれて,恐怖感の概念は拭い去られた。頭骨や腕骨周辺から装身具を発見したり,頭骨,下肢骨に赤色で染めたり,いづれの人骨にも鄭重な礼儀をもって葬っている。石塊を使用する理由は,森林に棲む悪魔が出現して,死者を掘り出す恐れがある,と謂う妄想から発生している。悪魔の侵入を防禦する目的で,重い石塊で死者を保護するのに使用した,と推考するのである。

(e)成人と幼児との関係

成人骨に幼児骨を伴うものが16例中3例ある。幼児の埋葬位置は成人の前後又は成人の上位である。成人は石塊を使用して悪魔から守護しているのに対して,幼児は常に石塊の外側に埋葬されている。成人は立坐の屈葬で鄭重に取扱っているのに,幼児は横臥であったり遺棄された状態で常に軽視されている。

成人と幼児の埋葬の探さが同一であることに(第15号人骨は例外)疑問が生ずるであろう。成人が幼児を道づれにする主従関係の風習が古来から存在していたであろうか? 或いは敵部落との闘争で親子共に戦死したのであろうか? いずれも信憑性に乏しい。「親のない児

は育たない」の例になろうと，生活を主に狩猟にたよっているのに，幼児には狩猟が出来ない。食料のカラムージョが豊富でないところから幼児を犠牲に供した，と云う風にも推考される。

(f)副　葬　品

アレクリン貝塚から発掘した人骨は16体であるが，その内正常でない幼児骨と胴体のみの人骨を除いた14体の副葬品を検討してみよう。

副葬品は死者が生存中に身体に着けていたもの，使用中のもの，所有物などが近親者によって屍体の周囲に供えられる。副葬品を類別して説明する。

首飾ー人骨の頸　腕のあたりから出土し，所有者は14例中4例であった。部落では特定人物のようであった。首飾りの大部分は獣牙歯で作ったもので，1例だけ鮫歯で作ったものがあった。

カキ殻ー人骨の周囲より発掘した。所有者は14例中7例で半数を示す。発掘枚数は17枚であるが，内1枚は貝殻の中央に孔を穿って装身具に利用したと思われる。カキの用途は不明である。水飲み容器として使用したとも考えられるが，確かでない。

石器ー所有者は14例中4例で少ない。石器は7個で，内砥石3個，打石器3個，石棒1個

などである。

骨器ー所有者は14例中7例で半数を占める。総数17個で内8個は未完成品であった。

小石ー所有者は14例中9例である。

小石には饅頭形とか偏平な丸石に分けているが，石の周縁に使用した痕跡が認められるものは叩石器である。同形で痕跡の稀なものと全く認められないものとを単に小石と称した。

これらの小石は，人骨を発掘した位置が自然石の含まれていない層であるから，埋葬人骨の周囲から出土した故に副葬品として取扱った。

I．遺物の種類

(a)カラムージョ(Caramujo大カタツムリの一種) Strophocheilus sp

アレクリン貝塚の主体をなすのは，原産のカラムージョで，殆んどが破砕状態で土壌と混合し，その深さは1mに達することがある。

貝塚の層を調査してみると，破砕貝殻の混合土壌の層は帯状をなさず，皿形状のものが並んだ感じの状態である。従って混合層は深い場所があったり，浅いところもあったりして，人間の埋葬の探さもまちまちである。

カラムージョの殻を石で割って肉を食べたが，一部に割らないままの形で出土することがある。屍の埋葬や獣を葬る時に，生のままで供養したと推考される。

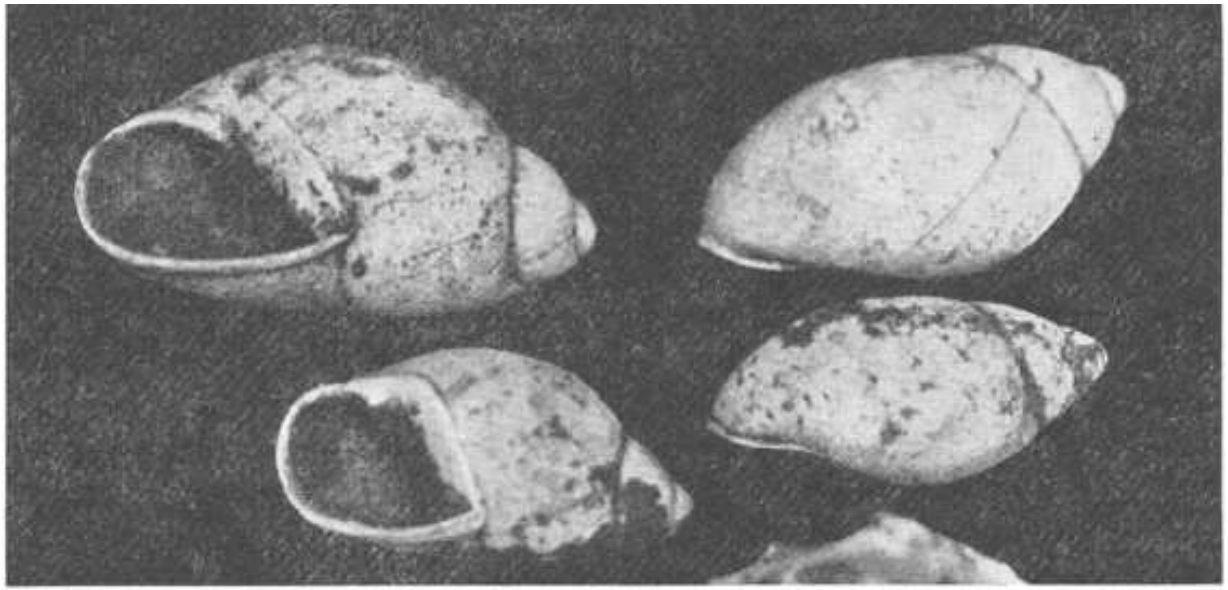


写真 69　アレクリン貝塚　貝塚を構成するカラムージョ貝 (Strophochellus sp)

(b)石　　器

アレクリン第1貝塚と第2貝塚から発掘した石器を比較して見ると，同一種と見做される程類似している。両貝塚より発掘した石器の数は193個で，その石質は殆んど玄武岩である。

石器の測定は次の順序で記した。　　長さ　　cmx　　巾　cmx　厚さ　cm

(1)半磨製石斧 11cmx7cmx3cm　　刃部は磨製で頂部は打製。

(2)半磨製石斧 12cmx6.5cmx4cm

刃部は磨製，頂部は打製。

(3)半磨製石斧 11.5cmx8cmx3.5cm　　刃部は磨製，頂部は打製。
(4)半磨製石斧 11cmx6cmx3cm
　刃部の－部磨製，身の中央に凸面あり，頂部は打製。
(5)半磨製石斧 11.3crllX6一 5cmx3.7cm
　刃部は打製，頂部は厚みあり，身の－部は磨製。
(6)打製石斧 13cmx6cmx4cm　　刃部，緑，頂部は打製，裏側は平坦。
(7)打石器　長さ　9.5cm　全体的に長梯形，底部は 7cmx6.5cm の四角い平面部，頂部も 3.5cmx3cm の四角い平面，底部と項部に使用の痕跡あり。
(8)打石器 12cmx6cmx4.2cm　全体的に厚味，上部の握る部分は細い，上下両端部に使用の痕跡あり。
(9)打石器 13cmx6cmx4cm
　表面はやや山形で裏面は平坦，上下両端に使用の痕跡あり。
(10)打石器　7cmx5.5cmx2.3cm
　表裏は平坦，上下両端に使用痕跡あり。
(11)打石器　9cmx8.5cmx3.5cm　全体的にやや円盤型，表裏は平坦，周縁に使用痕跡あり。
(12)打石器　6cmx4cmx3.5cm

細長丸型，両端に使用痕跡。

(13)　打石器　6cmx6cmx3.5cm

丸型，表裏はやや平盤，周線に使用痕跡。

(14)小刀 8.5cmx5cmx2.8cm(背の部分)

刃の部分は弓型で薄くて鋭い,指当ての背に向って厚い,裏側は平坦(写真の上方が刃)。

(15)小刀 10cmx5.2cmx1.5cm(背の部分)

刃部は打製で薄い，指当ての背部は厚い，(写真の下部が刃)裏側は平坦。

(16)小刀 12cmx6cmx3cm (背の部分)

刃の部分は打製，背は細長三角形で中広，裏側は平坦。

(17)皮剥型石器　6cmx5cmx1cm

石器の周縁は削り刃，裏側は平坦。

(18)皮剥型石器　7.2cmx6cmx1cm

石肌の面に削り刃，裏側は平坦。

(19)皮剥型石器　7cmx5.5cmx1.6cm

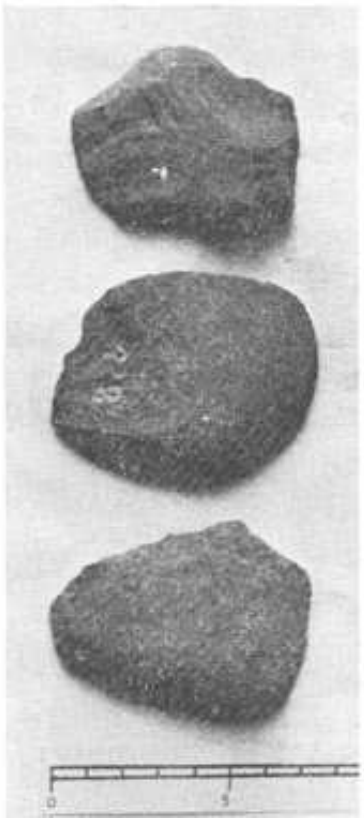
表の周縁は削り刃，中央部はやや厚み，裏側は平坦。

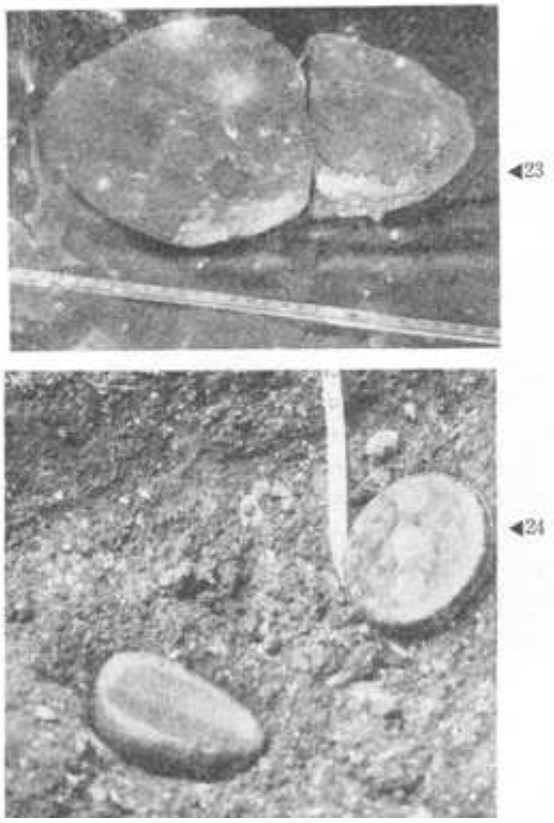
(20)錐型石器　8.5cmx3.7cmx2cm

中央は山形で厚み，錐先は鋭利，裏は平坦。

(21)石製指当

親指を当てる部分は浅いU字形をなす。この内面に親指を当て嵌めると，指の移動を防ぐ程度の広さである。反対側は長さ5cm，巾3cmの長方形の平面，その中央部に6mmほどの穴が穿ってある。深さ約1cmで，穴の入口は広く奥行が狭く，内面に刻みがある。骨製の針を穴の中に入れると刻みの溝で固定する。厚さは約2cmある。極めて珍らしい石器である。





(22)軟鉱質棉色砥石 7.8cmx6cmx2.5cm

偏菱型の砥石で赫色を呈し，中央に巾広い溝があって，中心部が深く，溝に無数の傷跡が見られる。骨器の先端部を磨くのに使用した。大きさは手の裏に納まるので携帯できる。

(23)　２条溝砥石　24.4cmx17cmx6-4cm

砂岩で極めて軟かい。

(24) 1条溝砥石 15cmx10cmx1cm

(c)骨　　器

動物の足の骨，前腕骨などで作った骨器は移だしい数量であったが，大部分は半製品で，内完成品は比較的に少なかった。

(1)舟形骨器

全体的に偏平で川舟形をなし，骨の表面は敵密質で薄く，中央部は巾広で，両端は鈍角に尖る。裏面の海綿質が僅かに見られる。長さ　52mm, 巾の広いところは31mm, 厚さは2-3mmである。

(2)舟形骨器

表面は平坦，丸木舟形，骨の緻密質は厚く，両端は鈍角に尖る。長さ68mm, 巾広いところ18mm, 厚さ　7mm。

(3)槍型骨器

偏平骨の中央部より一端に向って斜めに削り，先端は鋭利に尖る。長さ95mm, 中央部の巾は10mm, 厚さ　5mm。

(4)槍型骨器

偏平骨の中央より尖端にかけて削る。長さ105mm, 中央の巾広で15mm, その厚さは10mm,

(5)丸ノミ型骨器

角質で陥凹, 上縁から先端にかけて刃がある。深さ7mm, 巾15mm, 底壁の厚さ3.5mm。

(6)針型骨器

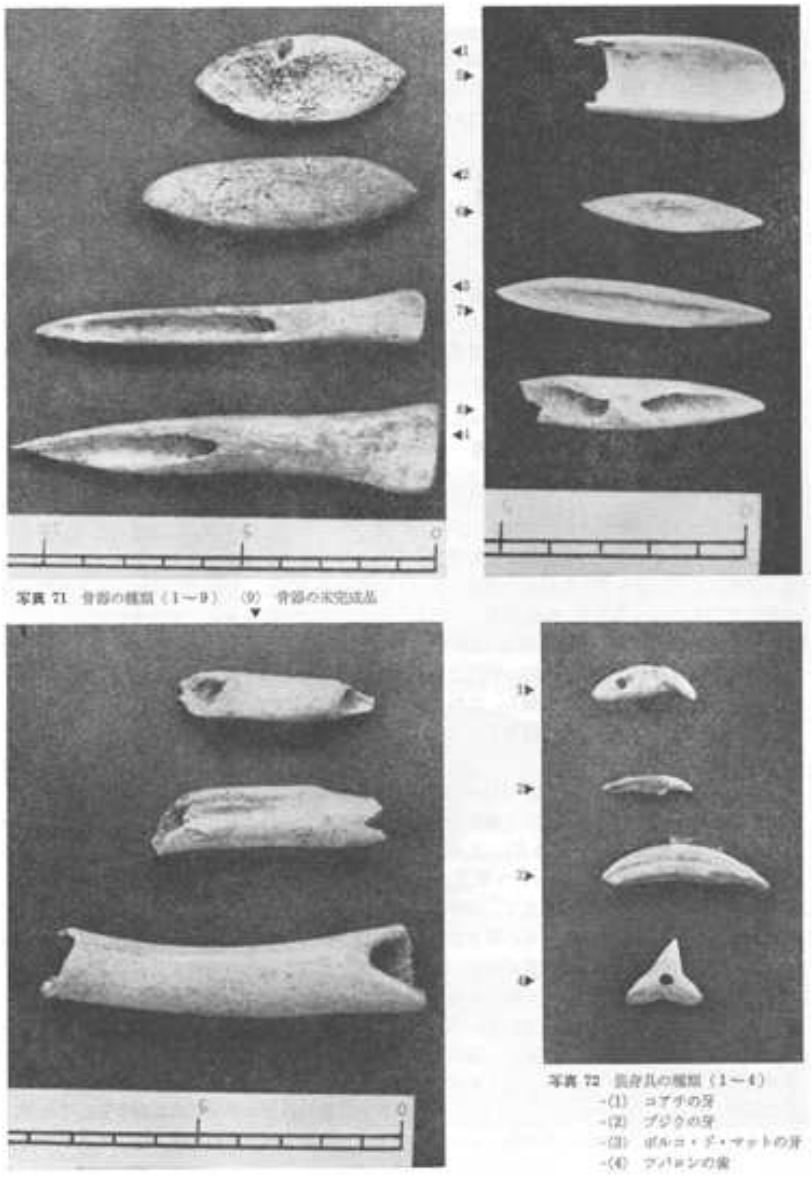
骨の表面は僅かに凸面あり，撤密賀は薄く，両端は尖る。裏側に僅かに溝あり，長さ36mm, 中央は巾広で8mm, その厚さ　2mm。

(7)針型骨器

琺瑯質のように硬い骨質で両端が尖る。長さ55mm, 巾8mm, 厚さ3mm（石器21石製指当の写真参照）。

(8)骨鏃

偏平骨の中央部を僅かに残し，表面の両端を



削り尖らす。長さ推定60㎜, 巾は中央で10㎜, その厚さ6㎜。(67頁第12号人骨の肩球関節の写真参照)。

(9)その他の骨器

猿の前腕骨, 獣の足骨, 肋骨などで作った骨器も見られた。

(d)装身具の種類

アレクリン貝塚から発掘した装身具は, 人骨や獣骨の周囲において発見したもので, その殆んどは首飾りに使用された。装身具の材料は次の動物の牙や歯に穴を穿っている。

(1)コアチ(Coati) Nasua narica

牙の長さは32㎜前後で, 牙の根元に径3㎜ていどの孔を穿ってある..。

(2)ブジウ(Bugio 吠え猿) Alouatta sp

牙の長さは25㎜前後で, その根元の両側から鋭利な刃物で溝を彫り　2㎜前後の孔を開ける。首飾りの内で最も多く発見している。

(3)ポルコ・ド・マット　　(Porco do Mat　山豚) Tayassu sp　牙の長さ5～7cm, 牙の根元に孔を穿っ。

(4)ツバロン(Tubarao　鮫)　　Selachios pleurotremados

歯は星状で長さ20㎜前後。中央部に径4㎜程度の孔を穿ってある。星状の中央凸面に丸く削りとった孔である。海魚の歯の首飾りを山脈の貝塚にて発見したことは極めて珍らしい。

J. アレクリン貝塚　動物編

サンパウロ州内には多種類の動物が豊富に棲息していたが，奥地開発と共に極度に減少し，或る種類の動物は現在では絶滅の寸前で憂慮すべき状況にある。アレクリン貝塚の構成された時代は文明人の侵入以前で，山脈地帯に棲息していた動物は豊富であった。貝塚を発掘すると，移しい獣骨片が出土し，当時の状況を物語っていた。これらの獣骨片を分類し，これを基にしてその生態を参考までに記載する。

(a)ブジウ(Bugio 吠え猿) Alouatta sp

この種に属する猿はブラジルに5種類ほどいる(Bugio, Barbado, Guaribaなど)。アルゼンチンの北部からアメリカ中部にかけて棲息する。

この種の特徴は解剖学上から見て，舌骨が発達しているので，声帯は一種特有の響きに聞える。この動物は肥満していて重量があり，行動は迅速で用心深い。頭部は堅くて顎髭が

ある。老齢の雄猿は頸部が太く発達している。雄の体色は黒く,雌は暗黄色を呈している。又或種の雄は茶褐色で雌は黒いのもいる。概して12～3頭で群棲している。

吾々がカペロン(Capelao教戒師)といっているボス猿は老齢の雄で,仲間を誘導している。移動は朝方から午後にかけて行動する。人が呼ぶように叫ぶ。大樹の先端で猿の群が一斉に叫ぶと，その声は2～3km先まで聞える。食料は木の芽，葉，果実類である。

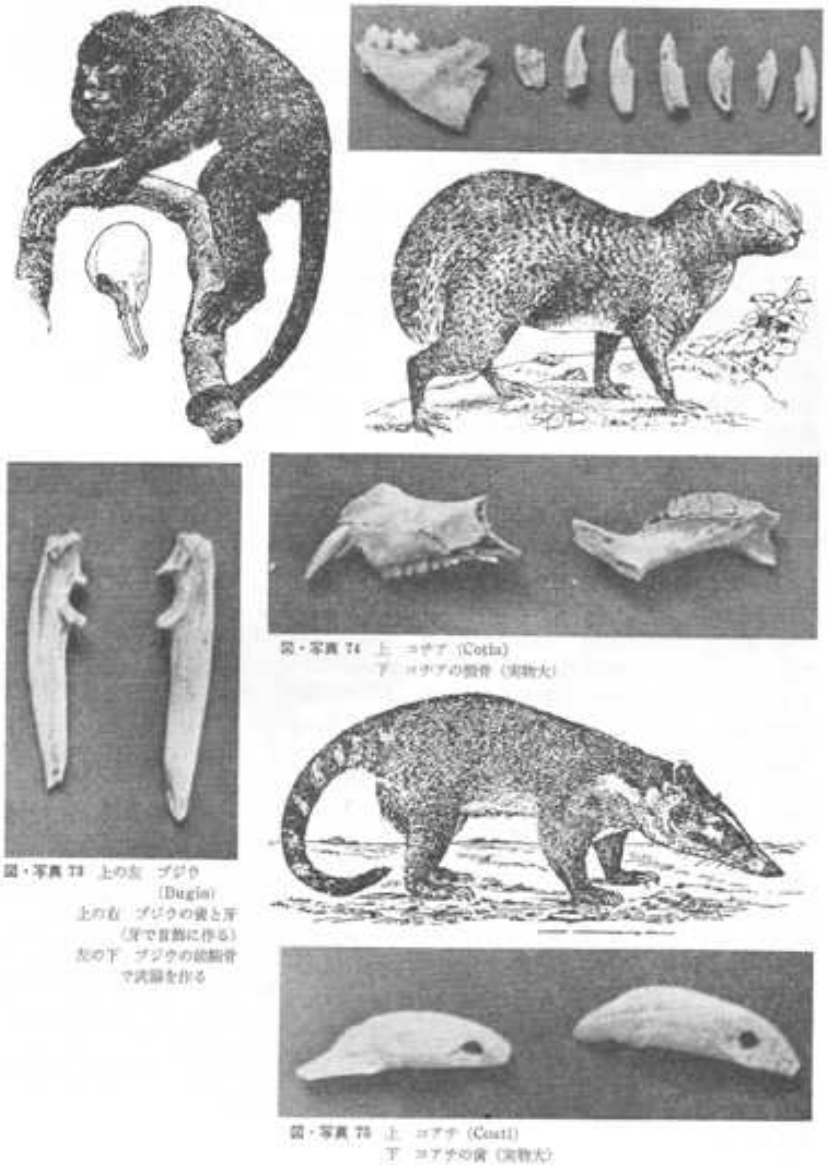
人間に追われると大概は逃げて,高い樹の葉蔭に隠れる。猿は四手獣であるが,尾は手と同じ役割をはたすので,五つの手を持ったと同じで,五手獣とも云われる。尾先の力は握る手の力よりも強い。枝から枝へ渡る時は,要心して落下しないようにもう一度尾を枝に巻きつける。気が向くと尾だけでぶら下っている。迫害を受けて負傷した時でも尾を枝に巻き，4～5日間も体をぶら下げ続け，絶命すると落下する。肉は珍味である。

ブジウは気象学者のように天候を感知しているので,猿が叫ぶと必ず雨が降ると謂う人もいる。カペロンと云うボスの雄猿は長老のように常に譬戒している。トウキビ畑で泥棒をしている時に発見され,危険が迫って来ると仲間に逃げるように合図をする。不注意に敵が切迫しているのも知らずにいると,筈打で罰するようなしぐさをするのでカペロンと謂う。

(b)コチア(Cotia) Dasyprocta aguti

コチアは齧歯目の小動物で,ブラジル中部地帯にごく普通に棲息している。体長は約50cm ほどあり，毛はざらざらしている。色は半ば褐色と,半ば黄色が入り混っていて背部の方は多少赤味をおびている。体型は太く脚は細い。

コチアの特徴は，2本の齧歯が長く湾曲していて,赤味を帯びている。尾は非常に短い。森林内に棲み，穴を掘るので見付け易い。コチアは夜行性で日中の大部分は潜伏処で過し,暗くなるにつれて隠れ場所から出て来て食料探しに歩き廻る。食べ物は蔬菜類，果実，トウキビ，砂糖キビ，タピオカ(mandioca)などである。猟犬に追われたコチアは穴に潜り込むけれど,その穴に煙を送り込むと直ぐ出てくるので捕まる。肉は美味しく毛皮は高価に取引される。



図・写真 73　上の左　ブジウ (Bugia)
上の右　ブジウの歯と牙（牙で首飾に作る）
左の下　ブジウの前脚骨で武器を作る

図・写真 74　上　コチア (Cotia)
下　コチアの脛骨（実物大）

図・写真 75　上　コアチ (Coati)
下　コアチの歯（実物大）

(c)コアチ(Coati) Nasua narica

コアチは食肉目の動物で10～20頭の群をなして森林に棲息する。小鳥　卵，虫，果物などを探すのに一日中森を馳け巡る。時には虫や幼虫を探すのにトウキビ畑に侵入して被害を加えることもある。猟師に追跡されると木に攀じ上って身を隠して逃げない。最初に発砲すると群をなすコアチは総て落下する。腕の中に自分の鼻面を被せている。鼻は極めて鋭敏である。コアチは逃げないで勇敢に攻撃して来ることもある。歯は鋭くて強力なので危険である。捕獲されると慣れるが,強い悪臭をもっている。石鹸で洗われることが好きである。鶏小屋に侵入して鶏や卵を喰うことが好きである。

(d)ラガルト(Lagarto トカゲ)

Tupinambis teguixin

トカゲは爬虫類の有鱗目に属する。ブラジルに約150種類ほど棲息している。熱帯圏内には3,000種以上もいる。ブラジルのトカゲで代表的なものはテイウーグゥス(Teiu-Guassu)である。体長は2mにも達する。全長の2/3は躯の部分で残りは尾である。躯は長くて敏捷であり，頭部は三角型で，尾の先は尖っている。尾は切れても再生する。眼は小さく瞳孔は円く眼瞼を動かす。躯は皮で小さな鱗で覆われている。

一般のトカゲは色彩は綺麗で,或る種類の如きは急激に躯色を変えることがある。肉は鶏肉のような味がする。幼虫，虫類を喰べるので有益動物であるが，反面，鶏小屋に侵入し損害を与えることがある。卵を見付けると卵殻を破毀せずに小さな孔を開けて中味を吸い取る。又時には雛に加害することもある。臆病者であるが,犬に対しての防禦を知っている。トカゲの戦闘方法は，初めに口で攻撃して後戻りして，後向きになって尾で鞭打ちを加えて成功する。相手が大きな獣になると，背部を弓なりに曲げた恰好で戦う。トカゲは走る時は尾を掲げ引き摺らない。ブラジルでは蛇と戦っている場面に遭遇することがある。鞭で攻撃するが，蛇の毒牙で傷を負うと森の中に逃げ込み，解毒剤の草(一名トカゲの草)を探すと云われている。

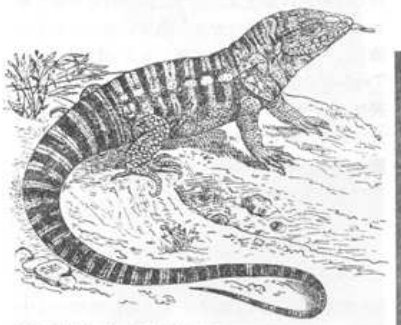
(e)ポルコ・ド・マツト(Porco do Mato 山豚) Tayassu sp

山豚は偶蹄目のブタ亜目に属し，一般家畜用の豚と異る点は，脚が少し細く，尾が短く，剛毛は長い。２本の鋭い犬歯に６本の臼歯がある。家畜用の豚は３本の犬歯に７本の臼歯がある。山豚は豚属の原種であり，背部に帯状の線があるのが特徴である。

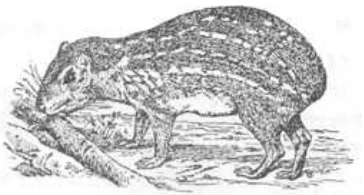
ブラジルの山豚には２種類ある。カイテツ(Caitetu)と謂う山豚は小形であり，もう一つのケイシヤダ(Queixada)の方は大形である。両者は大体に於いて類似している。

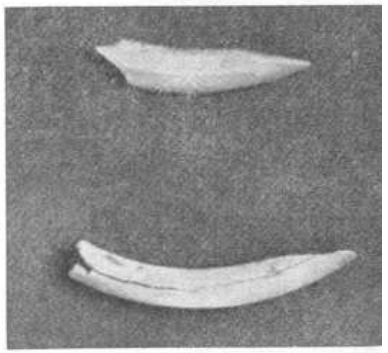
山豚は森林内を好み，集団で棲息する。100頭以上の群団をなし，昼夜を分かたず食糧を探し歩き廻る。食べ物は果実類，野菜，多汁な茎や根，又は小動物などを常食する。河巾の広い川であっても躊躇することなく横断する。未開発の森林，ツタ，カズラなどの蔓草の繁茂地，竹葦の密生地，用水掘，たとえ石山の不毛の地であっても，先頭の行くところは何処までも山豚群団は追随する。

山豚の群に急襲された場合は，樹に登ることで充分である。山豚は木の幹を倒して這い登ることはしない。不用意に群の先頭に立っと，獣は怒り易いので歯をむき出しにして，極度の興奮で奇声を発しながら襲いかかって来る。群団に包囲され，長時間釘づけになった場合は，藁に火を点じて煙の発生で，群団を潰走させることができる。山豚の強敵は人間と豹で，群団の最後尾を歩くものから捕獲

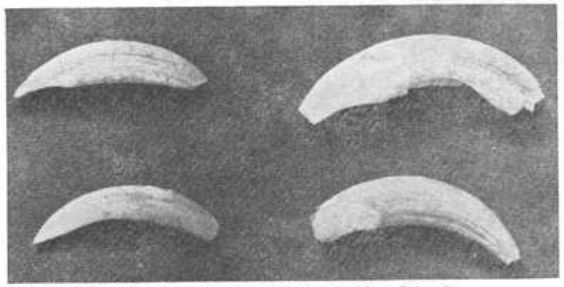


図・写真 76　上　ラガルトの歯
下　ラガルト（Lagarto）





図・写真 78　上　パーカ（Paca）
下　パーカの牙（実物大）



図・写真 77　上左　ポルコ・ド・マット（Porco do Mato-Caitetú）
上右　ポルコ・ド・マット（Porco do Mato-Queixada）
下　山豚の犬歯（実物大）

する。ブラジルの森林に豊富にいたこの獣は，狡猾な人間によって絶滅に瀕している。

(f)パーカ(Paca) Coelogenis paca

パ-カは齧歯目，ヤマアラシ亜目に属する小動物である。一人前になると70cmに達する。河豚に似ているが少し異る。寧ろコチアに似ている。コチアより体は大きい。頭はコチアより細長い。体色は明瞭で黄白色の班点線が縦に５線ある。森の中に棲み，日中は穴の中で眠っている。夜になると穴から出てきて，果実や木の根を喰べる。パ-カの肉は仔豚のような味がして美味しい。狩猟は面白い。月夜に果物の木のやぐら上に櫓を組んで待っている。パ-カの入る穴が決まっているので，一つだけ残して他の穴は総て蓋してしまう。林から出てきたパ-カを犬で穴の中に追い込む。入ってから煙を送り込み音をたてて出てきたところを撃っ。又川辺で遊んでいるので川に追い込み，反対の岸に上ったところを撃っのも面白い。

(g)プレア(Pre a モルモット)

Cavia, aperea

小動物のモルモットは齧歯目，ヤマアラシ亜目に属する。体長は25～30cmで，体重は1kg程に達する。耳は小さくて円い。尾は見られないが７節の尾骨がある。前脚は４本の指，後脚

は3本の指があり，共に釣爪がある。体色は暗い灰色の中に赤味がかった色に見える。森林の縁に棲息し，特に低湿地帯を好む。夜から暁にかけて6～15匹の群をなし，平原地帯に現われ柔軟な野草を探し廻る。時には野菜畑や若い稲作地に現われて被害を与えることも珍らしくない。非常に臆病で，追い払うと飛び上って逃げ去り，隠れ穴を探す。小さな金切声で泣き叫ぶのが，恰度水の中でラッパを吹きならす音に似ている。ブラジル中部地帯の人はモルモットの肉を食べる。昔，ペルーのインカ時代に速かに家畜化されていた。現代のモルモットの先祖である。その当時から肉は食用としていた。皮はスペイン人によって運ばれ，ヨーロッパ中に拡がったといわれる。

(h)タツー(Tatu) Dasyptis sp

タツーは食歯目，被甲亜目に属し南米の特産である。体は角質甲板で覆われ横筋が弓なりになる。腹部は素皮又は小さな薄い角質甲板で覆われている。足指は大きな釣爪があって非常に強い。タツーには次の種類がある(Tatu-bola, Tatu-dagua, Tatu-peba, Tatu-galinha)。 体長は1mある。日中は坑道のような場所に隠れており，夜になると出てきて虫や幼虫などを探し廻る。時には蟻塚のある平原地に現れる。タツーの大好物は蟻類である。

(i)アンタ(Antaブラジル貘) Tapirus

ブラジル貘は哺乳類，奇蹄目に属し，体長は2mにも達し，高さは1mもある。前脚は４本の址があり，後脚に３本ある。重量は170kg ほどある。外皮は一様に暗褐色を呈している。仔の時は背に平行した縦縞が4-5条あり，脚や頭部に不規則の班点がある。6ヶ月ほど過ぎると一人前になって，体長も1m以上に達し，体色も一様になってくる。

アンタの鼻先は象の鼻のように動く。尾は短く目は馬のように動く。森林の川辺に棲んでいて，追跡されると常に川に向って行き，水の中を泳いだり潜ったりして逃げる。この動物は力が強く，密林を平気で横断して，時には畑に侵入することもある。草食動物であるから森で果物も食べる。アンタは珍重動物であるが，次第に絶滅しようとしている。この動物は色々な名称で呼ばれるが一種類である。

アルゼンチンからベネズェラにわたって分布し，中米から北部メキシコにはパナマバクが分布している。支那の南部からマライにかけて，マライバクが分布している。背中に白い班点があって僅かに色の異った種類である。

アンタと云う言葉はアラビヤ語で，叉角のない鹿を意味している。アンタは常に番でいるので，その場所は森を切り拓いたようになっていて，足跡がついているので明瞭に分る。この動物は鼻で木を倒したり，竹薮を突き破って歩くので，歩く先は避けなければならない。

鹿のように水際に戻って来て，水中で前脚と後脚を後方に曲げて，水に浸ることが好きである。

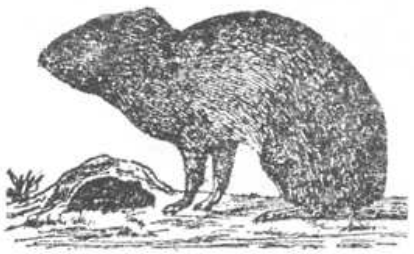
肉は僅かであるが，口当りが悪い。24時間川に浸して置くと，肉は軟くなり色は白くなり，悪臭もなくなる。この肉を喰べた者は癩病にならないといういい伝えがある。

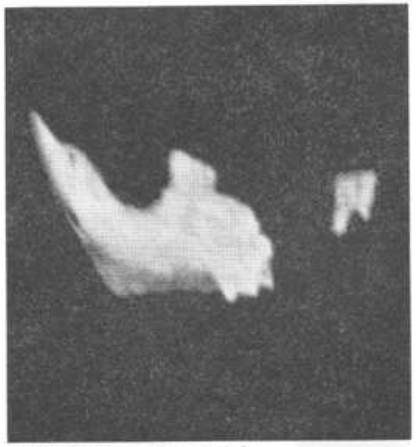
(j) ヴェアード(Veado 鹿)

ブラジルに棲息している鹿属には7種類あるが，サンパウロ州に見られる鹿は次の3種類である。

1. Mazama americanaI Erxleben
Veado-pardo, Veado-Mateiro

2. Mazama simplicicornis lliger
Veado-Vira, Catingueiro





図・写真 79 上 プレア (Prea)
下 プレアの顎骨

図・写真 80 上 タツー (Tatu)
下 タツーの角質甲板

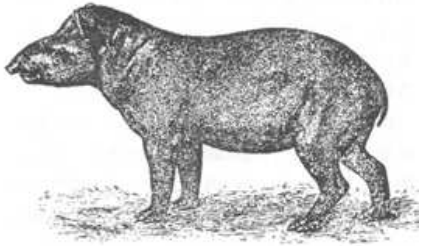
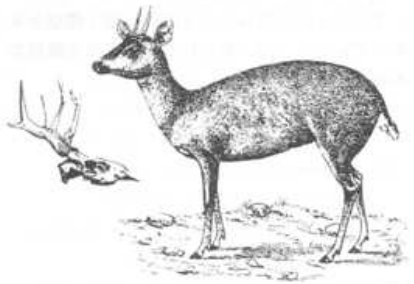
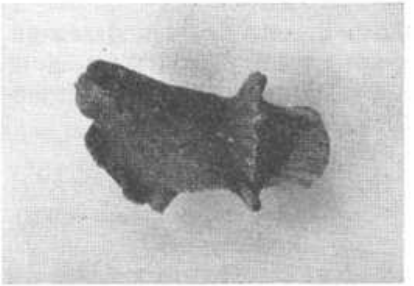


図 81 アンタ (Anta)

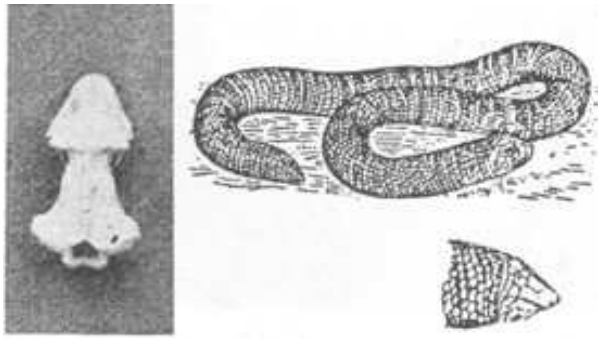




図・写真 82 上 鹿 (Veado)
下 鹿の角の一部

3. Mazama rufina Bourcier et Pucheran　　Veado-Caracu, Bororo

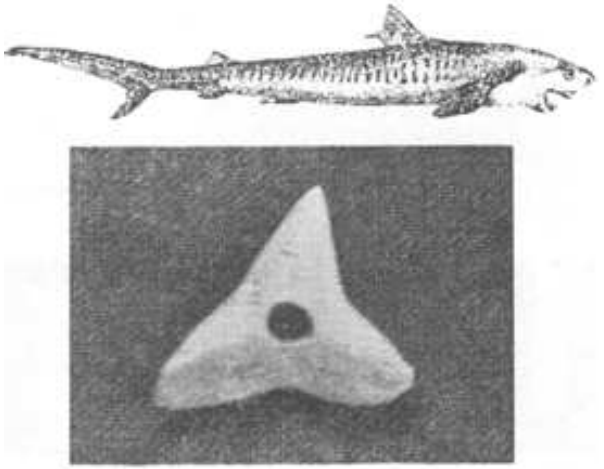
インジオは鹿を，ス･アス－（Cu-assu）と呼んでいる。それは多食，多肉　多収を意味している。鹿を捕獲するのには，鹿が常に通い慣れている道に罠をつくっておき，充分に訓練された猟犬で罠に追い込んで捕える。



図・写真 83　右　両頭蛇（Cobra de duas Cabeças）
コブラ・デ・ドゥアス・カベサス
左　頭骨（実物大）

(k) コブラ･デ･ドゥアス･カベサス
（Cobra de duas Cabegas 両頭蛇）
Amphisbaena alba

爬虫類のトガ目の両頭蛇科に属する動物で，世界に24種ばかり知られるが，サンパウロ州には4種ほどいる。アマゾン地方では，しばしば蟻の巣に見られるところから，マンエ･デ･サウーバ（Mae de Sauva）といわれ，ツピー語ではイビジャーラ（Ibijara）とよんでいる。一見して，大きなミミズに似ており，全体は円筒形で，尾も太く，頭部と太さが変らないので，両頭蛇の名がついたが，全体は黄褐色で，



図・写真 84　上　ツバロン　下　鮫の歯で作った首飾
（実物大）

地中に住み，目は極端に退化している。何を採食するかについては疑問の点が多く，アリ類ともいい，クモ類ともいわれる。俗に〝尾で刺す〟といわれ，毒があると信じられているが，全くその様なことはなく，無害の動物である。

(1)ツバロン(Tubarao 鮫)

Selachios pleurotremados

ツバロンは骨格が軟骨で，ヒレは両側に開いており，下側にはない。 カソン(Cacao)とよばれる鮫は，害をしないし食べられる。 チンツレイラ(Tintureira) Selachio Galeocerdo maculatus とよぶ鮫は，典型的な形をして，体長は10mに達するものもある。歯はギザギザの緑があって，猛獣の爪のように曲っている。背は灰色，下側は白く，側面に黒い斑点がある。卵胎性で1回に60個の卵を生む。

Ⅳ　　サンパウロ州奥地の土塚

A. インディオ保護局の初代長官ロンドン

インディオ保護局という行政機関の初代長官となったロンドン　(Rondon)はブラジルの土人ともっとも深い関係にあるので，ロンドンの略歴を紹介する。

ロンドンの名は洗礼を受けた際の添名で,名はカンディド･マリアノ･ダ･シルバ(Candido Mariano da Silva)という。1865年5月5日にマット･グロッソ州(Mato　Grosso)のクイアバー(Cuiaba)近くのミモゾ(Mimoso)に生まれた。

2才の時に孤児となり，その後，叔父夫婦に育てられた。叔母はポロロ族であった。

青年時代は，陸軍学校で技術部を修学し，戦争廃止運動や共和政体の運動に加担していた。1890年にマット･グロッソ州内に電信線の架設の任務をうけて奥地入りした。ロンドンのモットーとするところは,蛮人を教化し,白人に敵対しないように指導すること。自分は死すとも決して相手を殺さない主義などで"平和の将軍"の綽名で通っていた。1892年に電信線架設工事の直接の指揮者となる。1906年，ロンドンは4回にわたって大探検を行っている。第1回目の探検はクイアバーからアラグアイア(Araguaia)に到る間の大沼沢地帯を横断

して,電信線の架設工事を進めるかたわら,地質調査,河川の地図作成,新しい水路の発見,未知の土人部落との接触などをおこなった。1907年,第2回目の探検でクイアバーからジウレーマ川(Rio Jurema)間の1,781kmを踏査し,電信線架設工事のかたわら,パレシス族(Parecis)の調査をした。

第3回目は北部山脈から,マデイラ川(Rio Madeira)間の2,232kmに電信線架設工事のかたわら,ニャンビクワラ族(Nhambiquaras)の棲息地帯の調査を行なった。

1910年,インディオ保護局の初代長官となる。1912年,第4回目の探検はマット・グロッソ州の北部山脈に棲息しているインディオの研究家,人類学者のロケッテ・ピント(RoQUETE Pinto)の調査に協力した。ここでも電信線の架設,地質調査,動植物の調査などでブラジルの自然科学に貢献した。1913年　陸軍大佐1923年　陸軍中将1955年　国会にて栄誉ある陸軍元師を授けられる。1956年　ロンドニア(Ronidonia)の称号を与えられる。1958年1月18日にリオ・デ・ジャネイロ(Rio de Janeiro)にて逝去す。享年93才。

B. インディオ保護局

(FUNAI　　FUNDACAO NACIONAL　DO INDIO)

ブラジル政府がインディオに対して積極的政策をうちだしたのは，1910年，リオ･デ･ジャネイロ市にインディオ保護局を創設して以来である。

ブラジルの全地域に棲息しているインディオは，過去の経緯から見て，その人口は急激に減少の線を辿っている。土人は白人に対して，つねに敵意を示し，抵抗を続けている。

ブラジル国家の繁栄は，奥地開発が重要な要素を占めている。その開発にはインディオとの接触は避けられないので，土人の施策は保護局によって実施するとともに奥地の開発を進めていった。

政府の奥地開発の機構は，奥地に向かって町を造成していく。一つの町の形態が整うと，更に奥地に新しい町をつくり，次々と奥地に向って前進していく。電信腺の架設もそれに追従していった。いずれも土人との按触が多いことから，インディオ保護局では基本的な接触要素の政策を設けた。

(1) 土人の白人に対する敵対行為の防止策には，土人が必要とする食料，装身具などを付与して，平和的に接触を計ること。

この問題がスムーズに解決した上で，農具を与え，農業の技術的指導をする。その後にいたって食料の自給生産に導く方針であった。

(2) 土人の絶滅していくことに特に配慮を加えた。絶滅の原因には色々な要素がある。

その一つに白人が自由勝手に居住地に入り込み，土人と接触するので，色々な病原菌の感染で，極度に死亡率が増えていった。羅病者に医薬品の投与を計ったが，むしろ土人の方で避けた。開発や町づくりは密林を伐採するので，土人の食料としていた鳥獣は姿を消し，食料の補給はおびただしく減退していった。

これらの緩和策に，土人の種族ごとに，一定地域の領地を与え，白人の無断侵入の禁止策をはかった。

(3)土人教化にともなって，農業に従事した土人を賞賛するのにアルミニュ-ム製のメダルを付与した(発掘した資料にて判明す)。

(4)インディオ保護政策を実施するにあたり．総元締めをリオ･デ･ジャネイロに設置し，土人集団地域に支局を設けた。1954年の統計によれば，ブラジル全土の支局は106個所におよんでいた。

保護局の支局駐在員は6-12名で，その内容は，1名は支局長として担当地域の責任者となる。配下には農業技術指導員，狩猟の指導員，漁の指導員，医薬品の担当者，それに料理担当者などが含まれている。

以上がブラジル政府のインジオ保護の政策実施の概要である。

インジオ保護局の施策が，土人部落に〃どのように浸透していったか〃のことについて

は，次に記す各地の遺跡発掘によって窺うことが出来る。

政府の奥地開発や町づくりの実施がサンパウロ州のどの地域から始められたかは不明であるが，発掘した土塚4個所の順位はサンパウロ市に近いものから説明する(各地区の位置は地図１参照)。

C. リンスの土塚

位　置

リンス(Lins)はサンパウロ市より北西453kmの地点にあり，リンスより南西約25kmにゼツリナ(Getulina)郡マクコ(Macuco)管区内にオウロ・ブランコ(Ouro　Branco)耕地がある。地形は緩慢な波状形であり，リンスとゼツリナの中間を流れているアガペイ川(Aguapei)はパラナ川(Parana)に合流している。

発掘調査団

リンス市で日本人医師として有名な今田求氏は，日本からの移住者や全住民の病気治療，衛生指導に献身的であった。自然科学にも造詣探く，近隣地帯に密林が残っているあいだにリンス地域を科学的に調査して，将来の資料に供しておきたいといって，サンパウロの栗原自然科学研究所に調査の協力依頼があった。所員の橋本梧郎氏は植物関係，著者は考古学，

今田氏自身は野鳥の蒐集に努めていた。こんなおりにオウロ・ブランコ耕地内に土塚があるという報告に接し，1940年10月28日にリンス在住の日本人，同好の士で調査団を組織し，翌日，オウロ・ブランコに向った。土塚の傍に陽よけの天幕を張り，地元の青年団も参加して大調査団となった。

土塚の形態

塚はやや低い饅頭形で，高さ80cm，塚の直径約6m，塚の周囲をめぐらしている溝の深さは約50cm，その巾は約1mで，土塚としては大形の方であった。

埋葬状態

地表面より約2mの探さにて人骨1体を発見する。これより20cm高みの所，即ち探さ1.80mに5体の人骨が外側を背にし，いずれも仰臥の屈葬で楕円形状に配列されているのが見られた。1個の塚から6体の人骨を発掘したのは初めてである。

副葬品

副葬品を類別してみると，近代的な物と土人の手芸品とに分けられる.，近代的の物には鉄製槍先，首飾のガラス玉，ガラス瓶，ブラジル貨幣などであり，土人手芸品としては骨製の鏃と針，首飾にするフデ貝，獣歯又は獣の鈎爪を加工したと思われるものがある。 これらの副葬品は，すべて人骨の周囲より出土した。

観　案

近代的物品のすべては，土人保護局員との接触で取得したと思われる。鉄製槍先は漁や狩猟に使われ，着色ガラス玉は首飾に，ガラス瓶は水飲用に，ブラジル貨幣は土人の趣好品などと推察される。ここに農具類が見られないのは，農業を営まずもっぱら漁と狩猟で生活を維持していて，白人に敵意を示すこともなく，インディオ古来の風習を持続していたことがわかる。

土塚から6体の人骨を発掘したことは極めて珍しく，同時に様々な疑惑がうまれる。この時代に異種族とのあいだで闘争したとは考えられない。又白人の虐殺とも思われない。極めて平和な時代である。

おそらく，白人との接触で或る種の病原菌が感染し，抵抗性のない土人の間に異常なまでに拡がり，病気が悪化し，多数の被害者をだしたものと推察する。

D. プロミッソン　A塚

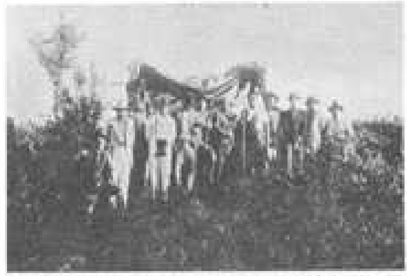


写真 83-1　リンス（オウロ・ブランコ耕地内）土塚前の調査団（中央の鳥帽子が今井医師　左端は著者）

写真 83-2　土塚の周囲にめぐらしている溝

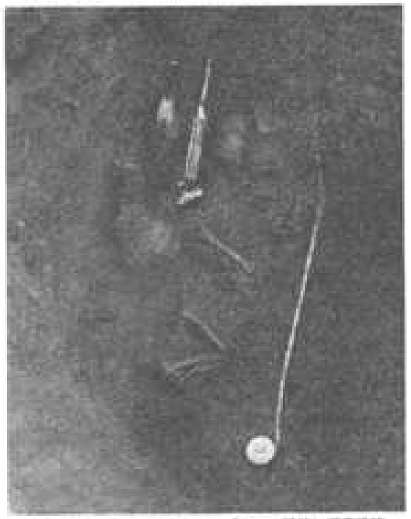
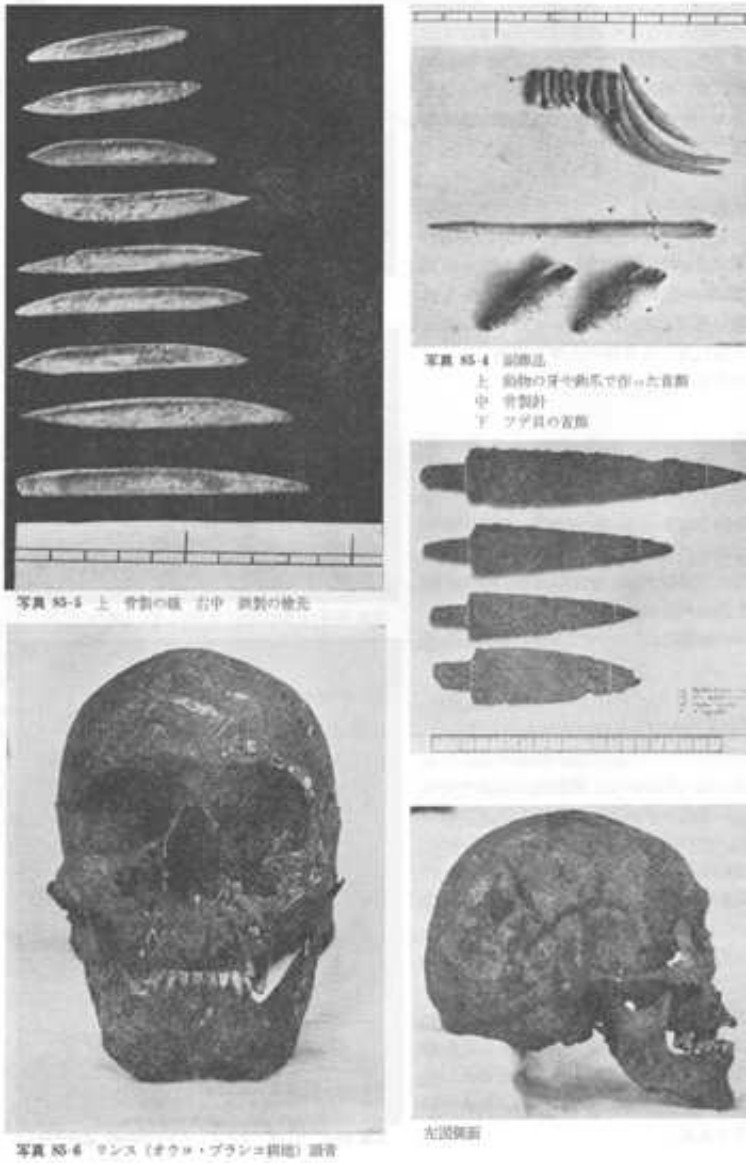


写真 83-3　リンス（オウロ・ブランコ耕地）埋葬状態

位　置

ブロミッソン(Promissao)はサンパウロ市より北西475kmにあって，リンスより18km の近距離にある。地形はリンスとほぼ同様で，標高は約350mである。プロミッソンより東方14kmの地点にボン・スセッソ(Bom Sucesso)という地名があり，この地は故上塚周平氏が開設した有名な日本人植民地である。この上塚植民地内に上塚周平氏所有地があり，その土地内に近接した2個の土塚がある。初めに発掘した土塚をA塚と呼び，後のものをB塚と呼ぶ。



ブ－グレ神社

開拓当初，塚に祠と鳥居を建立して毎年塚の祭紀を怠らなかったが，昭和11年(1936)に上塚周平氏死去後はまったく顧みるものもなくなり，荒廃に帰してしまった。当時の祠と鳥居をブーグレ神社

(Bugreは野蛮なインジオの意)といっていた。この塚を発見した当初,塚の表面に土製のラッパを発見し,これを詞の神体として祀ったという。その後,何者かによって破砕遺棄されてしまった。この話を聞いて詞跡を採索したところ,ラッパは数個の破片となって採集することが出来た。

塚の形態

1938年3月に神屋信一氏と著者は村民の助力を得て,A塚を発掘した。塚の大きさは直径約5m,高さ2m,周囲に巾約1.50m,深さ1m の溝がある。この内溝の外側に,さらに1条の溝が半周していたが,その痕跡が認められる程度であった。

塚の発掘

塚の盛土を除いたところに,すでに腐朽した丸太や割木が横に並んでいた。これを除くと,縦に用材が立ち並んでいて,いづれもヤシ樹を用材としていた。ヤシ樹が楕円形に立ち並んでいるので,一時

写真 86-1 プロミッソンA塚の全景

写真 86-2 プロミッソンA塚 土塚の周囲の溝

写真 86-3 プロミッソンA塚 横並べのヤシの割木や丸太

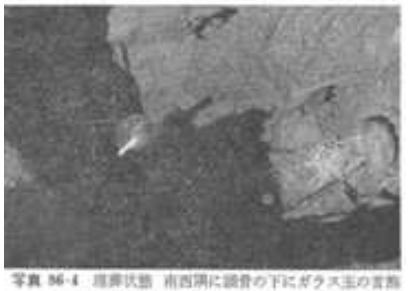


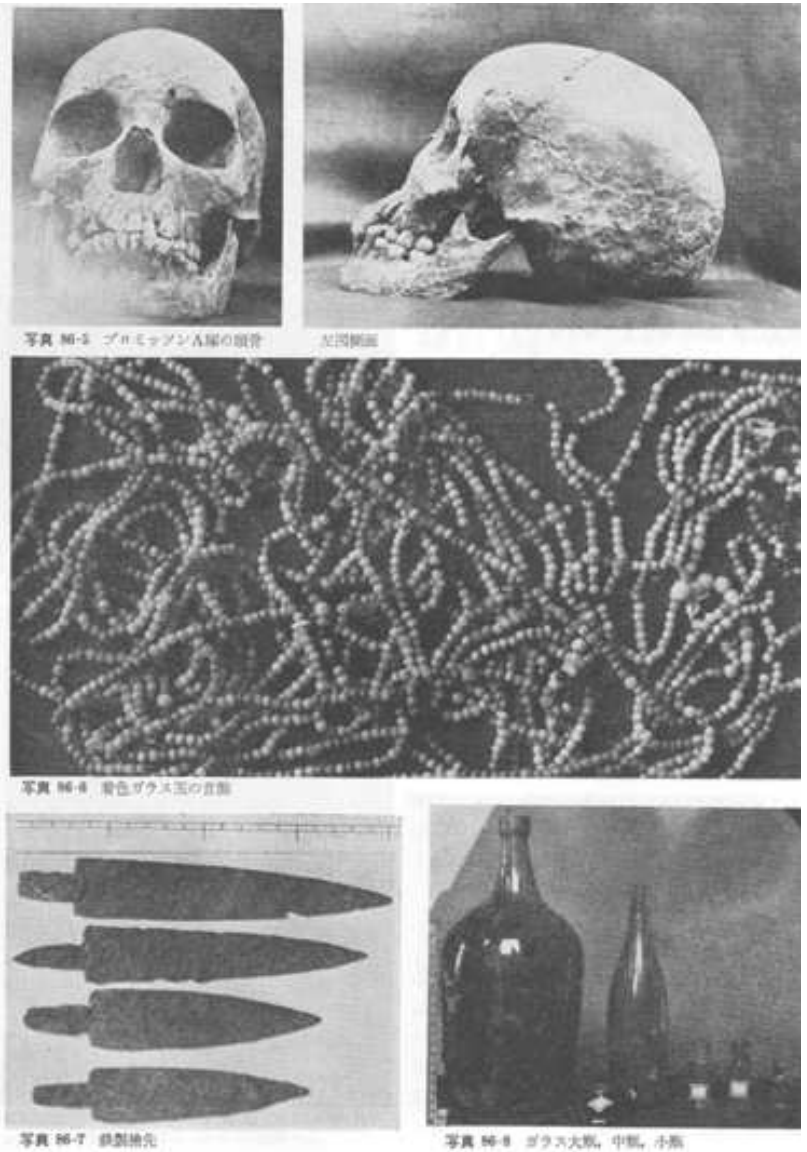
写真 86-4 埋葬状態 南西隅に頭骨の下にガラス玉の首飾上に銃並びに足元にガラフォンを副葬す

住居の壁かと推測したが，地表下であり，住居の壁ではなく，墳墓の囲いであった。

塚の南西隅，地表下2mのところに人骨1体と反対側の北西隅に，やや高みに，更に人骨1体を発見した。いづれも壁を背にした仰臥屈葬であった。

副葬品

南西隅の人骨の傍から多量の着色ガラス玉の首飾，鉄製槍先，銃(バラ玉共)，ガラスの大瓶(garraf a o)，鉄製の農具即ち鍬(enxada)，唐鍬(enxadao)，鎌(foice)，山刀(facao)，斧(machado)などを発掘した。反対側の北西の人骨は，南西人骨よりわずかおくれて埋葬し，副葬品は小瓶ていどのものであった。



観　察

A塚の副葬品の表で解るように,近代的物資は保護局から給与されたものが大部分で,土人の手芸によるものは植物の種子で作ったわずかな首飾であった。

この塚の人骨は保護局の政策通りに，白人に対しては従順になり，南西人骨は希望通りに沢山の首飾を貰い，農業にも従事し，食料の自給をなし，北西人骨は小瓶を所持していたことから，長い期間にわたって病人であった，と推察される。

E. プロミッソン　B塚

プロミッソン地域には蟻塚が多く，土塚と間違えて報告を受け，調査に赴いたことがしばしばであった。蟻塚は饅頭形に土壌が盛り上がっているので土塚に類似するので,間違えて発掘する者もいた。

位　置

B塚はA塚より僅かに離れた位置にあって，周囲は放牧地であった。1938年12月12日，サンパウロ市栗原自然科学研究所々員大窪文秀氏と著者は地元住民の協力を得て発掘した。

形　態

土塚は饅頭形であるが，周線は牛馬の通路に当っているので，塚の一部が崩れ落ち．高さは正確ではないが，約1.50m　と推測された。塚の周りの溝は降雨による流土や牛馬の踏破で原形が見られず，僅かに痕跡が認められたに過ぎない。

発　掘

墳墓の蓋にしている横木はA塚と同様であるが，殆ど腐朽し，壁面に立て並べたヤシの丸太は数本だけ，その痕跡が見られた。

地表より約2mの深さで，南西隅と北西隅にそれぞれ1体宛の人骨を発掘した。

埋葬状態

南西人骨の埋葬状態は，壁面を背にして立坐と仰臥の中間ぐらいの姿勢で，下肢骨は屈折していた。人骨の周囲よりガラス瓶，狩猟具，農具類，ブラジル貨幣，首飾などを発掘した。頭髪の－部も出土し，黒色の直毛であった。

北西人骨からはA塚と同様に発掘物は極めてすくなかったが，近くより食料品の乾燥した塊りが出土した。分析の結果，マンジオカ(mandioca)粉の塊りであることが解った。

副葬品

出土した狩猟具，農具類はA塚のものと同類であり，装身具の着色ガラス玉も亦類似品である。ガラス玉の径は5㎜内外に穴が穿ってあって，その着色には黒，白，黄，緑，水色など，又人造ボタンは衣服用のもので，ボタンの穴は2ツ目，4ツ目があって，いずれも首飾に使用していた。

発掘したブラジル貨幣に鋳造年号の刻印があり，塚の年代が推測されるので詳細に分類し，訳文にて記録する。

銅貨一円径は37㎜，40の記号があり，磨滅部分が多く判読は困難であるが，帝政時代に鋳造したものである(2点)。

銅貨一円径は34㎜，75の記号があり磨滅部分多く判読困難。1819年の鋳造刻印あり。ペードロ二世の帝政時代のものである(1点)

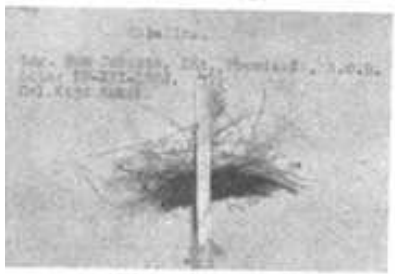
200　レース貨幣一刻印は「ブラジル連邦共和国1889年11月15日共和国制定　秩序と進歩200レース」とあり，鋳造は1895年(2点)

400　レース貨幣一刻印は「ブラジル連邦共和国」(2点)

100　レース貨幣一刻印は「ブラジル連邦共和国　秩序と進歩1889

写真 好-1　プロミッソン貝塚の全景。塚の上に立っている方は大原文秀氏，右は著者

写真 好-2　上　プロミッソン貝塚の埋葬状態
下　同塚から発掘した頭蓋



年11月15日共和国制定

100レース」鋳造は1895年(4点)

200　レース貨幣ー刻印は「ブラジル連邦共和国　200レース」(1点)

100　レース貨幣ー刻印は「ブラジル連邦共和国100レース」(1点)

アルミニュ－ム製のメダルには次のものがある。

メダルの円径40㎜ー腐蝕部分多くて判読は極めて困難。文字の拾い読みでメダルの表面に「ジョゼ・ボニフアシオ1822(Jose Bomfacioはブラジル人で政治家，著作者，科学者で特に著名人)インディオ保護　労働者の定住」裏面に「ブラジル連邦共和国　秩序と進歩　農務局」などの刻印を判読しえた。要約の主旨はインディオは定住し，農業に従事し，保護局に協力した模範的インディオを称賛する意味でジョゼ・ボニフアシオ賞である(2点)。

小形のメダルは25㎜ーフランシスコの刻印があり，上記の

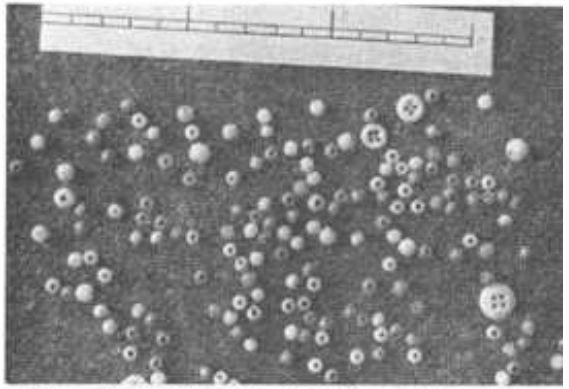
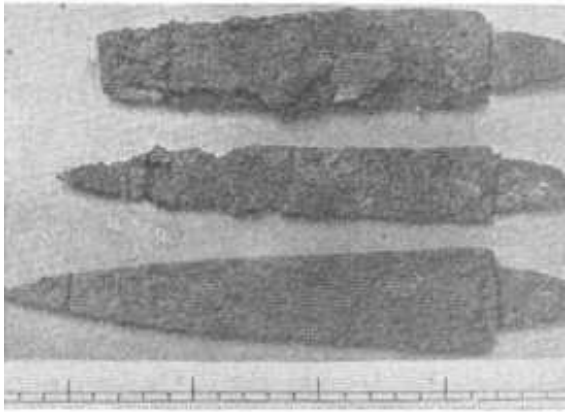


写真 87-3　着色ガラス玉と人造ボタンの首飾



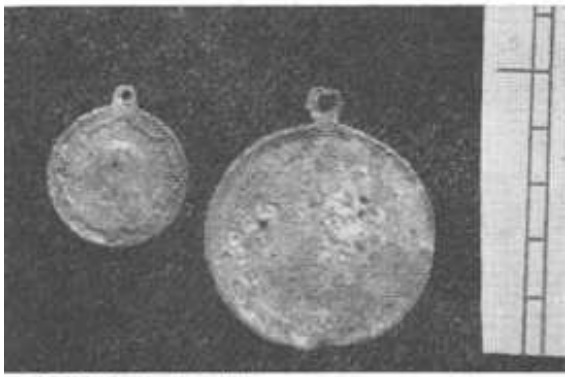


写真 87-4　上　鉄製槍先

メダルより軽い意味の賞と思われる(1 点)。

観　察

狩猟具，農具，装身具などのすべては保護局からの給与品であり，土人の手芸品は全く見られないので，白人に同化したインジオとみなされる。

アルミニュームのメダルは，現代の社会に見られる顕著な人物に勲賞を授与する行為と等しく，土人にとっては最高の名誉である。

B 塚から発掘したブラジル貨幣の内で，現代に最も近い鋳造年号のものは 200 レースと 100 レースの貨幣で，鋳造年号は 1895 年である。この貨幣を所持していた人骨は 1895 年以後に埋葬されたことになる。一応 1900 年前後の遺跡と見做すことができる。

日本人で最初のブラジル移民は1908年の笠戸丸移民である。そのころのブロミッソン地域はインジオが棲み，保護局の指導のもとに営農していた，と推察される。

上塚周平氏がプロミッソンに植民地を創設に入植したのは1918年であるから，同地域に棲んでいたブーグレは，この僅かな期間にインジオ保護局によって，他の地域に強制的に移動をしいられたのであろう。

F. グアララペス土塚

位　置

グアララペス(Guararapes)はサンパウロ市より北西に565kmの地点にあり，さらに南に約30km離れたところにジャンガーダ植民地(Jangada)がある。当地域は緩波状の地形で，近くにジャンガーダ川が流れ，その水流はアグワペイ川に合し，さらにパラナ川に合流する。

荒木潔氏の報告

ジャンガ－ダ植民地から〝土人の墓と思われる土を盛った塚がある〟との報に接したが調査の機を得ず，当時の南米新報記者，荒木潔氏に，その発掘を依頼した。
荒木氏は1937年８月１日に住民の援助を得て土塚を発掘し，その報告と遺物とを送付してきた。これによって見るに，該地方に同様の塚が所々にあって，荒木氏の発掘したものはその内で完全なる一つであった。

土塚の形態

塚の外形は円く，饅頭形に土を盛ったもので，直径約5m，高さ0.80m，周囲に巾約1.40mの浅い溝をめぐらしてあった。

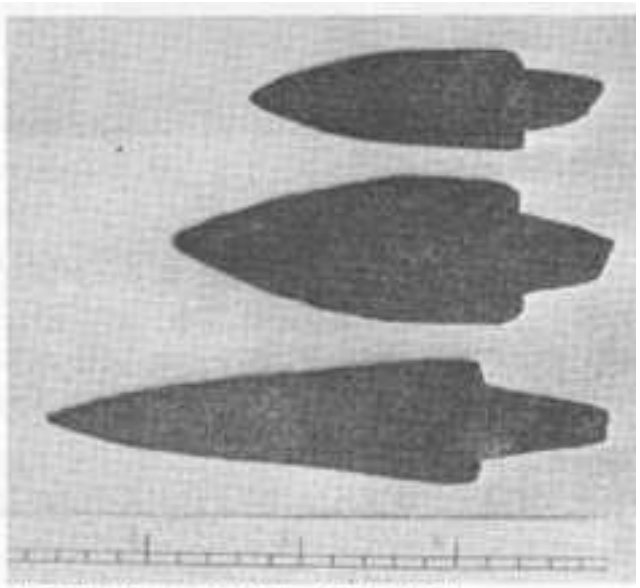


写真 88-2　左　鉄製槍先　右　鉄製釣針

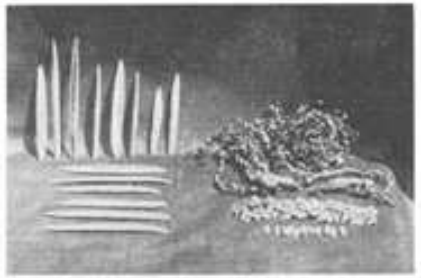
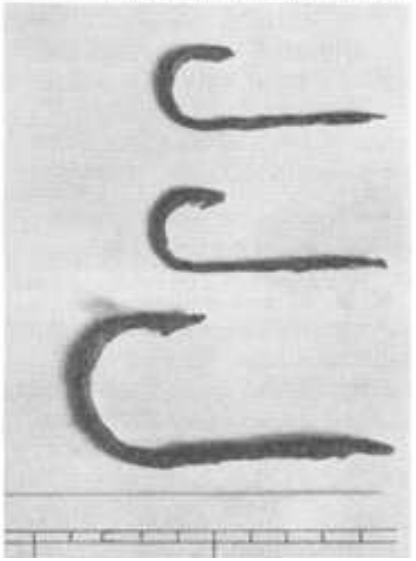


写真 88-1　上　左側は獣骨製錐
右側は皮革に使用した植皮と動物の歯
下　植物の皮で動物の歯を組み編みした首飾



発掘状況

塚の発掘でヤシの木榔内に人骨２体と副葬品として骨製鉄，獣歯の首飾，鉄製の槍先や釣針並びに農具などを発見した。荒木氏から送付して来た写真では仰臥屈葬と推定された。

副葬品

狩猟具，農具などは，前記した各土塚の副葬品と同類で，保護局からの給与物である。漁用の釣針は大形のものであった。

土人の手芸物である骨製嫉は，リンスの土塚のものに類似していた。首飾ではリンスのものと比較して見ると，グアララペスの土人の手芸技術

リンス土塚　副葬品の表

類別＼項目	保護局の給与品（）内は個数	インジオの手芸器具（）内は個数
狩猟，漁具	鉄製槍先(4)	獣骨製鏃(4)
飾身具	ガラス玉の首飾(5)	フデ貝の首飾(4) 獣骨及爪(加工)の首飾(16)
生活用具	ガラス瓶(2)	
器具		骨製針(1)
雑好品	ブラジル貨幣(2)	

プロミッソンA塚　副葬品の表

類別＼項目	保護局の給与品（）内は個数	インジオの手芸器具（）内は個数
狩猟具 漁具	鉄製槍先(4) 銃及附属品(1式)	骨製鏃(1)
農具	大鎌(2) 鉄斧(3) 山刀(2) 除草鍬(3) 唐鍬(1)	
飾身具	着色ガラス玉首飾（約 5,000）	植物種子の首飾(11)
生活その他	ナイフ数 (1) ガラス瓶 大(1) 中(1) 小(3)	

プロミッソンB塚　副葬品の表

類別＼項目	保護局の給与品（）内は個数	インジオの手芸品
狩猟具	鉄製槍先(3)	
農具	除草鍬(1) 大鎌(4) 斧(3)	
飾身具	着色ガラス玉並人造ボタン（約 1,000個） アルミニューム製メダル 大小(3個)	
生活用品その他	ガラス瓶(3) ブラジル貨幣(13)	

グアララペス土塚　副葬品の表

類別＼項目	保護局の給与品（）内は個数	インジオの手芸品（）内は個数
狩猟具 漁具	鉄製槍先(11) 鉄製釣針(6)	骨製鏃(40)
農具	大鎌破片(2) 斧(1)	
飾身具		獣歯の首飾(1聯)

は独特のものを持っている。猿の前歯の根元に小さな穴を穿ち細糸を通し,その歯を細くさいた植物性の皮で１個１個丁寧に包み，組み編みにした首飾である。

観　察

グアララペスは前述３地区より遠隔地にあり，したがってサンパウロからの文化の波もそれだけ弱く，古来の技術を保持することが出来た。

グアララペスに棲む土人は，白人に抵抗しないまでも，農業を本格的に営むまでには至らなかった。古い習慣に従って,狩猟や漁を専業として,器具は保護局の給与を受けていた。

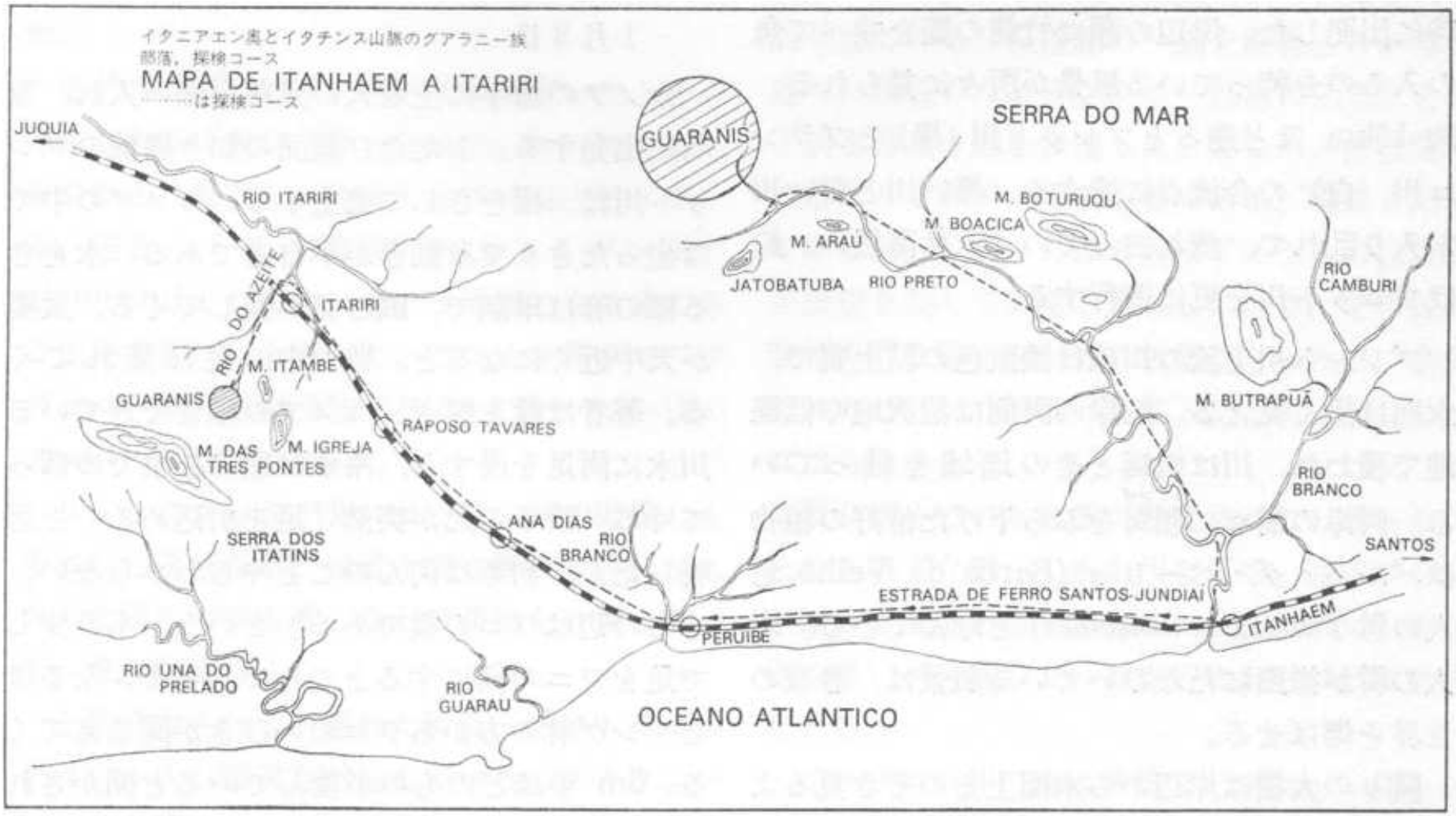
V　　グアラニー族の探検旅行記

16世紀から17世紀にかけて,キリスト教派の伝導者たちがブラジルの土人部落に入り込み,土人の教化に努めたので,ブラジル南部のグアラニー族(Guaranis)のほとんどは,キリスト教派の影響を受けた。この教化運動で土人たちは布を織ることを知り,簡単な手工芸も教わった。畑を耕して農業を営むことも習った。このようにキリスト教化はグアラニー族の中に深く浸透していった。下記の探検記にその影響を覗い知ることが出来る。

(a)プレツト川流域の探検

サンパウロ州の海岸山脈地帯はいまだに日本人の手によって学術的に踏査されたことがないので,常日頃から探検の機会を待望していた。今回その機会をつかむことが出来たので,サンパウロの粟原自然科学研究所の所員.即ち橋本梧郎氏は生物学の調査,大橋正一氏は絵画.著者は考古学並に人類学的調査,大城重助氏はその助手といった担当メンバをもって土人部落探検隊を組織した。

グアラニー族については,これまで文献の上で窺ったり,遺跡の発掘などで考えたのであって,現存するグアラニ－族の探検は初めてである。昭和14年(1939) 12月31日は大晦



地図89　イタニアエン奥とイタチンス山脈のグアラニー族部落，探検コース　……線は探検コース

日であったが,ブラジルではまことに平穏そのものである。探検隊の出発といっても,隊員の住居地はそれぞれ離れているので,集合地をジュキア線(Juquia)ペ-ドロ・デ・トレ-ド町に決め,橋本氏と著者はサンパウロのルス駅(Luz)を午前8時の汽車でサントスに下った。サントスで大橋氏が加わってペードロ・デ・トレ-ドに至る。此地で更に大城氏も参加した。同町のホテルに一泊して旅装を整える。ブラジルで除夜の鐘を聞くことはできないが,それに代る爆竹の音を聞きながら夢路に入る。

1月元旦

著者にとっては長年夢に描いていたグアラニー族を探検する機会を得た,記念すべき元旦である。午前7時24分発の汽車でイタニアエン(Itanhaemツピ-語で石製の皿の意)に向う。イタニアエンからプレット川の川上にあるポルト(Porto)との間を運航している定期発動機船は,今日は元旦で休業とのこと。止むを得ずイタニアエンの浜辺で植物昆虫の採取をなす。

潮風の吹く砂浜に黄色い花を咲かせているランは,龍の口に似ているのでボッカ・デ・ドラゴン(Boca de DragAo 龍の口 Epidendrum Mosenii)とよんでいる。飛沫の岩間での小カニ漁りは都会生活の者にとっては無碍に興味をそそる。この地の丘陵上に1624年にフランシ

スコ派によって創設された有名な修道院は荒廃しているが,昔を偲ぶのに充分であった。このようにして大西洋岸で元旦の大気を腹一杯に吸い込み,探検前に英気を養うことも有意義であった。当地で蔬菜栽培をしている沖細県人の真喜屋氏宅に一泊の世話になった。

1月2日

イタニアエンの船着場から発動機船が午前9時に出発した。岸辺の瀬に竹籠の簗を並べて魚の入るのを待っている風景が所々に見られる。約10kmほど遡るとプレット川(黒)とブランコ川(白)の合流点に達する。黒い川と白い川が入り乱れて,流れ去っていく水は薄黒い。船はプレット川を更に遡行する。

プレット川上流の川床は濃鼠色の粘土質で,水面は黒く見える。沿岸の両側は沼沢地や低湿地で覆われ,川は延々とその地域を縫っている。両岸の樹々に顎髭をぶら下げた恰好の植物はバルバ・ダ・ベーリョ(Barba da Velho 老人の髭 Tillandsia usneoides)と呼んでいる。老人の髭が微風にたなびいている風景は,静寂の世界を偲ばせる。

隣りの大樹は岸辺から水面上をのぞき見るようにして延びている。大樹が流れ水を飲む恰好である。その小枝の末端に,ヘチマのような型の袋がぶら下っているのが眼につく。鳥の巣である。この鳥を土着人はグワシー(Guache Cassicus haemorrhons)といっている。この風景も亦珍稀である。陸から敵の襲撃を防ぐのに最適の位置にある。強風に振り廻されても

, ブラブラ揺れるだけで落ちる心配はない。巣は50cmから80cmの深さがある。発動機船のポンポンと響く音で驚いたのか, 長い巣袋から突然グワシーが飛び出てくる様は, 丁度高射砲の口から弾丸が飛び出るのに似ている。

次に展開されているのは, 蛸の足に似た樹の根が両岸にずらりと並んでいる。これはマンゲ(mangue)といって, 隻子葉類の植物で, 蛸の足に見える根は支柱根であり, 呼吸根でもある。都会では盆栽鉢や生花鉢に入れて, 飾りに欲しがるようなものである。２時間ほどで定期船の終点であるポルトに到着した。これまでは探検隊の目を充分に愉しませてくれた。探検の聖地までは相当の距離がある。

当地でバナナ園を経営している邦人の加賀津氏宅に旅装を解き, 翌日の出発に万遺漏なきように準備を整える。

１月３日

カノアの漕手に土着人の兄弟を雇い入れ, 黍明に出発する。ふたたび鏡面の如き静流のプレット川に, 擢をさして遡上する。カノアの中では坐ったきりで身動きが不自由である。水をきる擢の音は単調で, 眠む気が催してくる。太陽が天中近くになると, 靴の中の足は蒸れてくる。著者は靴を脱ぎ, カノアの縁まできている川水に両足を浸すと, 冷水は頭の心までのぼってくる。漕手の兄が突然「足を引込めろ」と怒鳴ったが, 初めは何んのことやらわから

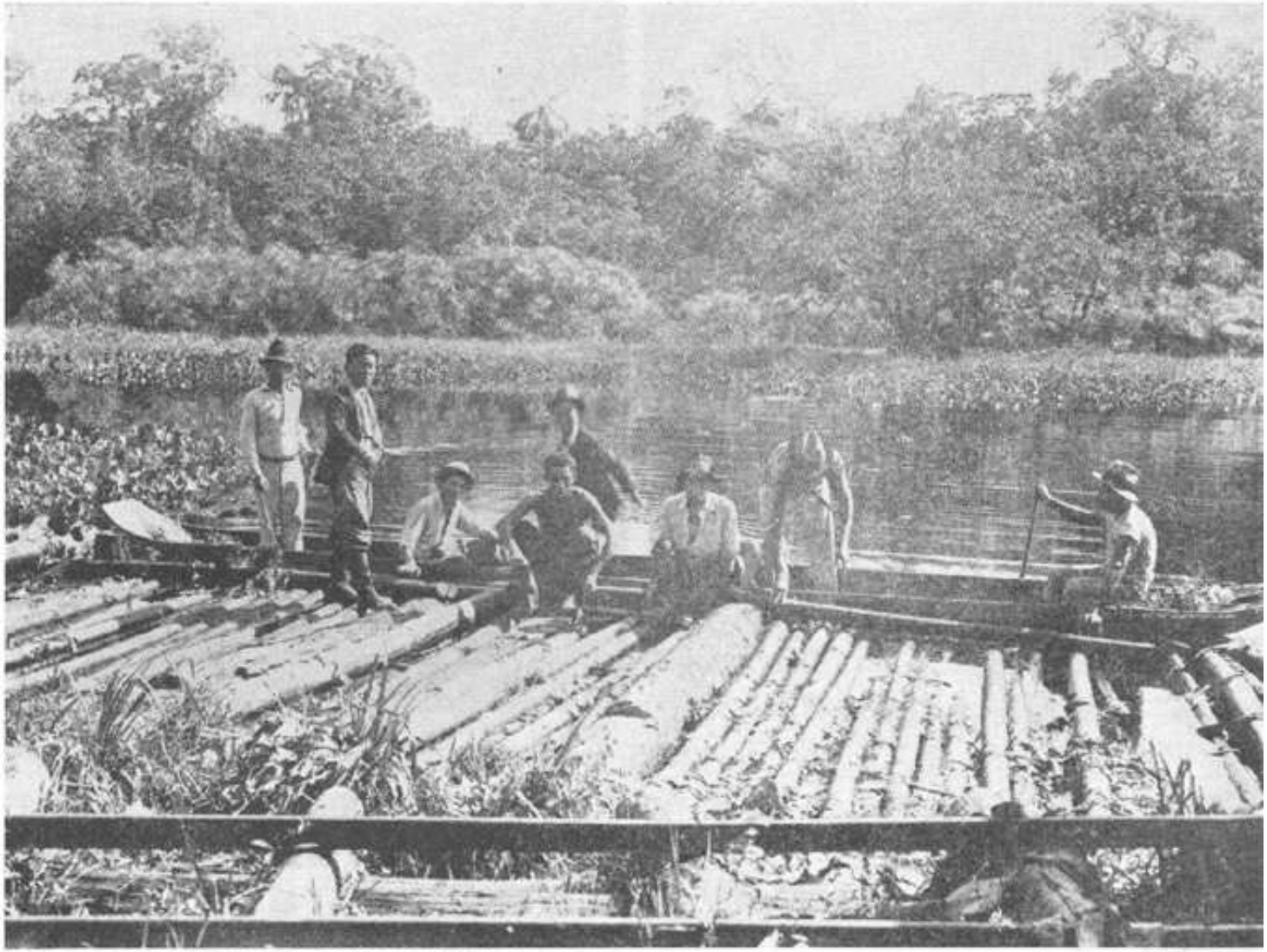


写真 90　プレット川をカノアで遡る探検隊

ない。
「この辺はワニの巣である」という。もう少しで足をワニの餌にするところであった。
　なるほどマンゲ林の方からワニのいびきが聞こえてくる。3m半ほどのものが棲んでいると聞かされたので,全身に冷水をかけられたような気がした。長蛇の流れの川巾も次第に狭くなって来た。
　古代エジプト人が,初めて紙を作ったという原料のカミガヤツリ草(Cyperus Papyrus)の一種が岸辺に繁茂し，殊更らに川巾を狭めている。遡ること約5時間半でジャトバツーバ(Jatobatubaジャトバという果実のなる木のある土地の意)に上陸した。ここより徒歩で.グアラニー族の大集団地であるバナナール(Bananal)に向うのである。
　リュックサックを背に負う者,鍋や湯沸しを手にぶら下げる者,猟銃を肩に掛ける者,ピストルを腰につける者，などで荷物を分担しあって，愈々前進である。
　上陸地よりわずか離れた所に，ポルトガル系ブラジル人の監視官が住んでいる。グアラニー族の女を娶り，土人を使役してバナナ園を経営しているかたわら，土人保護局から任命された監視員である。探検隊の一員を監祝官の許に派遣し,調査のためグアラニー部落に入ることの了解を得たき旨を伝達した。ところが探検隊の部落入りを禁ずる旨の返答である。理由を訊ねてみると，5，6ヶ月ほど前にドイツ人の探検隊が法規を犯して入落したこ

とが分り，その後，監督の取り締まりが殊に厳重になった由。残念ではあったが，眼前の聖地入りを断念しなければならなかった。

張り詰めていた意気が急に弛んでしまった。止むを得ず今遡って来た川を下る。途中プレット川の支流であるイタリルー川(Itariru石の器の意)が合流している岸辺に舟をつけて昼食をとる。

イタリルー川の水は清澄で，プレット川との合流点は，白黒の腺が明白に描いて見える。岸辺に群る魚の多いのに驚いた。残飯を投げてやると大小の魚群は水面に集中してくる。その群の中に手を入れると魚に触れる。掬い捕りができるほどである。恐怖を知らない魚群の世界，昔童話の浦島太郎の龍宮城を想い出す。平和郷そのものである。

川を遡って来る2人の若い土着人はカノアを自由に操り，時には流れにまかせて下り，突然喚声を張りあげたかと思うと，今度は樹陰に舟を止めて釣り糸をたれている。このような情景は，雑沓の社会から来た吾々には一入聖らかさを身に感ずる。

1月4日

土地の人が探検隊の調査を聞き込んで，附近に貝塚のある報らせをもたらして来たので．直ちにカノアで調査に向う。小鳥の囀えずっている梢の下を潜りながら，ボアシッカ

(Boacica 遮断の意)に近づくと,ジュンサイ(睡蓮科)が舟の進路を遮ぎる。アマゾン河の大鬼蓮の葉の上には赤坊を寝かせて魚捕りにでかけて行く土人の物語りを連想しながら,ジュンサイの中を通る。ここで又珍稀な食虫植物(Utricularia oligosperm)が水中に浮遊し,繊毛のような沈水葉の間に微粒のふくろが附着している。この袋が水中の微生物を捕えて食べるのである。

(h)ボアシッカ貝塚

ボアシッカに上陸し,沼択地の叢を分けながら2kmほど行くと貝塚に達する。この間の道のりは,水の上に浮いている丸太の上をフラフラ腰でまわりの草葉に掴まりながら渡ったり,時には足元が定まらずに水中に転げ落ちて腰まで水に浸ったり,文字通り七転び八起して難路を踏破する。

貝塚はボアシッカ山の西方約500mの地点にあって,未だに原形を保っていた。

貝塚の表面に見られる主な貝はイガイの一種ベルビゴン貝(Berbigao, Anomalocardia brasihana),カキ貝,イタヤガイに

写真91 ボアシッカ貝塚

似た貝類が混入していた。高さは約 5m, 表面積の巾は約 35m, 長さ約 50m のやや楕円形である。この様にして草木の蔭に淋しく埋もれている貝塚は, プレット川沿岸に2～3個所散在している由。

何千年もの永い間, 眠り続けてきたボアシッカ貝塚は, 海岸から10数km離れた川上にありながら海産の貝類で構成されていることは奇異に思うのであるが, 一昨日, この川上でタコの足に似たマンゲ林を見て来た。 マンゲは塩水に育っ植物であるから, この地域は大昔は海水で覆われていたことが想像できる。今でも満潮の折りにあのマンゲ林のあたりまで塩水が流れていくので, マンゲ林が残っているのかも知れない。マンゲの根元を好む貝やカニなど未だ棲息していることも推測できる。別の機会に調査する積りである。

バナナールのグアラニー部落調査は不可能であったが, ボアシッカ貝塚の状況を調査できたことで埋合せをつけておこう。

加賀津氏宅で昼食の馳走になり, 謝意を表して引が揚げることとした。カノアで所々の岸辺に立ち寄り, 植物を採集しながらイタニアエンに向う。午後3時頃にイタニアエンに着く。小ガニが鋏をかざして横這いに走り行く後を追いながらホテルに着く。

(c)イタチンス山脈のグアラニー族探検

バナナールのグアラニー族は大集落であるが,イタチンス山脈のは小部落である。探検隊はイタリリー(Itariri恐ろしい石)の南方に聳えるイタチンス(Itatins鼻岩)山脈の群峯に海抜1,350mのトレス・ポンテ(Tres Ponte 3つの突出した山)が屹立している,その山を目指して前進する。

イタリリー駅から7～8km当りまでは,やや平担地である。この辺は蔬菜や稲作する日本人の群落地である.アゼイテ川(Azeite)の清流は,山脈の麓から流れ出て,この地域内を縦貫している。川の両岸一帯は先住民族が周密していた場所で,以前から夥しい石器類が出土している。川の左側に土人の名付けたイタンベ(Itambe 尖岩)山があり,さらに2kmほど離て布袋さんの腹に似たイグレジーニヤ(Igreーjinha小さな教会)山が見える。この辺から次第に登りになり,坂道は傾斜を増して来る。樹蔭一つない炎天下である。全身汗で濡れ鼠のようになって登撃する。

土人部落に入る約2kmほど手前の山道は密林に覆われている。この森林に入ると今までの流汗は海綿で吸い取ったようで,寧ろ寒気がする。森林内に岐路があり,行先が迷路でわからなくなっている。岐路周辺の立ち木を注意して見ると,樹の幹に刀痕が見られる。土人仲

間だけに知らせる目印の刻みであろう。大トカゲが山道を横切って朽木の蔭に身を潜ませて凝視している。森林から抜け出した所は山の中腹で，猫額大の平坦地である。ここがグアラニー族の居住地である。

写真 92　イタリリーの奥，アゼイテ河畔にての探検隊
（左より橋本，大橋，著者，大城の諸氏）

(d) グアラニー族の居住地

草葺きの家屋は目の前にある。細々と夕飼の煙りが，壁の隙間から流れ出ている。

住家の前で子供たちは焚火を取り囲んで何かを煮ていたのであろう，細枝で火の中を掻き廻していたが，探検隊の姿を見るや否や，慌しく焚火の上にあった土鍋を掴えて家屋の中に逃げ込んでしまった。暫くして子供の父親は不機嫌な顔付きで出て来た。グアラニー族である。容貌は日本人に似ている。突飛な訪問なので，相手に恐怖や疑心を抱かせないように，機嫌を和らげるように，盛んに話をもちかけることに努めた。「今日はランの花を採取に山に登って来たが，道に迷い込み，こ

こに来てしまった。空腹と疲労で歩けない。これでは死にそうだ」などと，吾々一行は悲壮な表情で，リュックサックを背にしたまま土間に坐り込んだ。

日焼けに皺だらけの老人と息子は，暫らく何やら相談をしていた。危険でないことが了解され，容貌も自分たちに似ている，空腹で動けない，などで同情したようであった。住家の隣りにある小屋に，吾々を案内してくれた。

(e)仮寝の草舎

ほかのグアラニー族は探検隊の様子を壁の隙間から覗いていたが，吾々を危険でないことを知った女や子供たちは，住家より出て来て元通りに飛び廻り始めた。

借用した仮寝の草舎は低く，広さは2mに3m余りの土間で，屋根はヤシの葉とタクワラ(Taquara　という竹)で葺きおろし，壁は棒切れを立てて隙間だらけで，入口から裏口は素通りで戸がない。1吹き抜け小屋と同じである。屋根裏は煤で黒く，鶏に似たジャクチンガ(Jacutinga　Cumana jacutinga)や鷹の一種ガビオン(Gaviao)の羽毛が屋根裏に刺し込んである。土間には獣骨が転がっている。ここは土人たちが，捕って来た獣を調理する小屋であった。獣の骨などを取り片付け，小屋の前に生えている雑草をナイフで切ったり，手でむしり取って，土間に敷き並べて寝床を作った。その片隅に火を焚きつける。

(f)小さな饗宴

この部落の監督に任命されているカピトン(Capitao)のシルビノ・クルフイノ(Silvino Culfino)は今目の獲物であるジャクチンガを手にぶらさげて来て.買ってくれという。空腹であると云ったことが通じたようである。煮る物を持たないので,家から土鍋を運んで来て,ついでに調理もしてくれる。

燃え盛る焚火のまわりに土人達も集って来て一緒に取り囲み,吾々が持参したピンガ(Pinga 火酒)や煙草で,小さな饗宴が始まった。外交辞礼の-つである。

今までの怪訝な感情は一掃された。土人達は酔う程に遠慮会釈もなく,互いに喰べ,飲み,喋る。土人の若者は流暢なブラジル語で話すが,老人や女はグアラニー語とブラジル語のチャンポンで,殊に老女に至ってはグアラニー語のみで喋っている。

ジャクチンガの肉汁は塩味で,土鍋で煮たせいか,予想以上の風味であった。こんな食料を自由に得て生活ができるのであれば,文明社会に飛び込んで来る必要はないと思った。

賑やかに饗宴をすまして,カピトンは返礼の意味で,探検隊に歓迎の意を表するために,土人仲間でグアラニー踊りを披露してくれるとのことで,一同は引きあげて行った。オリオン星座は暗闇の空で凄く瞬いていた。

(g) グアラニー踊りに招待される

暫くして, 中年男がローソクを点じて迎えに来る。吾々一行は, ローソクの明りで招待会場に赴く。

草舎の入口は丸太が立ち並んでいる。足元の丸太を3～4本左右に振り分けると入口が出

写真 93　仮寝の草舎（左より著者，橋本，大橋，大城の諸氏。右側2人はグアラニー族）

写真 94　寝床の探検隊（左より大橋，著者，大城，橋本の諸氏）

来るので，頭を低くして，潜るようにして入り，丸太を元通りに立て並べると戸が閉った状態になる。草舎の内部は空虚である。左側中央の壁に棚がある。これが燭台であるが，ローソクは手製であるから燭台の壁に3本ほど附着して灯してある。一種の神棚のように見える。ローソクは少し前に蜜の蜜蝋で作ったのであろう，生々しい。

奥まったところに薪がくべられ，灰々と屋内一杯に照りつけて明るい。

写真 95　グアラニー族と探検隊　グアラニー部落で靴と眼鏡を外したら土人と探検隊の区別がつかない

その回りに子供や女がしゃがんで，何やらグアラニー語で喋っている。探検隊が案内された所は燭台の向い側で，土間に木株や丸太が並べてあり，これが招待客の椅子である。腰かけるとゴロゴロ転がって拘に不安定である。

入口の左側の土間に2～3枚の板が敷かれている。カピトンの座席で，家族はあぐらをかいており，母親の傍に5～6歳の女の子が寝ている。時折り眼を開けて腹痛を訴え，その顔は蒼白で痩せ衰えている。

(h) グアラニー踊

愈々グアラニー踊りが始まる頃になると，部落の長老が招待客の面前で，左片腰を土間につけ，右手を頭上に捧げ，小刻みに振るいながらブラジル語混りのグアラニー語で，早口で祈祷をする。これを一人一人に同じことを繰り返していく。最後にカピトンの前でも同様の祈祷で終える。

男たち全員が燭台の前に半円を描き，半円の左端で老父は六弦のビオロン(Violao)を奏でる。隣りの老母は節間の長い竹筒を持っている。竹筒の底に一節があって，土間に落すことを繰り返すと，上部の切口からポンポンと鈍い音が響き出る。この2つの楽器の音調に合せて，半円に描く士人たちは腕と腕とを相互に組み，一連の鎖のようになり，身をわずか前屈みにし，膝関節を半ばに曲げ，小さな足踏みに似た恰好で，一連の鎖は左に右に揺れ歩き，次に鎖が縮むように前に進み後に戻る。

これを繰返しの連続である。 楽器のリズム，小刻みの変動歩調に加えて，歌声を長くしたり，短くしたりの単調な歌謡を全

写真 96 長老夫婦 老婦の手にしているのは竹筒楽器

写真 97 グアラニー族

員で合唱する。

このグアラニー踊りは2時間でも3時間でも間断なく繰返される。時には精力的に夜通し踊り狂うのである。踊りが次第に本調子になると，探検隊員に仲間入りを勧めに来る。

吾々も上半身を裸にして，一連の鎖に加わり，小刻みの足踏みで踊ったが，ものの20分もすると足が上がらなくなった。

何時までも踊りは止みそうにないので，一先ず吾々は宿舎に当てられた草舎に戻る。草の寝床に潜り込むと，草の香りが鼻につく。屋根の隙間から見えるオリオン星座も大分時間の経過を知らせている。

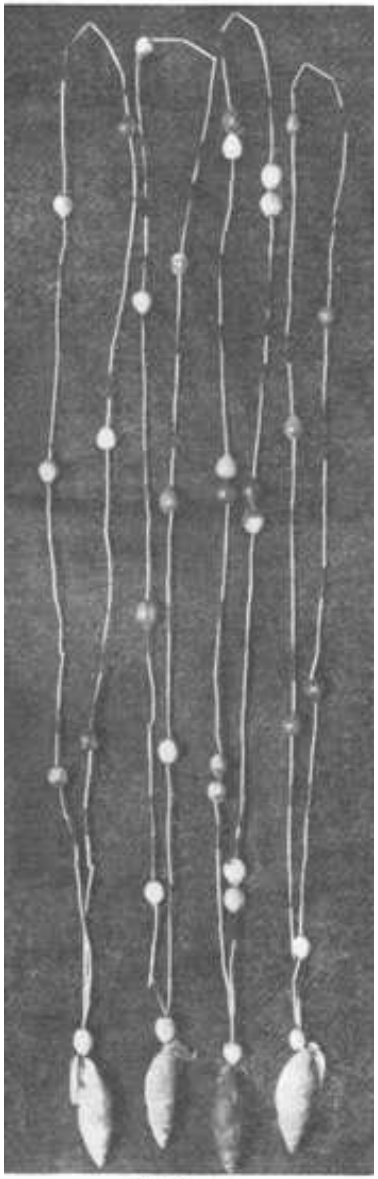
何時までも続けるのか，竹筒の鈍い音，ビオロンの音律に歌声が入り混って，闇夜から流れて来るリズムを聞きながらいつの間にか夢路に入り込んだ。

(i)土産の首飾

カピトンの家を訪問する。入口の前で竹カゴを編んでいた。竹カゴは町に持って行って，食糧品や衣類と交換するのであるが，食料品は主に塩である。

カピトンから首飾りの贈物を貰った。首飾りは大豆粒ぐらいのカピン･デ･ノッサ･セニョーラ(Capim de Nossa Senhora 日本のジュズダマ)という堅い草の種子に孔を貫き，別にオウ

リソ(Ouricoはハリネズミの類)の針を短かく切って紐を何個かに通し,ジュズダマと交互に組合せて長くし,末端部に陸産のフデガイの類プラガ･デ･カフェイロ(Praga de Cafeeiro, Oxystila Phiogera)貝をぶら下げて作った首飾りである。貰った飾物を首にかけてグアラニ-部落内の草舎内を訪問する。



(j)グアラニー族の住家

カピトンの住家は最近に建て直したものであるが,恰好は従来のものと大差がない。

長老の住家にはグアラニー族の遺風が偲ばれる。建物は3m半に5mで屋根が低く,ヤシ樹の葉で地面を這うまでに葺きおろしている。壁は丸太で囲らし,窓はどの部分にもない。光りは丸太の隙間から入り,夜の光りは焚火の明りであると同時に,寒い時期の暖炉ともなる。

入口は前記のように,壁と並べ立てられていて,人の出入りするたびに３～４本を左右に振り分けて入る。

家屋の内部は仕切りがないので空虚である。やや中央に1本の蔓を横

に張り．ごたごたとぼろ着物が，かかっている。

左側中央の棚に，食器類が並んでいた。この棚は昨夜のように燭台にもなる。

右奥の隅に高さ40cmに，丸太を縦列に並べた寝台がある。家族は丸太に添うて寝る。

寝具は薄い毛布である。寝台の傍に囲炉裏があって,その上にぶら下っている竹カゴの中には，ブジウ(Bugio吠え猿)，アンタ(Anta ブラジル貘)，ポルコ・ド・マット(Porcodo Mato山豚)，カエテツー（Caetetu猪)などの獣頭骨が，薄気味悪く入っている。最近までは弓矢で獲物を追っていたが.今日では猟銃を使用している。「弓矢と猟銃とでは,どちらがよいか」との質問に対して，「弓矢は狙った獣は必ず獲るし,またその近くにいたものは遠くに逃げないから,次にも同じところで獲れる。猟銃は狙ったものだけで,他は銃の音で殆んどが遠く逃げてしまう。併し猟銃は便利だ」と云っていた。猟銃のような高価なものは，多分インジオ保護局の給与であろう。

寝台の下に生捕った山豚を飼っていた。山豚の牙を抜いて家畜として飼育し，昼間は外に

写真 99　酋長の竹カゴ編み。

写真 100　酋長夫婦と子供。酋長の手にあるのは弦の楽器

出し,夜になると家族の一員として住家に入れる。現在の家畜豚は野生の山豚をこのようにして飼い慣し続けて,改良して来たのかも知れない,と思った。

(k)グアラニー語の数詞

次の数詞は同種族であっても,地方に依って多少の相達がある。 当部落で使っている数詞は1～4まで基本数詞である。

1 は ペテン (Peten) 2 は モコエ (Mocoe) 3 は ボアプ (Boapu)

4 は イヌンヅー(Inundu)

5, 6, 7, の数詞をいい表わす場合は, 4の基本数詞に再び1,2, 3, の数詞を加える。

即ち5 は イヌンヅーペテン (Inundu Peten)

6 は イヌンヅー モコエ (Inundu Mocoe)

7 は イヌンヅー ボアブー (Inundu Boapu)

然し,数詞が多くなると土人の頭脳では記憶が困難になるのか,部落の経済社会では必要性がなかったのか,8以上の数詞は,沢山即ちアパー(Apa)という言葉で云い表わす。これ以上の数詞はない。

(l)クチン(Cutim　ローソク)

日常生活ではローソクを使用していない。夜の明りは家族の傍の焚火の光りであるが,祝い事とか,特別の催し物をする時には,その場でローソクを作る。ローソクの燈心は布を細く巻き.その上から薄黒い蜂の蜜蝋で小指ほどの太さに,細長く約30cmほどの長さに鮨巻きのように被い包む。ローソクは軟かく粘り気があるので,何処にでも附着する。

(m)　タクワラの楽器

楽器に使用している竹はタクワラといって,竹類の内でも肉質が薄く,節間が長い。楽器の竹筒を作る場合は2節の内1節を残して他節を切る。残した節の部分を地面に落とすと前記のように,先端の切り口からポンと鈍い音が出る。

竹筒楽器の表皮には絵模様が彫り込まれている。この絵はグアラニー族の生活に探い関係を有するので,この絵模様について説明しよう。

Ⅰ　サント(Santo)

サントは神聖なるキリストを意味して十字を描いている。

1610年ごろ,ジェズイッタ派の僧による土人教化の影響を受けての図象である。

Ⅱ　グワラシ-(Guaracy)

太陽を意味する。グアラニー族は古来の裸族であったので,太陽を神と信じていた。太陽

は寒さから身を守ってくれる。又，太陽が現われると，植物や動物の食べ物が得られるので，大なる神として信じていた。

Ⅲ　クニャン(Cunha)

女性を意味する。古来より女性の存在は大きい。他部落との戦闘の場合に，男は斬殺するが，女は掠奪して来る。労力と子孫を供給する役割は女性である。男を描くよりも，人間をつくる神秘性をもつ女を描くのが自然である。

Ⅳ　ロッケ(Roque は山)

この場合は森林を示している。土人の住む草舎，食料の獣類．鳥類を豊富に供給してくれるのは森林である。

Ⅴ　パラ－ (Para 川)

Ⅵ　ピラ(Pira 魚)

川と魚を意味する。魚の棲む川はグアラニー族にとって，食料を供給してくれる川で森林の次に大切なものである。

筒楽器に彫られている絵模様は4区画に分刻している。各区の彫刻に象徴される絵の意義を解読してみる。

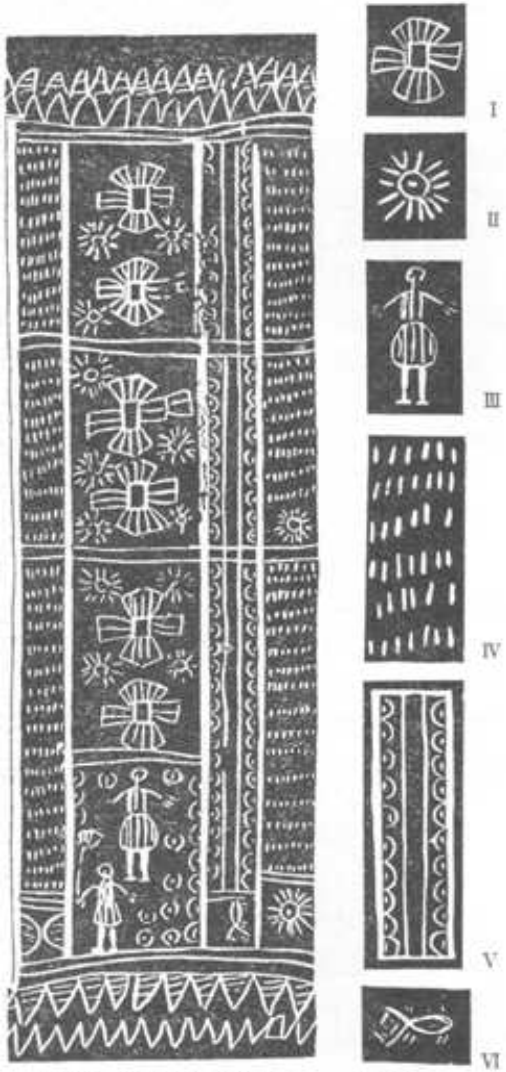


図 103　竹筒楽器の彫絵原図　　図 102

山に太陽が輝やいている
川に魚が棲んでいる
山の中で女の子は毎日太陽とサントに護られている。
山には木が生えている。

マラカー(Maraca)

写真100の酋長の手にしている瓢はマラカーと呼ばれている。瓢の中に小石や硬い木の種子を入れて，振り鳴らす楽器である。

ビオロン(Violao)

この楽器はグアラニー族の手造りのものではない，極めて近代的楽器なので説明は省略する。

(n)グァラニー族の生活

イタチンス山脈に棲むグアラニー族は農業，狩猟，竹細工などを学んで生活している。

農業ではトウモロコシ，サツマイモ，マンジオカなどを家屋の周囲にわずかづっ植えている。農事は女の仕事で，古来からの習慣にもとづいている。探検隊の滞在中に，母親が木

の棒で畑に穴を開ける後から，女の子はトウモロコシの種子を穴に入れ，手で穴に土を入れている状況を面のあたり見ることが出来た。

男は早朝に狩猟に出て，鳥獣の獲物を持って来るだろう。時には蜂蜜，野生の果物もあったろう。竹カゴを編み，町に出て物々交易をしているようであった。犬，山豚，小鳥などを飼育している。

昔は裸族であったが今では全般的に着物を着ている。

炊事道具は素焼きの土鍋であるが，皿は近代的のホーローびきで，長年使用しているので半分以上ホーローが剥げ落ちていた。

グアラニー部落の土地は政府から30アルケレス（1アルケールは24,200㎡）　賦与され，保護部落の指定を受けている。

サンパウロ州に居住しているグアラニー族は，隣接のパラナ州より移動して来た種族であるといわれている。

グアラニー部落の滞在日数はわずかであったが，土人との親しみは更に深まっていく感があり，カピトンから，もう少し滞在を延ばすように望まれたが，探検隊の予定日数も過ぎたので，グアラニー族の人々に「バ・エブレコ（さよなら）の言葉を残して下山した。

1896年ごろにリカ-ルド･クローネ博士は,イタリリー川流域とペイシ川の河畔に居住するグアラニー族の男８名，女５名の頭部を測定して，平均示数82.4で広頭型を示し，生粋のグアラニー族であると報告している。

その時から40年余経過した今日，この地帯のグアラニー族は，その後裔であったと推察される。　『栗原科学研究所 NATURA　自然　Vol. 1　　No.1 1940』 より

@ @ @ @ @ @ @ IV　　コロニア時代の考古学

日本からブラジルに移住し,サンパウロ州の奥地で開拓に従事した日本人の大部分は,先住民族の石器,土器などを見付けて,それを物置小屋の片隅に,住宅の軒下に,木の根元に,時には神棚に,それぞれに置き,又古墳の発見で情報を寄せるなど,考古学に関心をもつ者が多かった。こんな時代にコロニアの研究機関は独白の姿で誕生していた。

A. 栗原自然科学研究所

サンパウロ州の首都サンパウロ市の北西約800km,即ちマット･グロッソ州境近くに第ア

リアンサ移住地がある。これに隣接して第二，第三，熊本移住地がある。第一アリアンサの一角に，粟原自然科学研究所を創設した神屋信一氏は，大窪文秀，勝浦茂雄両氏の協力を得て，私設天文台を建設した(1932年ごろ)。天文，気象の観測のかたわら，周辺の畑地から石器，土器を発掘したり蒐集，又は昆虫採取などを続けていた。さらにこれらの研究の糾合に馳せ参じたのが，橋本梧郎氏(植物，生物学)と著者(考古学)であった。

天文と気象の研究は，京都の花山天文台と提携して，調査資料の送附並びに文献の交流を行なった。植物部門では天皇陛下に植物標本を献上。日本植物学界との標本，文献の交流を行なった。考古学部門では前記の4移住地から土器，石器を蒐集し，発掘並びに遺跡の発見などを行なった。

写真 104　ボゴアス一貝塚にて　中央が八幡一郎氏と右端は橋本梧郎氏（1954年9月12日）

サンパウロ市に研究所を移転してから後は，リオやサンパウロの博物館との連絡が緊密になった(1935年ごろ)。考古学部門はアレクリン貝塚の発掘，奥地の土塚発掘及び全国から遺物を蒐集した。植物部門は天皇陛下に植物標本を献上(2回目)。1940年には機関誌・自然(NATURA)を出版した。

日本移民の歴史の調査は平野植民地，上塚植民地の外に，アレクリン，アンナ・ディアス，ペル－イベ，イタリリー，ビグア，サントス，フイゲ－ラ，ピリアニット，レノポリスなどの各植民地であった(1939-1941)。

B. ブラジル・インジオ文化研究同好会

サンパウロ州内の考古学研究の学徒で組織したブラジル・インジオ文化研究同好会は1936年3月11日に，ブラジル名″Sociedade Arqeologica Brasileira de Amadores″として官報に登録した。初代会長は市毛孝三氏，2代は中野巌氏であった。最初の発掘はイグアッペ郡ジポブラ貝塚である。この時，考古学の鳥居龍蔵博士を招聘した。その報告は東京人類学会から「ブラジル・サンパウロ州内の考古学的調査」と題して1939年2月に刊行された。

C. 来伯された日本の考古学者

日本の考古学者で来伯されて実際に遺跡の現場を踏破し，調査報告された学者はまことに抄ないが1954年9月に第1回アメリカニスタ会議がサンパウロ市にて開催された折り，八幡一郎氏は出席のため来伯され，会議後カナネア郡コンプリーダ島ボゴアスー（Bogoacu）貝塚を調査され，「日本大学考古学通信」の第3号に「南米土産」（1955年5月）と題して，その模様を書かれた。

サンパウロ州奥地の第1アリアンサ移住地にて，考古学の研究を続けている佐藤収氏は毎年コーヒーの収穫後に，マット・グロッソ州のパンタナール（湿地帯）におもむいて，先住民族の土器を蒐集し，調査をしている。特殊な存在である。

あ　と　が　き

貝塚を構成していた当時の状況を推測すると，貝塚の周囲に原始林があって，人々は自由に果実を食べていたことであろう。ジポブラ貝塚に示される食料は，海の動物と陸の動植物であるが，植物は殆んど腐蝕して痕跡をとどめないことから，植物については殆んど触れなかったが，ヤシの種子が２個出土したので，先住民族が当時利用していたであろうと思われる植物を記載した。

アレクリン貝塚は狩猟生活を反映して，食料の主体は動物である。動物の名称だけの紹介ではブラジルの動物は理解できないと思って，生態まで書くに及んだ。そのために考古学的観点からすれば．主体となる胴体よりも翼の方が大きくなったきらいがある。これは，私が考古学の専門家でないことに原因している。

アレクリン貝塚を発掘したのは2個所であるが，その外に，同じ管轄内のトレス・バーラスの道路上と，これより約30km離れたジヤラサチア区域の道路上にも，同じ形態の貝塚が見られた。平原地帯は早くから開拓されたため遺跡の痕すら認め難い状態になってしまったが，山脈地帯の開拓がそれより遅れたので遺っていた。山脈に沿うた平原地域を調査すれば或いは遺跡の発見は可能と思う。

奥地の土塚を発掘した当時は，余りに新しい時代のもので，余裕があれば，いくらでも発掘はできた時代であった。戦争後，日本人の大部分はサンパウロ市近郊に移転し，情報も得られなくなったことと，農業の近代化にともなって遺跡は崩れて発見に困難となった。土塚民族は野蛮時代と文明時代の板挟みになった混血民族であるが，グアラニー族との関連性が認められるので今後の研究に期待するのである。

サンパウロ州アチバイア市タンケ村　自宅にて

酒　井　喜　重

参 考 文 献

H. von Ihering: Revista do Museu Paulista Vol. 1. 1895

H. von Ihering: Revista do Museu Paulista Vol. 2. 1897

H. von Ihering: Revista do Museu Paulista 1906

Rodolpho von Ihering: Revista do Museu Paulista Vol. 7. 1907

Benedicto Calixto: Revista do Museu Paulista Vol. 6. 1904

Alberto Löfgren: Boletim da Comissão Geografica e Geologica 1893

Narciso de Medeiros: O vale do Ribeira de Iguape 1949

João Fereira da Cunha: Commissão Geografica e Geologica do Estado de S. Paulo 1905

Rodolpho von Ihering: Vida dos Nossos Animais, Fauna do Brasil 1934

Rodolpho von Ihering: Diccionario dos Animaes do Brasil

Melo-Leifão, Candido: Compendio Brasileiro de Biologia Vol. 2. Zoologia 1942

Melo-Leifão, Candido: Zoogeografia do Brasil ed, 2. 1947

Miranda Ribeiro, Alipio: Vida dos Nossos Animais, Fauna do Brasil 1934

Eurico, Santos: Anfibios e Répteis 1941

Eurico, Santos: Pássars do Brasil 1948

Eurico Santos: Mamiferos do Brasil 1945

Eurico Santos: Nossos Peixes Marinhos 1952

Eurico Santos: Peixes da Agua Doce 1954

Eurico Santos: Mundo dos Artrópodes 1959

Eurico Santos: Moluscos do Brasil 1955

Igor Chmyz: Cadernos de Arqueologia 1976

Annette Laming-Emperaire: Guia Para o Estudo das Indústrias Liticas da America do Sul 1967

José Wilson Rauth: O Sambaqui de Saquarema 1962

Caio Del Rio Garcia: Dentes de Animais na Caltura do Sambaqui de Piaçaguera 1971

B. Giaccaria-A. Heide: Xavante 1972

Florestan Fernandes: A Fundação Social da Guerra na Sociedade Tupinambá 1970

E. Roquette Pinto: Rondonia 1935

J. Barbosa Rodrigues: Muyrakytã 1889

Hans Staden: Meu Captiveiro entre os selvagens do Brasil

Livro do Ano: Programa de Ciencia EXITUS 1973

香山六郎: Vocabulario TUPY 1951

ブラジル・インディオ文化研究同好会: ブラジル・サンパウロ州内の考古学的調査 1939

薬原自然科学研究所: Natura 自然 1940

八幡一郎: 日本大学考古学通信 1960

宮崎信江: 採集シャバンテス

橋本梧郎: ブラジルの果実 1978

著者略歴

酒井喜重

両親は富山県より開拓を目指して北海道に移住し．６人兄姉の末弟として明治43年1910、に苫小枚に生れ，後，札幌郡広島村に転籍し．幼年期に札幌市に移る。札幌北九条小学校　札幌第一中学校を修了して上京。明治学院高商部在学中に親を失い，中退して札幌日本殖民学校を経て，昭和9年ブラジルに渡る。

サンパウロ栗原自然科学研究所にて考古学を専攻し，ランゲ･デ･モレッテス氏並びに鳥居龍蔵博士の指導でGipobura貝塚を発掘し，八幡一郎教授の協力を得て「ブラジル・サンパウロ州内の考古学的調査」に発表す。続いてAlecrim貝塚，サンパウロ州の奥地古墳を発掘す。

尚，コロニアの日本移民歴史調査として．平野植民地．上塚植民地を始めとして,Figueira, Lenopolis, SantosのMarape, Prainha, Ibera Anna Dias, Raposo Tavares, Itariri, Pedro Toledo, Jaracatia, Biguaなどを行脚調査す。

昭和16年(1941)にマゼラン海峡を通って一時帰国するも，直後に第二次世界戦争が勃発す。

昭和17年(1942)に大阪倉敷会社に入社し，同年フイリッピン国タルラック州の同社直営

農場にて棉作指導に当る。　昭和19年(1944)フイリッピンのレイテ島作戦中に一時帰国するも，国内混乱のため退社し，北海道札幌興農公社(雪印酪農会社)上野幌農場に勤務す。

後.札幌郡広島村にて種鶏ふ卵研究所を創立し,同村議員に押される。議員在職中の昭和42年(1967)に家族と共に渡伯し,現在サンパウロ市より西北70キロ地点AtibaiaのTanqueに在住す。

(1979年9月7日　独立記念日)

ブラジル・サンパウロ州考古誌

昭和54年11月16日　発行

著　者　　酒　井　喜　重

発行所　　六　興　出　版

印刷・三秀舎　製本・明泉堂

C1979 KIJU SAKAI Printed in Japan